

## 【付録】

### 『源氏物語』 各国語訳翻訳データ

#### 「桐壺」

(イタリア語・ロシア語・中国語・  
ヒンディー語・ウルドゥー語)

#### 「若紫」

(イタリア語・ロシア語・ヒンディー語・ウルドゥー語)

### 『十帖源氏』 翻訳データ 「桐壺」 (中国語)



●イタリア語訳『源氏物語』桐壺 データ 2

小見出し	原文 (池田本校訂本文・伊藤鉄也作成)	イタリア語訳し戻し (Orsi 先生訳)	イタリア語訳し戻し (Motti 氏訳)
1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する「いづれの御時〜」(0001 / 五① / 一七)	いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。	ある天皇の宮中に (いつ生きたかは重要でない)、寝室や衣装部屋に淑女たちの中に、とりわけ高い位ではなかったが、他の誰よりもご寵愛を受けている女性がいた。宮廷の高位の女官たちは、自分がお気に入りになりたいとみんな秘かに願ってたので、彼女らの夢を壊したこの下々端貴族の娘を馬鹿にし、憎しみの目で見ていた。彼女が自分たちより出世したのを見ていっそう心を悩ましたのは、かつての同僚で、衣装部屋に仕える中でも位の低い女官たちだった。	どの帝かははっきり知らないけれど、ある帝のご治世に、数多くの皇妃や女官たちの中で、位はさほど高くないものの、陛下のご寵愛を誰よりも深く受けている女性がいた。より位の高い女官たちは、自分こそ帝から選ばれるはずと確信していたので、この女性を見下し、ねたんだ。同等かそれより位の低い女官たちは、なおさら腹を立てていた。
2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる「朝夕の宮仕〜」(0031 / 五④ / 一七)	朝夕の宮仕へにつけても、人の心をもみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあつくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれるものに思ほして、人の譏りをもえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人なども、あいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。	このように、宮中で優位な立場にいたのではあったが、そのことで女官は常に嫉妬や敵意にさらされていた。やがて、この浅ましい虐待に疲れ果て、彼女は衰弱し始め、どんどん憂鬱になっていき、しばしば実家に帰るようになった。だが帝は、以前ほど健康でも明るくもなくなった彼女に飽きるどころか、かえって日に日に愛情深くなり、非難する人の声をまったく聞こうとせず、つい、その品行は国中の噂になってしまった。上層貴族や廷臣たちまでも、この非常に無分別な執心ぶりに眉をひそめるようになり、	朝夕の宮仕えは彼女を他の女性たちの敵意にさらすばかりで、注がれた怨恨のためだろうか、彼女は病弱になり、悲嘆にくれて実家にしばしば帰るようになってしまった。しかし、ますます彼女を気遣うようになった帝は、周囲の者の非難に耳を貸さずに彼女の世話を続け、絶えることのない噂話の種となった。不本意ながら巻き添えにされた最上級の高官や貴族たちは不満を表し、目を伏せ、これは見るに堪えないほどのぼせぶりで、
3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る唐土にも〜」(0073 / 五⑧ / 一七)	唐土にも、かかることの起こりにこそ、世も乱れ悪しかりけれと、やうやう天の下にも、あぢきなう人のもて悩みぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへの類ひなきを頼みにて、まじらひたまふ。	海の向こうの国では似たような事態が民衆の暴動や大混乱を招いた、とひそひそと囁き合った。まもなく、宮廷人たちは不満を明らかにするようになり、彼女を玄宗皇帝の愛妾、楊貴妃に例える者もあった。だが、このような不満にもかかわらず、陛下の愛情が彼女をしっかりと庇護しているので、誰も公然と彼女をいじめようとはしなかった。	唐の国では同じような状況の下、国は無秩序と騒乱に陥ったと囁きあった。時がたつにつれ、宮廷の外でもこのできごとは不満や心配を広げていき、楊貴妃の例を挙げられるほどになった。彼女への侮辱は止むことがなかったが、陛下が与えてくれる限りなき愛情を信頼し、彼女は宮仕えを続けることができた。
4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活「父の大納言〜」(0103 / 五⑩ / 一八)	父の大納言は亡くなりて、母北の方なん、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ華やかなる御方々にもいたう劣らず、何事の気色をももてなしたまひけれど、とりたててはかばかし後見しなければ、ことある時は、なほよりどころなく心細げなり。	大顧問官だった父親は彼女がまだ幼いときに亡くなった。父親がかなり重要な人物だったと常に記憶していた母親は、あらゆる苦難を乗り越え、通常なら両親が揃っていて経済的に裕福な家の子女にしか許されないような立派な教育を、この娘に施すことができた。もし有力な後見人がこの少女の身边を察じてくれたら、すべてはもっと簡単だっただろう。不幸にもこの母は天涯孤独の身の上で、困ったことが起きるたびに、相談したり慰めてもらう人がいないのを痛切に感じていた。だが娘に話を戻そう。	大顧問官だった父親はすでに亡く、立派な旧家の出である母親は、我が娘が父親の援助のおかげで宮中で出世している他の女官たちに劣るはずがないと確信し、あらゆる公式行事に欠かせないものをすべて調達してやった。しかしながら、確固たる後見人がなかったため、彼女には必要な場合に誰も頼る人がなく、ますます一人で孤立していった。
5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する「前の世にも〜」(0136 / 六① / 一八)	前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなるちごの御容貌なり。一の御子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君、と世にもてかしづききこゆれど、この御匂ひには並びたまふべくもあらざりければ、大方のやむごとなき御思ひにて、この君をば、私ものに思ほしかしづきたまふこと限りなし。	時が来て、彼女は帝との間に皇子をもうけた。おそらく二人は前世でさぞかし強い絆で結ばれていたのだろう、皇子は国中どこを探してもこれ以上の子はいないような、愛らしく将来が楽しみな男子だった。天皇は対面までの日々、はやる気持ちをやっとの思いで抑えていた。だが、宮中に参上するやいなや、皇子を見て、人々がその美しさを噂していたのも大げさではなかったことがわかった。帝の第一皇子は、右大臣の娘、弘徽殿の女官の子で、議論の余地のない正統な後継者として、誰からもしかるべき敬意を払われていた。だが、この新しい皇子ほど美しくはなかった。さらに、天皇はこの赤児の母親を寵愛していたから、特別この子が大切に思えたのだろう。	おそらく前世でも陛下とは深い絆で結ばれていたのだろう。彼女はこの世にまたない、清らかな宝石のような男の子を産んだ。不安に駆られながら子供に会う機会を待ち焦がれていた帝は、急いでその子を宮廷に呼び寄せ、その稀に見る美しさを自らの目で確かめることができた。右大臣の娘である皇妃から生まれていた第一皇子は、行き届いた世話を受け、後見にも恵まれていることから、皇位継承者に指名されることを誰も疑わなかった。とはいえ、この生まれたばかりの皇子の輝くような美しさとは比べものならず、陛下は公の場では第一皇子に特別な情愛を示したものの、私生活では、まるでご自身の宝物のように、生まれたばかりの息子に限りない愛情を注いでいた。
6 帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立場に疑いを抱く「はじめより〜」(0184 / 六⑦ / 一九)	はじめより、おしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑあることの節々には、まつ参上らせたまふ、ある時には大殿籠り過ぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽きかたにも見えしを、この御子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この御子のみたまふべきなめり、と一の御子の女御はおぼし疑へり。	不運にも母親の位は宮中で側仕えをする廷臣たちほど高くなかったので、帝から深い愛情を受け、貴婦人らしい完璧な容姿の持ち主だったにもかかわらず、かなり躊躇した末、帝は彼女を、催し物があるときはもちろん、重要な政務中さえ、いつもそばに置くようにした。ときには、朝方目を覚ましても、彼女を自室に帰さず、そのまま一緒にとどませた。こうして、彼女も自分が望むか望まないかに関係なく、常にお仕えする女官の一人になった。このような事態をすべて見て、弘徽殿の女官は、帝が若皇子への偏愛をこれほどはっきり示していることから、もし自分がしっかり監視していないと、まもなく若皇子が東宮の位に昇進するのでないかと心配になった。	この女官は、いつも帝のそばにお仕えしなければならないような身分ではなかった。したがって、原則としてしかるべき地位のお方に対する敬意をもって扱われていたが、陛下がどんなときもそばに置きたいと主張し、恒例の音楽会やその他のどのような催しにも、他の女性たちより先に彼女に出席を求め、時によっては、共に夜を過ごしたあとも退出するのを許さなかったため、自然と彼女は身分が低いと考えられかねなかった。しかし、男子の誕生後は、彼女が特別に重んじられているのは明らかで、皇妃は、いつかこの子が皇位継承者の地位を得るのではという疑念にかられた。

<p>7 帝は弘徽殿女御を氣遣うも桐壺更衣を寵愛し、更衣の気苦勞は増す 「人より先に～」 (0248 / 六③ / 一九)</p>	<p>人より先に参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御謙めをのみぞ、なほ煩はしう、心苦しう思ひきこえさせたまひける。かしこき御陰を頼みきこえながら、おとしめ、疵を求めたまふ人は多く、我が身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。</p>	<p>何といっても、彼女は競争相手より先だっていた。帝から一心に愛され、皇子たちを授けていた。今も、新しい生活形態に居心地の悪さを感じていたのは、彼女の叱責を恐れるからだった。だから、愛妾は帝の庇護を当てにしていたが、多くの人びとが彼女を侮辱しようとしていた。彼女は自分をとても弱く感じ、巡り合わせで得たすべての名誉も、喜びではなく恐怖の源だと感じたほどだった。</p>	<p>この妃は、誰よりも先に宮廷に迎えられ、陛下の寵愛を誰よりも深く享受し、子供たちをもうけていたのだから、妃の恨みが帝に当惑と不安をもたらしたのは理解できることだった。このように、若い女性が帝の寵愛を得れば得るほど、彼女の悪口を言い、粗探しをする輩も増えていき、もともと脆弱な体で後見もいなかったのに、このような状態は尽きることはない苦惱を彼女にもたらすだけだった。</p>
<p>8 更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける「御局は桐壺～」 (0288 / 七③ / 二〇)</p>	<p>御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふも、げにことわりと見えたり。参上りたまふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿のこかしこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾堪へがたく、まさなきこともあり。また、ある時には、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた心を合はせて、はしたなめわづらはせたまふ時も多かり。</p>	<p>彼女の住まいは、桐壺と呼ばれる殿舎にあった。帝のお部屋に繰り返し行き来するのに多くの女官たちの部屋の前を通らねばならないので、彼女らが腹を立てるのは当然のことだった。また、この往来があまりにも頻繁になると、彼女が通らなければならない道沿いの渡り廊や廊下のあちこちに、おどろかせるためのいたずらが仕掛けてあったり、不快なものが撒き散らされたりして、侍女たちの着物が台無しになったこともあった。あるときは、誰かが柱廊の出入り口に鍵をかけたため、気の毒な彼女はしばらくの間、激しい不安に駆られながら、あちこちを歩き回るはめになった。</p>	<p>彼女の部屋は桐の御殿の中にあった。彼女のところへ行くために、陛下は他の女官たちの部屋の前を通らねばならず、このように頻繁な訪問に対する彼女らの恨みには無理のないところもあると認めないわけにはいかない。一方、あまりにも数多い機会に彼女が帝の許に参上するときにも、その道筋の板の橋、屋根付き廊下などで不愉快な事故が起き、お伴をしたりお迎えしたりする侍女たちの裾がしばしば情けない状態になった。ときには、他の女官たちが申し合わせて、必ず通らなければならない廊下の両端の戸を閉め、彼女を困惑させ窮地に落とし入れることもあった。</p>
<p>9 帝は桐壺更衣への虐待を不憫に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す「ことにふれ～」 (0344 / 七⑨ / 二〇)</p>	<p>ことにふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれと御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を、ほかに移させたまひて、上局にたまはず。その恨みましてやらむ方なし。</p>	<p>日々のこのような状況によって引き起こされる彼女の苦しみが大きく、天皇は彼女のやつれていく様をとても見ていられなくなり、後涼殿に住まわせた。彼女に部屋を空けるため、衣裳部屋の女官長は外の建物に引っ越しを強いられた。事態は好転するどころか、彼女は怒りに燃えた新たな敵を作ってしまったのである。</p>	<p>この種の事件が増していき、言葉で表せないほど彼女を悩ませたので、陛下は不憫に思い、以前から後涼殿に住んでいたある女官を他所に移し、その部屋を彼女に与えた。この時点で、彼女に対する怨恨はもはや際限がなくなった。</p>
<p>10 若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる「この御子三つ～」 (0378 / 七⑩ / 二一)</p>	<p>この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮のたてまつりしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじうせさせたまふ。それに付けても、世の譏りのみ多かれど、この御子のおすけもおはする御容貌、心ばへ、ありがたくめづらしきまで見えたまふを、えそねみあへたまはず。もの心知れたまふ人は、かかる人も世に出でおはするものなりけり、とあさましきまで目を驚かしたまふ。</p>	<p>若皇子は三歳になった。正統な後継者のために用いられる式次第に則り、袴をはく儀式が催された。素晴らしいお祝いの品々が、宝物庫と貢ぎ物倉から集められた。このことも多くの非難を招いたが、男の子に敵意を抱く者はいなかった。日ごとに増す美しさと愛らしい気性が、見る人に驚嘆と喜びをもたらしたからである。実際に、人生経験豊富で多くの人々は、墮落した時代にこのような子供が生まれたことに驚いたと告白していた。</p>	<p>小皇子が三歳を迎えたとき、初袴着用の機会に、第一皇子のために行われたのに何一つ劣らない豪華な儀式が催せるよう、宝物庫と宮中倉庫に収められたすべての財宝が用いられた。このときも、非難の声は多かったが、この男の子の容貌と気立ては、成長するにつれてまれに見るほどの愛くるしきになり、誰もこの子を嫌うことはできず、ものごとの道理がよくわかった人たちは、このような幼な子がこの世に生まれることができたという事実には驚嘆するばかりだった。</p>
<p>11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出「その年の夏～」 (0439 / 八② / 二一)</p>	<p>その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず。年ごろ、常のあつしきになりたまへれば、御目馴れて、「なほ、しばし試みよ」 とのみのたまはずるに、日々に重りたまひて、ただ五六日のほどに、いと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたまつりたまふ。かかるをりにも、あるまじき恥もこそ、と心づかひして、御子をば留めたまつりて、忍びてぞ出でたまふ。</p>	<p>その年の夏、女官はひどく衰弱してしまった。実家に帰る許可を何度も求めたが、聞き入れてもらえなかった。一年の間、そのような状態が続いた。いくら懇願しても、天皇のお答えはただひとつだった。「もう少しだけ、がんばってください」 だが、彼女の体調は日に日に悪化し、五、六日の間、衰弱がさらにひどくなったので、母は宮中に、娘を解放してくれるよう、悲痛な請願書を届けた。敵たちがまた信じられないような不名誉を負わせようと、新たな陰謀を企むのではと恐れ、病んだ女官は息子から離れ、一人でこっそり宮中を去る準備を始めた。</p>	<p>その年の夏、桐の御殿の女官は原因不明の病に苦しみ、実家に帰らせてほしいと願いつたが、陛下は許さなかった。ここ数年しばしば彼女が病んでいるのを見ていたため、もうしばらく宮廷に残るよう頼んだのだけれども、病は日に日に悪化していき、あつという間に彼女は衰弱してしまった。母である高貴な婦人は絶望して、娘を里に返してほしいと帝に懇願し、ついに許しを得た。今回も侮辱の犠牲となることを恐れた彼女は、息子を御所に残し、こっそりと旅立ちの支度をはじめた。</p>
<p>12 帝は絶え入らんばかりの桐壺更衣をご覧になるにつけ途方に暮れる「限りあれば～」 (0488 / 八⑦ / 二二)</p>	<p>限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなさ、言ふ方なく思ほさる。いと匂ひやかにうつくしげなる人の、いたう面瘦せて、いとあはれとものを思ひしみながら、言に出でて聞こえやらず、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを、御覧ずるに、来し方行く末おぼしめされず、よろづのことを、泣く泣く契りたまはずれど、御答へもえ聞こえたまはず。まみなどもいとたゆげにて、いとどなよなよと、我がの気色にて臥したれば、いかさまにおぼしめし惑はる。</p>	<p>天皇は、心ならずも、彼女を去らせる時が来たかと悟った。だが、彼女が、一言も別れの挨拶をせずひっそり去ろうとしたところで、我慢の限界を越え、急いで彼女のそばへ駆け寄った。彼女は顔色も青白く憔悴していたが、まだ美しく魅力的に見えた。帝は何もいわず、彼女を愛情込めて見つめた。この女はまだ生きているのか？ ほとんどそうは見えず、最新の生命の息吹が弱く輝きを放っていた。突然、帝は過去に起きたことも今起こりつつあることも忘れ、彼女を百もの愛称で呼び、泣きながら千度も撫でた。だが彼女は一言も答えなかった。声や姿がかすかにしか届かなかったからで、寝床にいるのも思い出せないかのように、呆然としているようだった。このような光景に、帝はどうしてよいかわからなかった。</p>	<p>守らなければならない規則があり、陛下といえども彼女を引き留めることはできなかったが、旅立ちのときに付き添うことすらできないという事実は、言葉にならないほど帝を苦しめた。かつてはその優雅さと美貌で輝いていた女性が、いまや痩せてきて苦しげな顔を見せ、憂鬱な物思いに沈んでいるが、それを言葉で表そうともしない。そのほとんど生気を失った有様を見て、帝は、今までのこともこれから先のことも考えることができず、泣きながら彼女に向かっていろいろな約束をするのだったが、彼女はそれに答えることもできない。途方に暮れたままざして現実が理解できないかのように横たわっていた。これを直視することもできず、うちひしがれた陛下は、どうしてこのようなことになってしまったのかと自問した。</p>

<p>13 轎車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する「轎車の宣旨〜」(0537 / 八④ / 二二)</p>	<p>轎車（てぐるま）の宣旨などのたまはせても、また入らせてまひて、さらにえゆるさせたまはず。 「限りあらむ道にも、後れ先だたじ、と契らせたまひけるを、さりともうち捨てては、え行きやらじ」 とのたまはするを、女もいとみじと見たてまつりて、 限りとて別る道の悲しきにかまほしきは命なりけり いとかく思ひたまへましかば」 と息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながらともかくもならむを御覧じはてむとおぼしめずに、 「今日始むべき祈りども、さるべき人々承れる、今宵より」 と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながら、まかでさせたまふ。</p>	<p>狼狽、動揺して、駕籠を持ってこさせた。だが彼女を駕籠に乗せようとしているとき、帝はそれを遮って言った。 「わたしたち二人の間には、最後に進まなければならない道程を、決してどちらか一人で歩いて行くことはない、いう誓いがあったではありませんか。どうして貴女を、私から離すことができますか？」 女官はその声を聞き、「最後に……」と言った。  「その待ち望んでいた『最後に』が、今到来したというのに、私は一人で行くのですから、生きていけるならどれほど嬉しいでしょう」  か細い声で、息も絶え絶えに、こう呟いた。だが話す力を見つけたといっても、どの言葉にも非常な苦労と心痛が伴っていた。天皇はどんな犠牲を払ってでも、最期まで彼女を見守りたいと思ったが、祈祷文を読む僧たちがすでに実家に呼ばれているということだった。夕刻までに家に帰らせねばならず、ついに帝は心を決め、駕籠を出発させた。</p>	<p>輿を使う許可を与えて女官の部屋に戻ったが、まだ退出させる決心がつかなかった。 「私たちすべてが進まなければならない道を、私より先にも後にも旅立ちをはしらないと約束してくださったのに、私を置き去りにして行ってしまえるのでしょうか？」 女性はこのうえない苦しみとともに答えた。  私たちを引き裂くのが避けられない道のりを歩いていくのは苦しいです 私が進みたかったのは生きる道でしたのに  「もしこのような結果になるとわかっておりましたら……」 こう言っているうちにも、彼女の呼吸はだんだん弱くなっていき、何かもう一言言いたそうではあったが、もはや息たえだえで苦しんでいた。だから陛下は、最後の瞬間までそばにいられるよう自分の許に引き留めておこうと考えていた。そのとき、彼女の実家から、回復祈願の儀式のために呼ばれた優れた行者たちが、その日の夕刻から祈祷をはじめるので急いでほしい、という知らせが届いた。そのため、心ならずも出発を許した。</p>
<p>14 心塞がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる「御胸つと〜」(0608 / 九⑦ / 二三)</p>	<p>御胸つと塞がりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行き交ふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、「夜中うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。聞こしめす御心惑ひ、何事もおぼしめしわかれず、籠りおはします。</p>	<p>眠ろうとしたが、息苦しいような気がして、目を閉じることができなかった。一晩中、使者が伝言を携えて実家と宮廷の間をずっと行き来していた。最初から知らせの内容は悪く、真夜中を少し過ぎたところで使者が言うには、実家に着いたとき嘆き声や泣き声が聞こえ、そこにいた人たちから、女官が先ほど息を引き取ったばかりと知った。天皇は何も理解できなかったように、呆然と立ちつくしていた。</p>	<p>激しい苦悩に襲われた帝は、目を閉じることができず、一晩中寝ないですごした。帝が送った使者はまだ宮廷に戻らず、焦りと不安に苦しんでいると、その使者が悲嘆に暮れて参上し、泣きじゃくりながら、桐の御殿の女官が真夜中を少し過ぎたころ亡くなったことを伝えた。この知らせを聞いて、帝は気が抜けたようになって自室に閉じこもってしまった。</p>
<p>15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する「御子は〜」(0644 / 九⑩ / 二四)</p>	<p>御子は、かくてもいと御覧ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ、例なきことなれば、まかでたまひなんとす。何事かあらむともおぼしたらず、さぶらふ人々の泣き惑ひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを、よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれに言ふかひなし。</p>	<p>若皇子といっしょにいるのは、父にとってこの上ない喜びだったが、この出来事の後では、宮廷から離れたほうがよさそうに思えた。若皇子は何が起きたのかはわからなかったが、使用人たちがみんな嘆き悲しみ、天皇も泣き続けているのを見て、何か恐ろしいことが起きたに違いないと直感していた。もっと普通の別れであっても人は不幸になることを知っていた。だが、これほど悲痛な泣き声やうめき声を聞いたことはなかったので、これはただならぬ別離に違いないと考えた。</p>	<p>せめて若皇子だけは自分の手元に置きたいと願っただろうが、このような状況で子供が御所にどまるのはもってのほかであり、母の実家に送られた。若皇子は何が起きたのかわからず、宮中の人たちが嘆き悲しみ、父がとめどなく涙を流し続ける様を見て驚いていた。自分の親と別れることほど辛いことはないであり、このときの哀しさを言い表すのはなおさら不可能だ。</p>
<p>16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒に泣き焦がれる「限りあれば〜」(0684 / 一〇② / 二四)</p>	<p>限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、同じ煙にのぼりなん、と泣きこがれたまひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて、愛宕といふところに、いといかめしうその作法したるに、おはし着きたる心地、いかばかりかはありけん。</p>	<p>葬儀が始まろうとしたとき、若き女性の母は、娘の棺を燃やす煙の横に、自分の亡骸を燃やす煙が上っていくようだと呼んだ。葬儀に参列する後宮の女官たちと同じ車に乗った。法要は愛宕で、荘厳に執り行われた。母の愛は抑えようもなく、娘の遺骸を見ているうちはまだ生きているかのように思っていた。</p>	<p>宮中には、遵守しなければならない掟がある。よって葬儀も慣例に従って行われ、母は娘といっしょに煙の中に消えてしまいたいと思いつつ、激しく涙を流しながら、侍女たちが乗る車に腰を下ろし、厳かな法要が行われる愛宕（おたぎ）に到着した。しかしそのときの母の心境はどんなものだっただろうか？</p>
<p>17 気が動転している母は、火葬の現実も受け入れられず諦めきれない「むなしき〜」(0712 / 一〇⑤ / 二四)</p>	<p>「むなしき御骸（から）を見る、なほおはするものと思ふが、いとかひなければ、灰になりたまはん見たてまつりて、今は亡き人、とひたぶるに思ひなりなん」 と、さかしのたまひつれど車よりも落ちぬべうまるびたまへば、さは思ひつかし、と人々もてわづらひきこゆ。</p>	<p>火葬用の薪に火がつけられてようやく、そこに横たわっているのが死体だと理解した。理性を取り戻して何か話そうとしたが、よろめいて車から落ちそうになり、周りにいた人たちは顔を見合わせて言った。 「やっど、今、わかったらしい」</p>	<p>「亡骸を目の前にしながらも、まだ娘がこの世にいると思わずにはいられませんでした。灰になってしまったところを見れば、もう逝ってしまったとあきらめざるを得ないでしょう」 このように思慮深く言っていたけれども、今は取り乱して、今にも車から落ちてしまいうような有様で、侍女たちは何か起きないかと恐れ、なすすべもなく困り果てていた。</p>
<p>18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す「内裏より御使〜」(0741 / 一〇⑧ / 二五)</p>	<p>内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだにいはせずなりぬるが、あかず口惜しうおぼさるれば、いま一階（ひときざみ）の位をだに、と贈らせたまふなりけり。これにつけても、憎みたまふ人々多かり。</p>	<p>宮中からやってきた使者が、亡き女性を第三位の女官に昇進させるという勅令を読んだ。棺の横でこの長文の勅令が読まれるのは、まことに辛いことだった。天皇はもっと前に彼女を上級女官に任命しなかったことをほろ苦く後悔し、そのため今になって一階級昇進させたのだった。多くの者がこの栄誉にまで嫉妬した。</p>	<p>御所からの使いの者が到着した。この使者が、女官に宮中の第三位が授与されると発表し、高らかに勅令を読み上げる様は、言葉にならないほど悲しいことだった。生前に皇妃の称号を得ることさえなかったのを、おそらく陛下は深い悔恨の念にかられ、せめて一階級でも昇進させたいと思ったのだろう。このときも、彼女は多くの人の憎悪の的となった。</p>

<p>19 聡明な女房たちは桐壺更衣の美質を追想し、思慕の情をもって偲ぶ「もの思ひ知〜」(0775 / 一〇① / 二五)</p>	<p>もの思ひ知りたまふは、さま容貌などのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりしことなど、今ぞおぼし出づる。さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねみたまひしか、人柄のあはれに情ありし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とは、かかるをりにやと見えたり。</p>	<p>だが比較的柔軟な考えの人たちは、彼女が稀有の美貌の持ち主だったことや、上品で愛想のよい物腰だったことを思い出しはじめた。また、こんなに優しい女性を嫌う者がいたというのは恥ずかしいことで、もし彼女が他の女性たちより不当に優遇されることがなかったら、誰も彼女の悪口をいわなかったろう、と言う人もいた。</p>	<p>それでも、ものの意味がよくわかった人たちは、彼女が亡くなった今、あれほど面持ちが淑やかで、人柄が穏やかで優しくあった彼女を憎むことなどできなかったことを思い出すのだった。陛下が彼女に寄せていた過度なまでの愛情が激しい嫉妬の原因だったのだが、彼女の気品ある容姿と繊細な心映えは、より高い位の女官たちをも嘆き悲しませた。「逝ってしまった今となっては……」という歌の一節がまさにこのような場合を言い表している。</p>
<p>20 秋となり帝はただ涙の日々の中、弘徽殿女御は桐壺更衣を許さない「はかなく〜」(0809 / 一一① / 二六)</p>	<p>はかなく日ごろ過ぎて、後のわざなどにも、細かにとぶらはせたまふ。ほど経るままに、せむ方なう悲しうおぼさるるに、御方々の御宿直なども絶えてしたまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほゆるしなうのたまひける。</p>	<p>天皇の命により、七週間の服喪期間が厳粛に守られた。時は過ぎたが、帝は宮中の女官たちから遠ざかったまま暮らし続けていた。帝が昼も夜もほとんどひっきりなしに泣き続けるので、従臣たちも暗い毎日を過ごしていた。弘徽殿と高位の女官たちは、まだ情け容赦なく、口々に言い合った。「天皇はあの女が生きていたところに劣らないほど、その思い出に取りつかれておられる」</p>	<p>日は次々と過ぎていき、陛下はすべての法要が慣例に従って行われるよう留意した。時は過ぎたが、悲しみに沈んだままで、妻妾たちの夜のお伴さえ辞退していたから、陛下が夜も昼も涙に明け暮れる様を見ている彼女たちにとっても、秋は涙の露で濡れていた。それでも、第一皇子の母で帝の正妻が住む弘徽殿の女官たちは、彼女を許すことはできなかった。「死んでしまった今となっては休まることのない愛でございませぬ」と言い合った。</p>
<p>21 帝は若宮を恋しがり、野分だつ夕暮に靱負命婦を更衣の里に遣はす「一の宮を〜」(0850 / 一一⑤ / 二六)</p>	<p>一の宮を見たてまつらせたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほしいでつつ、親しき女房、御乳母などをつかはしつつ、ありさまを聞こしめす。野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりもおぼし出づること多くて、靱負(ゆげい)の命婦といふを遣はす。</p>	<p>時折、帝は第一皇子である弘徽殿の息子に会った。だが、そうするとかえって亡き婦人の息子に会いたいという欲望が募るばかりで、その成長ぶりを伝えてくれるよう、かつての乳母など、信頼のおける従者たちを、実家へ派遣し続けた。秋の彼岸が訪れ、夕刻の強い風が、肌にひんやりと感じられるようになった。多くの思い出に煩悶した帝は、箆を担ぐ警備兵を父に持つ若い女性に手紙を託して、亡き婦人の家に使わせた。</p>	<p>帝は第一皇子を見ると、すぐにもう一人の若皇子に思いを巡らせてしまい、皇子の消息を聞くために、信頼できる侍女や乳母を使いに行った。秋風が田畑を吹き抜け、日没には急に肌寒さを感じるような季節になり、いつにも増して思い出に浸っていた天皇は、靱負(ゆげい)の命婦と呼ばれる侍女に伝言を託した。</p>
<p>22 帝は夕月夜の美しい折に催した管弦を思い出し、更衣の面影に浸る「夕月夜の〜」(0877 / 一一⑨ / 二六)</p>	<p>夕月夜のをかしきほどに、出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなるものの音を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりし気配容貌の、面影につと添ひておぼさるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。</p>	<p>月明かりが美しく、使いの女を見送った後、帝はしばし夜の景色を眺めた。まさにこのようなときに、帝は楽器を奏でよう命じたものだった。囁くような彼女の声が、一風変わった形の調和と混じり合っていたこと、その面差し、表情、姿、彼女の持つすべてが一風変わっていたことを思い出し、このような歌を思った。「暗闇の中の現実、夢とほとんど変わらない」今の帝の願いには、かつての夜々の幻想的な生命のような、実体を伴わない本質で十分だっただろう。</p>	<p>陽の沈むところに現れた月の光がまばゆい夜で、命婦を下がらせてから、ふたたび帝は物思いにふけった。これと似た夜に、しばしば桐の御殿の女官に楽器を奏でてほしいと頼んだものだった。弦をつまびいて旋律を奏でる彼女の面差しと仕草は、他のどんな女性とも似てないように思え、彼女の言葉も他の女性とは違うこだまを返してきた。これらの思い出は常に影のように帝に寄り添ってはいたものの、まだ「夜の闇の中の現実」よりもはっきりとは感じられなかった。</p>
<p>23 命婦は亡き更衣の邸に入り、八重葎で荒れた庭には月影が差し込む「命婦かしこ〜」(0907 / 一一⑫ / 二七)</p>	<p>命婦(みょうぶ)かしこにまうで着きて、門引き入るより、気配あはれなり。やもめ住みなれど、一人一人の御かしづきに、とかくつくろひたてて、めやすきほどにて過ぐしたまへる、闇にくれて臥しづみたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎(やへむぐら)にもさはらずさし入りたる。</p>	<p>使いの女は屋敷の門の前に着いた。それを押して入ると、異様な光景が目に入った。老婦人はだいぶ前から未亡人であり、家屋の管理は、すべて娘にかかっていた。だが、この娘が亡くなってから、老齢と絶望に打ちひしがれた母は、もう何も手入れをしなかった。雑草がそこかしこを占領し、この荒廃ぶりを助長するように、秋風が吹きすさんでいた。蓬の大きな茂みがびっしりと生え育ち、その隙間からわずかに月の光が差し込んでいた。</p>	<p>目的の館に到着し、車が入口の門内へ通されたとき、命婦はその場所が深い悲哀に包まれているのに衝撃を受けた。かつて桐の御殿の女官の母は、未亡人で一人住まいであっても、娘の幸せのため、幾分でも快適に住めるように何とか屋敷を手入れしていた。しかし今、屋敷は苦悩の闇に覆われ、涙で打ちひしがれていて、雑草が生い茂り、庭は突風で荒らされたようで、月の光だけが何事もなかったかのように枯れ枝の隙間から差し込んでいた。</p>
<p>24 更衣の母は命婦と対面し感極まり涙し、命婦は帝の仰せ言を伝える「南面に〜」(0937 / 一二② / 二七)</p>	<p>南面(みなみおもて)に下ろして、母君もとみにえものものたまはず。「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の、蓬生の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなむ」とて、げにえ堪ふまじく泣いたまふ。「『参りてはいとど心苦しう、心肝もつくるやうになん』と、典侍の奏したまひしを、もの思うたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたうはべりけれ」とて、ややためらひて、仰せ言伝へきこゆ。</p>	<p>使いの女は、玄関の前で車を降りた。初め、母親は何と言って迎えたいのか、言葉も見つからなかったが、ややあって言った。「ああ、わたくしは長生きしすぎてしまいました。貴女のような美しいお使いの方が、家の入口をふさぐ露に濡れた敷をかきわけて来てくださるとは思いもしませんでした」そして、こらえきれずに涙があふれた。そこで、箆を担ぐ警備兵の娘は言った。「宮中のある侍女がここへ参りましたとき、哀れを催す情景に心が張り裂けそうだった、と陛下に申しました。奥様、私も同じです」それから、少し躊躇したあと、天皇からの伝言を伝えた。</p>	<p>南向きの主玄関の前で命婦が車を降りたとき、母をはじめは言葉が発することもできなかった。「今まで生きてくるのは辛いことでした。しかし今、このようにご立派な使いの方が蓬の葉を濡らす露の間をかき分けてお越しくださり、恥づかしさで一杯でございませぬ」ようやくこう言ったが、涙を抑えることもできなかった。「宮中の内部屋の第二女官様が、ここへ来て気を失ってしまい、そう深い悲しみを覚えたこと仰っておられましたが、物事の経験が浅い私も、激しい苦悩を抑えることはできません」命婦はこう言ってから、少し気を取り直し、陛下からの伝言を伝えた。</p>

<p>25 命婦は帝の心意を更衣の母に伝え、涙にむせぶ帝からの手紙を渡す「『しばしは～』(0987 / 一七⑦ / 二八)</p>	<p>「『しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひあはすべき人だになきを、忍びては参りたまひなんや。若宮のいとおぼつかなく、露けき中に過ぐしたまふも、心苦しうおぼさるを、とく参りたまへ』など、はかばかしうも、のたまはせやらず、むせかへらせたまひつつ、かつは人も心弱く見たてまつらむと、おぼしつたまぬにしもあらぬ御気色の心苦しさに、承りはてぬやうにてなむ、まかではべりぬる」とて御文たてまつる。</p>	<p>「『しばらくの間、夢から抜け出そうと、自分の心の闇の中を模索しておりました。だが長い瞑想の後にも、どうやって目覚めてよいのかわかりません。ここには誰も私に助言してくれる人がいません。お忍びでこちらへ来ていただけませんか？ 若皇子がそのように悲しく痛ましい場所で過ごすのはいいことではありません。一緒にお連れください！』これだけでなく、他にもたくさんのお話を仰いましたが、混乱して、ため息ばかりつかれておいででした。私に苦しみを悟らせないよう奮闘しておられるのがわかり、最後まで聞かずに急いで宮廷を立ち去りました。これが帝のお手紙でございます」</p>	<p>「『あのときは、まるで夢の中に迷い込んでしまったような心地でしたが、ようやく心が落ち着いて今になっても、あの夢から覚めることはできないとわかり、何よりも、心を慰めるために話す相手もないのが悩みです。どうかお忍びで宮中へお越しただけじゃないでしょうか？ 若皇子が涙の露に濡れた館で過ごさなければならぬのも悲しいことです。だからできるだけ早くお越しください』むせび泣きで息を詰まらせたため、陛下は、それ以上のことをおっしゃいませんでしたが、同時に、他の者たちから気が弱すぎると思われるのを恐れておられるのも明らかで、最後までお聞きできないようなあまりに辛い状況だったので、退出いたしました」 こう言って、命婦は帝の手紙を置いた。</p>
<p>26 帝からの文は、若宮と共に参内するようになると懇ろに促すものだった「目も見え～」(1043 / 一二⑬ / 二八)</p>	<p>「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなん」とて見たまふ。 「ほど経ば少しうち紛ることもや、と待ち過ぐす月日にそへて、いと忍びがたきはわりなきわざになむ。いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、もろともにはぐくまぬおぼつかなさ、今はなほ昔の形見になずらへてもものしたまへ」 など、細やかに書かせたまへり。 宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれとあれど、え見たまひはず。</p>	<p>「目が霞んでいるので、明るいところで陛下のお手紙を見せてください」手紙にはこう書かれていた。 「しばらくすれば収まって、物事もいくぶん落ち着いてくると信じておりましたのに、実際にはそうではありません。月日がたつにつれ、私の人生はますます不条理で耐えがたいものとなっていきます。息子がどうしてるか、始終考えております。あの子の母と私で、共に養育に精を出そうと願っていたのですが、過去の思い出としてわが息子を連れてきて、娘さんに代わって貴女が育てただけませんか？」このような手紙で、いくつもの指示が添えられ、このような歌もあった。 「たかぎ（ママ）の荒野に落ちた冷たい露を固まらせる鋭い風の音を聞きながら、わたしの心は、リラの若い茎へと飛んでいく」それは象徴的に若皇子を示していた。だが婦人は、手紙の最後まで読み終えなかった。</p>	<p>「この気高いお言葉は、苦しみで曇ってしまった私の目には光明のようでございます」 高貴な婦人はそう言って読んだ。 「時とともに苦しみと和らいでくれるのを待ちながら生きておりましたが、月日が経っても、この苦しみを乗り越えることができません。幼い皇子のことを思い、貴女とともに皇子の世話ができないのが残念でなりません。ですからお越しいただきたい、そしてあの子が私にとってただ一つの過去の思い出であることを忘れないでください」 その手紙には気遣いがあふれていた。手紙の末尾には、歌が添えられていた。  宮城野に露をもたらす 風の音を聞きながら わが思いは 萩の若木のもとへ飛ぶのです  老婦人は最後まで読むことができず、</p>
<p>27 母君は桐壺更衣の入内のいきさつを語り、横死のようなさまを嘆く「命長さの～」(1094 / 一三⑬ / 二九)</p>	<p>「命長さの、いとつらう思ひたまへ知らるるに、松の思はんことだに、恥づかしう思うたまへはべれば、もしぎに行きかひはべらんことは、ましていと憚り多くな。かしこき仰せ言をたびたび承りながら、自らはえなん思ひたまへたつまじき。若宮は、いかに思ほし知るにか、参りたまはんことをのみなむおぼし急ぐめれば、ことわりに悲しう見たてまつりはべる、など内々に思ひたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも、いまいまして、かたじけなくなむ」とのたまふ。</p>	<p>そして最後に言った。「長生きは苦しみでしかないとわかっていた私ですが、このように長くこの世にとどまってしまう、高砂の松の前でさえ恥づかしさに顔を隠したいほどでございます。いったいどうやって、百の塔を持つ大宮殿に参上する勇気が持てましようか？ 高貴な方のお招きがたびたび届くことも、それをお受けする気にはなれません。ですが、若皇子は（高貴な方のお気持ちをわかっているのかどうか私は知りませんが）宮中にお帰りになりたがっていらっしやいまして、それも当然のこと、ここではしよげかえておられるようでございます。どうぞ、このこと、そして貴女がお知りになった私の思いを陛下にお伝えください。子供にとってこの家はまことに悲しい住処でございます……」</p>	<p>ようやくこう言った。「長く生きすぎるのがどれほど辛いことかよくわかっておりますから、『高砂の松がどう思うか』考えるだけでも恥づかしいことですので、御所へ参内するのはなお一層気が引けてしまいます。陛下からもつたいないお招きを何度も頂戴しましたが、私としましては、どうしてお受けする決心ができませんか？ 若皇子は、いったいどの程度まで状況がわかっておいでか存じませんが、できるだけ早く宮中に帰りたいご様子で、悲しいけれどもこれはわかります。これが私の思いですので、どうぞ陛下にお伝えください。私のような不幸な境遇では、皇子をおそばに置くのは好ましいことでないだけでなく、縁起が悪うございましょう」</p>
<p>28 若宮が就寝した後、勅使役の命婦は役目を終えたために帰参を急ぐ「宮は大殿籠～」(1149 / 一三⑬ / 三〇)</p>	<p>宮は大殿籠（おほとのごも）りにけり。 「見たてまつりて、くはしう御ありさまも奏はべらまほしきを、待ちおはしますらん、夜ふけはべりぬべし」とて急ぐ。</p>	<p>「お子様は眠っているようですね」と、籠を担ぐ警備兵の娘は答えた。「どれくらい大きくなられたか天皇にお伝えするため、お会いしたいところですが、御所で私の帰りをお待ちでしょうし、もう遅くなったことでしょう」急いで出発しようとしたところ、</p>	<p>そのとき幼い皇子は自室で休んでいた。 「自分の目で皇子さまを拝見して一部始終を報告したかったのですが、陛下は私が戻るのを待ちでしょうし、夜もふけて参りました」 使いの女は、出発の支度を急ぎながらこう言った。</p>

<p>29 亡き更衣の母君は、横死した我が子への尽きせぬ思いを命婦に語る「くれ惑ふ〜」(1163 /一三⑩ /三〇)</p>	<p>「くれ惑ふ心の闇も堪へがたき片端をだに、はるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも、心のどかにまかでたまへ。年ごろ、嬉しく面だたしきついでにて、立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、返す返すつれなき命にもはべるかな。生まれし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、『ただ、この人の宮仕への本意、かならず遂げさせたまつれ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』と、返す返す諫めおかれはべりしかば、はかばかしく後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに、出だしたてはべりしを、身にあまるまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつ、まじらひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなりそひはべりつるに、横さまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなん、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になん」と、言ひもやらず、むせかへりたまふほどに、夜もふけぬ。</p>	<p>母親は言った。 「暗い思いの闇の中をさまよう者も、会話の中から、一步一步を導いてくれる一条の光を見いだすというのが本当なら、どうぞお時間のあるときに、ご随意に会いに来てください。以前は、喜びや勝利のときにこの家へお越しくださいましたが、今運ばれるお知らせはこのようなことなのです。運に身を任せるのはなんと愚かなことなのでしょう。娘が生まれたときから、父親は、自分のしたいことがよくわかっており、死の直前まで、娘は入内させよと言いつけておりました。万一自分が死んでもこの期待に背くことのないように、と絶えず私に託しておりました。後見する人がいないことで、ずいぶん苦勞もするだろうと思いましたが、そこで、その望みを叶えてやろうと決めました。宮中で、娘はもったいないほどのご寵愛を受けていることに気づき、非情な意地悪の試練にも黙って耐えねばなりません。そのうち憎しみが積み重なり、苦痛の重みに耐えきれなくなった娘は、まるで殺されたかのように死んでしまいました。実際には、帝がご賢明にも娘に向けてくださったご寵愛は（少なくとも私の心の曇った闇の中では、しばしばのように思われます）、無関心でいてくださるよりもっと残酷なものでございました」 こう言うと、涙でそれ以上話すことができなくなった。夜は更けていた。</p>	<p>「貴女とお話したいのです。そうすれば、途方に暮れた私の心を覆い隠す闇をほんの少しでも散らしてくれるでしょう。どうか内々に会いに来てください。これまで貴女さまは何度となくわが家を訪問されましたが、どれも喜ばしく縁起のよい機会でした。それなのに、今日このような御伝言を持って私のところに来られたのは、ほんとうに悲しい運命です。娘が生まれてから私はあの子に望みを託してきましたし、あの子の父親の大顧問官も、亡くなる直前までこう申しておりました。『娘を宮中に入れたいという私の願いを引き継いでほしい。私はもう生きていないだろうが、がっかりさせないでくれ』私自身は、後ろに有力な庇護者が控えていないのに宮仕えなどさせるものではないと思っておりましたが、わが夫の最後の望みを無にしないために娘を入内させました。しかし、それから陛下が数限りない機会に轟刷してくださるようになると、娘は他の女性たちと同じように扱われないことによって被る居心地の悪さにじっと耐えていたのでしょう。そのうち怨恨が積み重なり、不愉快な出来事が続くようになって、ついにはあなたもご存じのことが、どうてい自然とは思えないような形で起きてしまいました。ですから今、陛下が娘にたっぷり愛情をお示しくださったことを悔やむべきなのか、思い悩んでおります。でも、これも狼狽した心の闇が言わせた戯言にすぎませんが」 高貴な婦人が涙を抑えきれず、話を中断したとき、夜はすでにふけていた。</p>
<p>30 命婦は帝が悲涙の内に更衣との因縁を偲ぶさまを語って帰参を急ぐ「上もしか〜」(1256 /一四⑩ /三一)</p>	<p>「上もしかなん。 『我が御心ながら、あながちに人目驚くばかりおぼされしも、長かるまじきなりけり、と今はつらかりける人の契りになむ。世に、いささかも人の心をまげたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはては、かううち捨てられて、心をさめむかたなきに、いとど人わろうかたくなになりはべるも、前の世ゆかしうなん』 と、うちかへしつつ、御しほたれがちにのみおはします」と語りて尽きせず。泣く泣く、 「夜いたうふけぬれば、今宵過ぐさず、御返り奏せん」と急ぎ参る。</p>	<p>「すべて、同じことを、帝も仰いました」 若い女は答えた。 「更にこのように。『私たちに許された時間がこのように短くなければならなかったのは、おそらく私が、自分の意志や判断と戦うことなく、周囲をとまどわせるほど向こう見ずな情熱に屈してしまったからでしょう。差し迫った別離を定められた者にふさわしい、奔放で激しい情熱でした。そして私の愛情で誰も傷つけてはいけないと誓ったのに、ついに彼女は、彼女のせいで横取りされたと信じた多くの人からの耐えがたい憎悪を背負ってしまいました』天皇が一日に何度も泣きながらこう仰るのを聞きました。さて、夜もほとんど終わりそうです。朝になる前に、伝言を御所にお持ちしなくてはなりません」 若い女も泣きながらこう言い、急いでその場を離れた。</p>	<p>「陛下もこのように仰っています。 『周囲を啞然とさせるほど激しい情熱は、長くは続かない定めで、人間にとって致命的な絆だ。今となってはそれがよくわかる。わたしは誰かを侮辱したことなど断じてないと確信していたが、あの人のことで言われなき恨みを誘い、最後はこうして心を慰める術もなく一人残され、頑固で惨めな様を人前にさらしている。前世から定められていた運命を何とかして知りたいたいものだ！』と涙ながらに何度も繰り返しておっしゃいました」と命婦自身も感極まって話を終えた。</p>

<p>31 月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える「月が入り方〜」(1315 / 一五④ / 三二)</p>	<p>月は入り方の、空清う澄み渡るに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いとたち離れにくき草のもとなり。鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かなえも乗りやらず。 「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上るかことも聞こえつべくなん」と、言はせたまふ。</p>	<p>だが沈む月が澄みきった空に輝き、冷たい風に震える草むらで、蟋蟀がやかましく声を張り上げていた。この草むらを離れるのは辛く、箆を担ぐ警備兵の娘は、出発をためらいながら歌を詠んだ。  「鳴き止まぬやかましい蟋蟀の声のように、私の涙も一晩中夜明けまで流れ続けます」  母親は答えた  「さまざまな虫が鳴き乱れる草むらに、雲の上に住む人の涙が、露のように降りかかります」  宮中の人たちは、「雲の上の住人」と呼ばれていたからである。</p>	<p>「もう遅うございます。夜明け前に、貴女のお返事をお伝えしなければなりません」 そして出発を急ぎながら、こう締めくくった。澄み切った空に月が沈みかけ、風のそよぎはさらに涼やかになり、草むらの虫の音は哀愁を誘うようで、別れがたい。命婦は車に乗るのをためらい、  この蟋蟀のように 声を限りに泣き尽くさねばならぬとしても 秋の長夜は 私の涙には足りないほです  と言った。  虫の鳴き声が止むことのない この貧しい屋敷の茂みにも 雲の上に住む人々の涙の露が 置かれています  「私の嘆きは終わることがありません」と高貴な婦人は答えた。</p>
<p>32 鞍負命婦の帰参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る「をかしき御贈〜」(1358 / 一五⑩ / 三二)</p>	<p>をかしき御贈り物などあるべきをりにもあらねば、ただかの御形見にとて、かかる用もやと残したまへりける御装束一領、御髪上げの調度めく物添へたまふ。</p>	<p>それから使いの女に、亡き女官が残した絹の帯を一本、櫛一つと他のいろいろの小物を手渡した。いずれも天皇の贈り物だったが、もはや無用となつてしまったので、過去の思い出としてお返ししたのだった。</p>	<p>丹念に選んだ贈り物ができるような状況ではなかったので、儀式用の衣類一式と髪に飾る櫛一揃えを伝言に添えた。それはいつかこのようにときに使えると考え、娘の思い出として大切に保存しておいた品々だった。</p>
<p>33 亡き更衣の女房たちは若君の参内を促すも祖母君は手放し難く思う「若き人々〜」(1378 / 一五⑩ / 三二)</p>	<p>若き人々悲しきことはさらにもいはず、内裏わたりを朝夕にならひて、いとさうごうしく、上の御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とく参りたまはむことを唆しきこゆれど、かくいまいましき身の添ひたてまつらんも、いと人聞き憂かるべし、また見たてまつらでしばしもあらんは、いと後ろめたう思ひきこえたまひて、すがすがともえ参らせたまつりたまはぬなりけり。</p>	<p>若皇子について来た子守の女たちは、女主人の死のためというよりも、宮中では日常的だった音楽や舞踊などの楽しみが見られなくなったことで意気消沈し、早く宮中に戻れるよう祈っていた。だが母親は、あまりにやつれ果てた印象を与えることがわかっていて、参内はしないと決めていた。その一方、もし子供と別れたら、毎日その子のことばかり考えてしまうに違いなかった。そういうわけで、自分自身がすぐに宮中に連れて行くことも、皇子一人を行かせることもしなかったのである。</p>	<p>男の子の周りにいた若い女官たちは、起きてしまったことをとても悲んでいたのは言うまでもないが、宮中での生活に慣れてきたため、このような生活のもの悲しさを感じていて、幼い皇子が御所に戻されるよう彼女たちも主張した。しかしながら、高貴な婦人は、今置かれている不吉な状況では、自分が若皇子に付き添っていくのは適切でないと思う一方、たとえ短い間であっても、一人残されて若皇子を見ることができないと思うと心配になり、すぐに出発させようという決断がつかかねていた。</p>
<p>34 桐壺帝は女房と語り明かし長恨歌の絵を見ながら命婦の帰参を待つ「命婦は〜」(1420 / 一六③ / 三三)</p>	<p>命婦は、まだ大殿籠らせたまはざりける、とあはれに見たてまつる。御前の壺前栽の、いとおもしろき盛りなるを御覧するやうにて、忍びやかに、心憎き限りの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり。このごろ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ。</p>	<p>箆を担ぐ警備兵の娘は、天皇がまだ起きているのを見た。鉢に植えた花の蕾を眺めるという名目で、四、五人の信頼できる女官と話しなが、ずっと外で待っていたのだった。 そのころ、帝は、朝に夕に、『永遠の非道』の挿絵を眺めるのが常だった。本文を書かれたのは亭子院だが、それに加えて伊勢と貫之の歌が、大和言葉と海の向こうの言葉の両方で書かれている。この詩の筋が、帝のいつもの会話の主題だった。</p>	<p>命婦は、帝がまだ起きていたのを見て、感極まった。中庭の美しい緑を眺めることを口実に、最も教養があって感性も豊かな侍女たちの中から四、五人をそばに呼び寄せ、彼女たちと会話を交わしていた。いつものように、会話の主題は、譲位して亭子院となった天皇によって作られ、このところ陛下が眺めるのが常となっていた「永久の嘆きの歌(長恨歌)」をもとにした絵、伊勢と貫之による大和言葉の歌、それに唐の言葉のその他の詩について、どの詩もその同じ題材について詠まれていた。</p>

<p>35 帝は里邸の様を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返書に心を遣う「いと細やか〜」(1469 / 一六⑧ / 三三)</p>	<p>いと細やかにありさま問はせたまふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御返り御覧ずれば、 「いともかしてきは、置き所もはべらず。かかる仰せ言につけても、かきくらす乱り心地になん。 あらし風ふせぎしかげの枯れしより小萩かうへぞ静心なき」 などやうに乱りがはしきを、心をさめざりけるほど、と御覧じゆるすべし。</p>	<p>さて帝は振り返り、待ちかねたように、使いの女にあれこれと尋ねた。使いの女は、今までいた場所のわびしさを密かに、そして忠実に伝えた後、母親からの手紙を渡した。  「陛下の情け深いお言葉を読み、何と表してよいかわからぬほどの光栄に存じます。ですがその話題により、私の頭には大きな闇と混乱がもたらされました」  手紙はこれだけで、 強い風から守ってくれる木を失った花にわが孫を例えた歌も支離滅裂で筆跡も悪く、まだ悲しみから立ち直ってない人によって書かれたのでなければ、許されないようなものだった。</p>	<p>陛下は、老婦人を訪問したときの一部始終を報告するよう求め、使いの女は慎重に、彼女をこれほどまでに動揺させた出来事について語った。そうして帝は送られた返事を読んだ。 「陛下が私にお与えくださった身に余る光栄に心から感激いたしており、何とお答えしてよいかわからないほどでございます。お言葉をいただきながらも、私の心はいまだ混乱し、闇に包まれております。  嵐から守ってくれていた木が 枯れてしまつて以来 萩の若木の運命を思うと 私の心は落ち着くことはありません」  過度なまでの不安を表した言葉だったが、まだ不安の収まらない心で書かれたものなので、もちろん陛下は好意的に判断しただろう。</p>
<p>36 悲嘆を隠せない帝は更衣入内の頃を思い出し祖母君をも不憫に思う「いとかうしも〜」(1504 / 一六⑩ / 三四)</p>	<p>いとかうしも見えじ、とおぼしづむれど、さらにえ忍びあへさせたまはず。御覧じはじめし年月のことさへ、かき集めよるづにおぼし続けられて、時の間もおぼつかかなりしを、かくても月日は経にけり。あさましうおぼしめさる。 「故大納言の遺言あやまたず、宮仕への本意深くものしたりし喜びは、かひあるさまにどこそ思ひわたりつれ、言ふかひなしや」 とうちのたまはせて、いとあはれにおぼしやる。</p>	<p>天皇は、使いの女のいる前でもう一度、感情を抑えようとした。だが、亡き女官が初めて参上したときのことを思い起こしていると、多くの思い出が蘇り、記憶がどっと押し寄せてきて、あの日々がどうして自分の気づかぬうちに飛び去ってしまったか考えて、恐れおののいた。 「私も彼女の亡き父、顧問官殿が死に際に言い残した願いを叶える最良の方法を、真剣に考えていた。だがもうその話はやめよう。</p>	<p>自身の動揺を露わにしないと心に決め、平静を装おうとしたが、うまくいかなかった。桐の御殿の女官を見初めたときからの時間がすべて頭の中をよぎり、彼女が生きているときには、ほんの少し姿が見えないだけで不安になったのが、今では彼女なしで月日が過ぎていくのが信じられない思いだった。帝は老婦人をたいへん不憫に思った。 「この方が亡き大顧問官殿の遺志を尊重され、娘を宮中に送られたことが報われていればよかったのに、今となってはすべてむなしなことだ。</p>
<p>37 帝は若宮の将来を約束し、贈物から長恨歌の叙に思いを重ねて歌う「かくても〜」(1543 / 一七③ / 三四)</p>	<p>「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなん。命長くとこそ思ひ念ぜぬ」 などのたまはず。 かの贈り物御覧ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりけむしるしの叙ならましかばと思ほすも、いとかひなし。 尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく</p>	<p>もし若皇子が生きていれば、また次の機会も巡ってこよう。長生きができるよう祈ってやらなければ」 女が持ち帰った贈り物を見つめて言った。  「もしお前も魔術師のように、彼女の魂が住む場所を訪問した証としてカワセミの簪を持ち帰ってくれたのだったら！」  こう叫んで、歌を詠んだ。  「彼女を探しに行き、その魂が住むところを伝言によって教えてくれる妖術師がいたならば！」</p>	<p>それでも、皇子が成人した暁には、よい機会が巡ってくるに違いない。この希望を支えとして、どうか長生きしてほしい」と考えた。 命婦は、受け取った贈り物を帝に見せた。その品々の中に、亡き人の住まいにたどり着いた証として、魔術師が中国皇帝に献上した櫛があるのではないかと帝は思ったが、これも意味のない幻想にすぎなかった。  あの人の魂が住んでいる場所を 私に知らせてくれる 道教の老師は やはりいないのですね</p>
<p>38 帝は玄宗と楊貴妃の物語から、更衣との尽きぬ愛情を恨めしく思う「絵に描ける〜」(1572 / 一七⑦ / 三五)</p>	<p>絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いと匂ひ少なし。太液の芙蓉、未央の柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひは麗しうこそありけめ、懐かしうらうたげなりしをおぼし出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかさはむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほど、尽きせず恨めしき。</p>	<p>貴妃の肖像画は、いくら画家の腕が優れていても、絵筆による作品にすぎず、命の香りが感じられなかった。詩人が貴妃の優雅さを、「王宮の湖のハイビスカスや未央宮の柳」に例えているのに対し、肖像画の婦人は絵の具とワニスで塗り立てられ、中国風の気取った表情をしていた。 帝が亡き女官の声や容姿を思い出すとき、花の美しさや鳥の鳴き声も比べるのに値しなかった。二人が朝に夕に繰り返していた誓いを守るのを、運命が許してはくれなかったことを、ずっと嘆き続けた。その誓いとは、彼らの人生が、一つの翼でつながる双子の燕、一本の枝でつながる二本の木のようにありたいということだった。</p>	<p>卓越した絵師の作品であっても、絵筆の技には限界があり、掛け軸に描かれた楊貴妃の顔には、命の輝きというものが欠けていた。たしかに、太液池の蓮の花、未央宮の柳にも似て、中国服に包まれたその姿はえもいわれぬ美しさだっただろうが、帝が桐の御殿の女官の柔和な愛らしさを思い描くとき、花も鳥のさえずりもそれに比べるものではなかった。朝に夕にこのような約束を繰り返したものだ。「天上では羽根を重ねた二羽の鳥に、地上では枝がからまった二本の木になりましょう」だが、彼女の短い生涯は、その願いを叶えることを許さず、永遠の悔いを残してしまった。</p>

<p>39 帝の心を踏みにじるように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る「風の音〜」(1615 /一七⑦/三五)</p>	<p>風の音、虫の音につけて、もののみ悲しうおぼさるるに、弘徽殿には久しく上の御局にも参上りたまはず、月のおもしろきに、夜ふくるまで遊びをぞしたまふなる、いとすさまじう、ものしと聞こしめす。このごろの御気色を見たてまつる上人、女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおしたち、かどかどしき所ものしたまふ御方にて、ことにもあらずおぼし消ちて、もてなしたまふなるべし。</p>	<p>風の音、虫の声を聞いて帝はいつそう深い寂寥の中に沈んだ。ちょうどそのころ、しばらく帝の部屋に立ち入らなかった弘徽殿は、月の光を浴びて夜更けまで音楽を聞きながら座っていたという欲望を感じた。それが帝をひどくいらいらさせたのは明らかで、一緒にいた侍女や廷臣たちも帝の心情を思って、同じように気分を損ない、うんざりした。だがこの攻撃的な女官は自分に与えられた特権を絶対にあきらめない人間で、宮中で重大事など何も起こってないかのように振る舞おうと決めていた。</p>	<p>風の音や蟋蟀の音が陛下に哀しみだけを与えていたというのに、あちらの弘徽殿では、奥方はもうかなり前から帝の部屋に姿を見せず、女官たちが、おそらく美しい月にうっとりしたのだろう、一晚中楽器を奏でて過ごしていた。この時期に音曲とは不適当であり、帝の苦悩を目撃している侍女や宮廷人たちは、不快な思いをしながら聞いていた。皇妃である弘徽殿は尊大で強情な女性だったとはいえ、この振る舞いは、起こったことが彼女にとって取るに足らないでぎとどったということを示していたのだろう。</p>
<p>40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しみ歌う帝は、眠ることすらできない「月も入りぬ〜」(1660 /一八③/三六)</p>	<p>月も入りぬ。 雲のうへも涙にくる秋の月いかですむらん浅茅生の宿 おぼしめしやりつつ、燈火（ともしび）をかかけ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目をおぼして、夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。</p>	<p>もう月は沈んでいた。帝は草の生い茂る屋敷に住む愛妾の母のことを考えた。歌の中にその思いを入れ、母がどんな思いで秋の月が沈むのを眺めたのだろうと自問した。</p> <p>「雲の上の人とされる私たちも、秋月が沈むときには泣いたのですから」</p> <p>燭台の松明の灯りを大きくし、眠らないで過ごした。だが、とうとう右警備隊からの声を聞き、丑の刻が来たのを知った。そこで、人に見られるのを恐れ、自分の部屋へ引き上げた。やはり眠ることができず、</p>	<p>月は沈んでいた。</p> <p>雲の上でも 秋の月は涙でぼんやり曇っているのに どうして藪の茂ったあばら家で 再び輝くことができようか？</p> <p>このように陛下は、桐の御殿の女官の母が荒れ果てた屋敷でどのように時を過ごしているのかと考え、行灯の火が何度もかき立てられたのにもかかわらず、眠れなかった。勤務中の宮中右区域警備隊の声が丑の刻を告げた。ぶしつけな目で見られなくなかったので、ついに内部屋へ引き下がったが、それでも一睡もできなかった。</p>
<p>41 帝は政治まで疎かにしかねない悲しみの中で食事も召し上がらない「朝に起き〜」(1693 /一八⑦/三六)</p>	<p>朝に起きさせたまふとも、 「明るくも知らで」 とおぼし出づるにも、なほ朝政はおこたせたまひぬべかめり。ものなどもきこしめさず。朝餉の気色ばかりふれさせたまひて、大床子の御膳などは、いと遙かにおぼしめしたれば、陪膳にさぶらふ限りは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。すべて、近うさぶらふ限りは、男女、いとわりなきわざかな、と言ひ合はせつつ嘆く。</p>	<p>日の出より早く起きた。 「あの方は、ご自分の窓に曙が訪れてるのを知らなかった」 という伊勢の歌の一節を思い出したかのように、朝見の儀にはほとんど注意を払わず、ご飯を少し口にしただけで、大きい食卓の食べ物にもほとんど気づいていないようだった。それで、給仕頭や召使いたちは、陛下の苦悩を見て嘆き、使用人たちは皆、男も女も、 「何と私たちは役立たずになってしまったことか！」と嘯き合い、</p>	<p>翌朝目を覚ますと、「朝日が昇るのも知らずに」ぐっすり眠っていたところが思い出され、謁見の儀もやる気がないのは明らかだった。体面を繕うためにほんの少しだけ食べ物を口に、正餐で供された料理にもまったく関心がないようで、食事係の者も帝を見つめてはがっかりとため息をついた。陛下のより近くでお世話をする男女も、口々に、どうしようもないと嘯き合った。</p>
<p>42 帝に奉仕する者たちも政道放棄を嘆き楊貴妃の例まで引合いに出る「さるべき契〜」(1731 /一八⑩/三七)</p>	<p>「さるべき契りこそおはしましけ、そこらの人の譏り、恨みをも憚らせたまはず、この御ことにふれたることをば、道理をも失はせたまひ、今はたかく世の中のことをも、思ほし捨てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなり」と、人の朝廷の例までひき出で、ささめき嘆きけり。</p>	<p>帝が何か奇妙な誓願を守っているのだと思っていた。 帝は臣下の陰口には無頓着で、頭の中は彼らの関心事から離れ、自分のことばかり考えていたので、いまや陛下の怠慢という不祥事は、かつてのように国家にとって危険なこととなり、またもやよその国のある皇帝を示唆するようなひそひそ話が始まった。</p>	<p>「まことに、これは前世からの絆のなせる業に違いない。彼女のために起こりうる恨みや非難がわき起こることも気にかけず、彼女のために、良識をすべて無視するところまで来てしまい、今も宮中のお勤めをながしにされてるのは許しがたいことだ」とひそひそと噂し合い、外国のある君主の例までも引合いに出す者もいた。</p>
<p>43 若宮参内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵「月日経て〜」(1762 /一九②/三七)</p>	<p>月日経て、若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならず、清らにおよすけたまへれば、いとゆゆうおぼしたり。 明るく年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしうおぼせど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふくおぼし憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、「さばかりおぼしたれど、限りこそありけれ」と、世人も聞こえ、女御も御心おちおたたまひぬ。</p>	<p>このようにして月日が過ぎ、ようやく若皇子が宮廷に参上した。たぐいまれな美しさの子供に育ち、天皇は心を奪われた。春には皇位継承者を指名しなければならなかったが、天皇は第一皇子を飛び越えてこの男子を立てたい気持ちに駆られた。だが、宮中にはそのような選択を支持する者は一人もいなかったし、民衆がそれを容認するとも思えなかった。実際、そのような選択は皇子に栄光よりもむしろ被害をもたらしたことだろう。そのため、帝はこのような意図があることを誰にも気づかせないよう用心し、信用を得た。なぜなら、皆がこう言っていたからだ。 「あの皇子に対してどれだけ熱狂していても、帝のご執心にはやはり限界があるようだ」宮中の上級女官たちも少し安心し始めた。</p>	<p>月日が経ち、若皇子が御所に到着した。成長するにつれ、その愛らしさはこの世の人とは思えず、何か不安を覚えさせるほどだった。翌年の春に皇位継承者を指名する時期が来たとき、帝は先に生まれた皇子より優先し、この幼い皇子を継承者に選びたいと思っていたが、信頼できる後ろ盾となってくれる人は一人もいなかったし、宮中がその決定を受け入れるとはどうい思えなかったもので、かえって彼にとって不利な結果にならぬ、帝は本意を誰にも漏らすことなく、この計画をあきらめた。だから、陛下が若皇子を愛していても、宮中には守るべき規則があるのだと、みんなすぐに認識し、弘徽殿の皇妃も安心したようだった。</p>

<p>44 祖母君は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去「かの御祖母〜」(1805 / 一九⑥ / 三七)</p>	<p>かの御祖母北の方、慰む方なくおぼしづみて、おはすらん所にだに尋ね行かんと願ひたまひしるしにや、つひに亡せたまひぬれば、またこれを悲しびおぼすこと限りなし。御子六つになりたまふ年なれば、このたびはおぼし知りて恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れ睦びきこえたまへるを、見たてまつりおく悲しびをなむ、返す返すのたまひける。</p>	<p>皇子の祖母は慰めようのないほど落胆し、亡き娘の魂が住む場所を探したくてたまらず、まもなく逝ってしまった。天皇はまたしても深い悲しみに包まれた。今回は男子は六歳になっていたから、何が起こったのか理解して嘆き悲しんだ。そして長年自分を可愛がってくれた亡き婦人の家から連れてこられたときの情景を、悲しそうにしばしば話していた。</p>	<p>桐の御殿の女官の母は、ますますやるせなく、悲しみにうち沈んでいた。そしてついに、娘の行くところはどこへでもついて行きたいとの祈りが叶ったのだろうか、彼女も亡くなり、陛下の嘆き悲しみはこの上ないものとなった。六歳になっていた皇子は、このたびは何が起きたか理解し、悲痛な涙を流した。老婦人はこの数年間若皇子をお世話し、愛情を注いでいたが、何かにつけ、皇子を残して死ぬのはどんなに辛いことだろうと話していたのだった。</p>
<p>45 若宮七歳の読書始めの後は、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服「今は内裏に〜」(1844 / 一九⑩ / 三八)</p>	<p>今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば、読書始めなどせさせたまひて、世に知らず聡うかしこおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧す。 「今は誰も誰もえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などに渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、仇、敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。</p>	<p>そのときから皇子はずっと宮廷で生活していた。七歳で勉学を始めたが、その利発さはずば抜けていて、父親も驚くほどだった。もはや誰も男子に対して無礼に振るまうこともないと考え、弘徽殿や他の女官たちの部屋へ連れていき、こう言った。 「母を亡くしたのだから、この子に優しくしてやってください」 こうして男子は幕を越えて向こうへ行くようになった。どんなに粗野な武士や意地悪な敵であっても、このような子供を見ると微笑ますにはいられなかつただろう。弘徽殿もこの子を追い返すことはしなかつた。</p>	<p>若皇子は、もはや宮中で暮らすことに決まっていた。七歳を迎えたとき、初めて古典を読む儀を執り行うことが許され、並ぶ者のないほどの聡明さを見せた。またしても、父帝の心は乱れんばかりだった。 「もう誰もこの子を憎むことはできないだろう。なにしろ、母に死なれた身の上なのだから、愛情を込めて接してやってほしい」 弘徽殿を訪れる際に皇子を連れていって、こう言い、竹の帳を越えることをお許しになった。どんな猛々しい武者も、執拗な敵意を抱く者も、この子を見ると微笑ますにはいられなかつただろう。皇妃は無関心ではいられなかつた。</p>
<p>46 若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音楽にも秀でる超人さを発揮「女御たち〜」(1904 / 二〇② / 三九)</p>	<p>女御たち二所、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしう恥づかしげにおはすれば、いとをかしううちとけぬ遊びぐさに、誰も誰も思ひきこえたまへり。 わざとの御学問はさるものにて、琴、笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続けば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。</p>	<p>娘が二人いたが、どちらも若皇子のように美しくなかつた。皇子は後宮の女官たちとも遊んだが、彼女たちは、その所作にある優雅さと恥じらいぶりを見て、誰もが同じように、彼の遊びに加わることをこれ以上ない楽しみとしていた。勉強の面においても、皇子はすぐに、琴や笛の音を天空に明るく響かせることを覚えた。もし彼の完璧さを挙げていったら、すぐに人をうんざりさせてしまうだろう。</p>	<p>娘を二人もうけていたが、その容貌は、この皇子の美しさとはまったく比べものにならなかつた。侍女たちも、皇子の前では顔を隠そうともせず、進んで遊びに加わり、その美しさと上品さは気後れするほどだったが、理想的な遊び相手と思っていた。学問の上達はいうまでもなく、琴や笛の巧みな演奏は、雲の上に住む人たちをも驚かせるほどで、皇子の才能の一つひとつ取り上げて褒め称えれば大仰に聞こえ、最後には煩わしく感じられたただろう。</p>
<p>47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を顧て不思議がる「そのころ〜」(1955 / 二〇⑥ / 三九)</p>	<p>そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こしめして、宮の内に召さんことは、宇多の帝の御誠あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館につかはしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人驚きて、あまたたび傾きあやしむ。 「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷の固めとなりて、天下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。</p>	<p>そのころ、朝鮮の人が宮中に参内したが、その中に一人の人相見がいた。それを伝え聞いた帝は、宇多天皇によって発布された外国人入室を禁じる勅令に基づき、御所には呼ばなかつた。だが、極秘のうちに皇子を外国人宿舎に送り込んだ。右書記官が付き添い、その息子として紹介することになった。人相見は、男子の顔立ちに衝撃を受け、頭を何度も振って驚愕した様子を見せた。 「一国の長となる者の特徴を持っておいでです。もしそういう運命であるなら、権力ある王や皇帝の地位に就く前に止まることはないでしょう。しかしよく見ると、その国に混乱や悲劇が伴うのが見えます。万一国の上級役人や王の相談役になった場合には、幸福な結果は見られません。なぜなら先ほど申し上げた、その帝王にふさわしい資質と戦うことになるでしょうから」</p>	<p>そのころ高麗の国から使節団が到着し、その中に顔立ちから未来を読み取ることができる優れた人相見がいることを帝は知った。宇多天皇によって交付された外国人の宮中への入場を禁じる規定のため、宮中に迎えることはできず、極秘裏に若皇子を外国使節の官舎である鴻臚館に行かせた。皇子の後見役を務める右大監督官を同行させ、その息子として紹介させた。皇子を一目見るなり、人相見は驚いたようで、当惑したように何度も頭を下げた。 「この子の顔立ちからは、国の親となって、君主の中で最も高い位に到達することが運命づけられていると言えましようが、もしそうなると、民に混乱と苦痛を引き起こすことになるかもしれませぬ。一方、この顔には宮廷の大黒柱となって天下の政治を支える人となる相も表れていないようです」と言った。</p>
<p>48 博識の右大弁と高麗人が漢詩を作り交わし若宮も興深い詩句を作る「弁も、いと〜」(2019 / 二〇⑬ / 四〇)</p>	<p>弁も、いと才かかしこき博士にて、言ひ交したることどもなん、いと興ありける。文など作りかはして、今日明日帰り去りなんとするに、かくありがたき人に対面したる喜び、かへりては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、皇子もいとあはれなる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたてまつる。朝廷よりも多くの物たまはず。おのづからことひろごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかとおぼし疑ひてなむありける。</p>	<p>書記官はとても知的で教養ある文人だったので、人相見と興味深い会話を始めた。随筆や詩を交換しあい、人相見は短い話をした。「帰国の前日に、このような稀有な才能を持つ方に出会えてたいへん嬉しいことです。出発しなければならぬのは残念ですが、この訪問の素晴らしい思い出を持って帰ることにいたしましょう」若皇子は、たいへん優雅な詩句を贈り、人相見もそれを大いに褒め称えて男子にたくさんの美しい贈り物を捧げた。返礼として、天皇は宮中の宝物庫から豪華な褒賞を送った。それはすべて秘密とされ、厳しく守られた。だが何らかの形で、正統な後継者の祖父である右大臣とその取り巻きが、そのことに気づき、たいへん疑い深くなっていた。</p>	<p>監督官もまた、きわめて学識ある人物で、高麗からの使者と交わした会話はまことに興味深いものだった。漢詩を詠み交わしたりし、高麗人は帰国が迫ったとき、このような稀な人物と会えた喜びと、その一方で別れの悲しみを、きわめて巧みに物語った。若皇子はまことに的を射た歌を詠んだので、使者は皇子を褒め称え、素晴らしい贈り物を差し上げた。また使者の側にも宮廷からたくさんの品が贈られた。陛下はこのことを口にされなかつたが、噂は広まり、皇位継承者の祖父である右大臣は、いったい何が起っているのか疑いを持ちはじめた。</p>

<p>49 帝は若宮を臣籍降下させ朝廷の補佐役にと決めると学問に励ませる「帝、かしこき〜」(2075 / 二一⑤ / 四〇)</p>	<p>帝、かしこき御心に、倭相を仰せておぼしよりにける筋なれば、今までの君を親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけりとおぼして、無品親王の外戚の寄せなきにてはただよはさじ、我が御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなん、行く先も頼もしげなめることとおぼし定めて、いよいよ道々の才を習はさせたまふ。</p>	<p>そこで天皇はその土地の人相見を何人か呼び、自分が見たある兆しのために、この男子に皇子の称号を授けるのを今まで控えていたと説明し、彼らを試した。集まった者たちは、帝がたいへん用心深く対処したということで皆意見が一致し、帝は、この男子を母方の名声や影響力がない皇子にするという危険にさらさないことに決めた。なぜならこう考えたからである。「私の力はたいへん不安定だ。私のために国家の上級役人たちを監督する役目を任せるのがいいだろう」そうすることで男子の将来に適切に対処したと考え、今度は彼の教育に真剣に取り組み準備をして、芸術や学問のあらゆる分野で完璧な成果が得られるよう手配した。</p>	<p>帝は非常に思慮深い方だったから、以前すでに日本伝統の人相見と同じことを尋ね、同じ答えを受けていたので、それまでこの息子に皇族の身分を与えることを躊躇していた。今、高麗の人相見がたいへん賢明であったことを考え、正確な地位や母方の強力な後見がない若皇子を、このような不安定な状況に置いておく場合ではないと確信した。陛下ご自身も、自分の治世がどれぐらい長く続くかはつきりわからなかったから、この少年を皇位継承から除外し、宮廷での役職を与えれば、彼の将来に問題は起こらないだろうと考えた。こう決断し、帝は若皇子にあらゆる学問の道を学ばせた。</p>
<p>50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断「際ごとに〜」(2120 / 二一⑩ / 四一)</p>	<p>際ごとにかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば、世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこき道の人に勸へさせたまふにも、同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべくおぼしおきてたり。</p>	<p>若皇子はあらゆる分野で高い能力を見せ、称号のないままでいるのは惜しいと思わせるほどだった。また、この子を皇子とすると疑惑を引き起こしかねないということでは同意していたので、天皇は星の科学や月の満ち欠けに精通している博士たちに助言を仰いだ。すると全員一致で、源氏族の一員にすることを勧めた。そしてその通りになった。</p>	<p>なるほど才能に恵まれていたから、低い位に落とすのは残念なことだったが、一方では、皇位に就けば世間の疑いをすべて集めることになるかもしれない。占星術師に相談し、やはり同じ答えを得たあと、帝はついに、この息子に源氏の名を与えることを決めた。</p>
<p>51 更衣が忘れられず世を疎ましく思う帝に、先帝の四の宮の噂が届く「年月にそへ〜」(2147 / 二一⑬ / 四一)</p>	<p>年月にそへて、御息所の御ことをおぼし忘るるをりなし。慰むやとさるべき人々(大島本「人々を」)参らせたまへど、なずらひにおぼさるるだにいとかたき世かな、と疎ましようのみよろづにおぼしなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおほします。</p>	<p>年月は過ぎ去っていったが、天皇は亡き女官が忘れられなかった。陛下が夢中になることを期待して、多くの女性が宮廷に送られたが、あの失った女性にかなう女はこの世にはいないと信じ、誰も受け入れなかった。そのころ、その美しさがたいそう評判になっている女性がいた。</p>	<p>陛下が桐の御殿の女官を忘れられないまま、年月が過ぎていった。慰めを見いだすことを期待して他の女官たちを入内させたが、この世には彼女との比較に耐える女性はいないと気づき、周りがあるものがすべてわびしく、つまらないものに感じられた</p>
<p>52 典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏上し帝の気を引く「母后世になく〜」(2173 / 二二② / 四一)</p>	<p>母后世になくかしづきこえたまふを、上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「亡せたまひにし御息所の御容貌に似たまへる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、後の宮の姫宮こそ、いとようおぼえて生ひ出でさせたまへりけれ。ありがたき御容貌人になん」と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねむころに聞こえさせたまひけり。</p>	<p>先帝の四番目の姫君で、帝の未亡人である母は、ほかにない熱心さでこの娘を養育したという噂だった。先帝にもお仕えしていたので、年若い姫君を幼いときから知っていて、宮中に暮らしていない今も会う機会があるという監督局の女官が、とてもその女性と親密だった。女官は言った。「私はこれまで三人の帝の宮中にお仕えしましたが、その期間中、先ほど亡くなった方にならぬ女性、母後のお嬢様を除いて見たことはありません。ほんとうに稀有な美しさの方です」こう話したので、天皇はどのぐらい本当だろうかと思ひながら、注意深く耳を傾けた。</p>	<p>そのころ、先帝の四女で、未亡人となった母后から大切に養育され、その美しさが評判となっている娘がいることを知った。今、陛下にお仕えしている内部屋の第二女官は、かつて先帝に仕え、皇后の部屋に自由に出入りできる身だったので、この若い姫君のことも幼いときから知っていて、今もときどき会うことができた。「わたくしが三人の帝のもで宮仕えをしていた間、あの亡き女官に似た美しさの若い女性に会ったことはありません。ですが、皇后の姫君は、まだご成長中ですが、あの方に生き写しと思えます。まれに見る可憐な方です」と報告した。彼女の言葉は陛下の興味を引き、そのような偶然があるかと思ひに思い、姫君を参内させるよう頼んだ。</p>
<p>53 帝を巡る女たちの怖さを言う四の宮の母が死ぬと、入内の道が開く「母后、「あな〜」(2233 / 二二⑧ / 四二)</p>	<p>母后、「あな恐ろしや、春宮女御のいとさがなくて、桐壺更衣の、あらにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」と、おぼしつみて、すがすがしうもおぼしたざりけるほどに、后も亡せたまひぬ。心細きさまにておほしますに、「ただ我が女御子たちの同じつらに思ひきこえん」と、いとねんごろに聞こえさせたまふ。</p>	<p>母后は、意地悪な弘徽殿の女官が、並外れた冷酷さでかつての競争相手を扱ったことを覚えていたから、非常な不安を覚えた。そして、その不安をあからさまには口にできなかったが、娘を入内させるのを先延ばしにしようとしているうちに、突然亡くなってしまった。孤児になった姫君が悲しみに打ちのめされてることを知った天皇は、これから自分の娘の姫たちと同じようにお世話をしたいと丁寧と言付けた。</p>	<p>だが、先帝妃はためらいを見せた。皇位継承者の母である皇妃は気難しく、桐の御殿の女官が公然と侮辱されたそのやり方は不吉な前例で、安心できることではない、と思ひになった。しかしながら、先帝妃は決定を下す前に亡くなってしまった。一人になった姫君は、悲しみにくれた。陛下はますます強い調子で入内を催促した。娘たちの一人として大切にしたい、と伝えた。</p>
<p>54 不思議なほど更衣に似る四の宮は周りに押され入内し藤壺と称する「さぶらふ人々〜」(2264 / 二二⑫ / 四二)</p>	<p>さぶらふ人々、御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、かく心細くておはしませんが、内裏住みせさせたまひて、御心も慰むべくなどおぼしなりて、参らせたまへり。藤壺と聞こゆ。けに御容貌ありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる。</p>	<p>召使い、養育係、それに姫君の兄の兵部卿の宮は、宮中の生活で姫君の心は晴れるだろうし、少なくとも暗くわびしい家よりもまじだろうと考え、宮中に送り出した。藤壺(藤の水槽)と呼ばれる殿舎に住んだので、この名前が知られた。天皇は愛した女性に彼女が並外れてよく似ていることを否定できなかった。</p>	<p>お付きの者たち、親族、そして兄の軍務省長官の皇子も、姫君が一人寂しく過ごすより、宮中に入る方が心落ち着くだろうと考え、ついに姫君を入内させた。ここでは藤壺、藤の御殿の姫の名で知られた。まことに、姫の顔立ちと姿は人々を驚かせるほど、もう一人の女性に似ていた。</p>
<p>55 藤壺は皇女の身ゆえに誰に気兼ねもなく、帝の寵愛もしいに移る「これは人の〜」(2295 / 二三③ / 四三)</p>	<p>これは人の御きはまさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけばかりであかぬことなし。かれは、人の許しきこえざりしに、御心ざしあやにくなりしぞかし。おぼし紛るとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こようおぼし慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。</p>	<p>だが姫の位はずっと高かったので、誰もが姫君に気に入られようとし、何が起ころうとも、姫君には最大限の自由を許した。ところが、亡き女官の場合は、ただ単に宮中が彼女を受け入れようという気持ちが強かったため、天皇のご寵愛はかえって彼女を貶める結果となったのだった。帝の昔の愛情はまだ冷めてはなかった。時折、ご自分の思いを亡くなった女官から彼女によく似た女官へそらしては、慰めや気晴らしを見つけたが、帝にとって人生はまだ哀しい重荷だった。</p>	<p>だが位はずっと高く、おそらくまさにそのために、しかるべき敬意を持って迎えられ、誰も悪口を言えなかったから、何も心配することはなかった。もう一人の方は、誰も受け入れてくれそう人がなく、不幸にも、帝にあのような深い情熱を抱かせてしまったのだった。今もこの愛は消し去られてはなかったが、陛下の心は少しずつ新しくやってきた女性に傾いていった。彼女の中に限りない慰めの源を見出すというのは、人間の感情の自然な部分なのだった。</p>

<p>56 源氏の君は常に父帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見る「源氏の君は〜」(2327 / 二三⑤ / 四三)</p>	<p>源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方は、え恥ぢあへたまはず。いづれの御方も、我人に劣らむとおぼいたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うち大人びたまへるに、いと若うつくしげにて、せちに隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。</p>	<p>源氏と呼ばれるようになった若皇子は、常に天皇のそばにいた。まもなく宮中の女官や衣装部屋の女官たちとくつろいで過ごすようになった。だから、天皇の私室に日常的に呼ばれていた女官に対して、恥ずかしがることなどなかった。当然のことながら、女官たちは源氏の一番のお気に入りになりたいと思って激しく競い合い、さまざまな理由で源氏の感嘆的となっていた。だがほとんどの女官は大人として振る舞っていた。ただ一人、新入りの姫君は若く可愛らしく、逃げようとしたにもかかわらず、自然と源氏と会う機会が多くなっていった。</p>	<p>若君は、父帝から片時も離れることなく、宮廷の女官たちも、特に帝がよく会いに行く方々は、若君がいることに慣れていた。誰もそれぞれが独特な美しさを持っていて、自分が他より劣っていると思ってる者は一人もいなかっただろうが、若い盛りを過ぎてしまっていた。それにひきかえ、藤の御殿の姫はとても若くて気品があり、いくら御簾や屏風の後ろに隠れていても、少年の目線は自然と姫の方へ向いてしまうのだった。</p>
<p>57 三歳で母と死別した源氏の君は、母に生き写しだという藤壺を慕う「母御息所も〜」(2370 / 二三⑨ / 四三)</p>	<p>母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり」と典侍の聞こえけるを、若き御心地にいとあはれと思ひきこえたまひて、つねに参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。</p>	<p>源氏は亡き母を覚えているはずがなかったが、監督局の女官が、少女がどんなに母に似ているか話したので、幼い想像力をかき立てられ、彼女の親友になっていつも一緒にいたいと思うようになった。</p>	<p>若君は亡くなった母の顔立ちを覚えてはいなかったが、あの少女が亡き母に似ている、と内部屋の第二女官が言ったときから、彼の若い心は当惑し、姫と知り合わずずっとそばにいたいと思うようになった。</p>
<p>58 帝は藤壺と源氏を愛し、更衣の形代である藤壺に源氏は好意を示す「上も、限りなき〜」(2396 / 二三⑩ / 四四)</p>	<p>上も、限りなき御思ひどちにて、「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべき心地なむする。なめしとおぼさで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどは、いとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも、似げなからずなん」など聞こえつけたまへれば幼心地にも、はかなき花、紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。</p>	<p>ある日、天皇は姫君に言った。「あの子に冷たくしないでください。貴女が亡くなった母に似ていると言われたので、好奇心をそそられたのです。無礼と思わないで優しくしてやってください。実際に貴女はあの子に話し方や面立ちが似ているので、母親だと思われてもおかしくありません」こうして、まだとても若かったが、つかの間の美というものが彼の気持ちに不可欠となった。生まれて初めて、はっきりと誰かを特に愛していると感じた。</p>	<p>二人のいずれにも同じように限りない愛情を抱いていた陛下は、姫に言った。「あの子に冷たくしないでください。不思議なことですが、あなたをあの子の亡き母と見ないでいいように思います。無礼と思わず、優しくしてやってください。あの子の面立ち、眼差しは亡き母にそっくりですから、あなたたち二人がほんとうに母と息子のように見えてもおかしくはありません」一方、若君は幼い無邪気さで、春の桜、秋の紅葉など、どんなありふれた機会でも捉え、姫に自分の気持ちを伝えた。</p>
<p>59 弘徽殿と藤壺が陰悪なか、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃「こよなう〜」(2433 / 二四① / 四四)</p>	<p>こよなう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿女御、またこの宮とも御仲そばそばしきゆゑ、うちそへて、もとよりの憎さもたち出でて、ものしとおぼしたり。世に類ひなしと見たてまつりたまひ、名高うおほする宮の御容貌にも、なほにはほしさはたとへん方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとりどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。</p>	<p>弘徽殿は、もともとこの女官にあまり親しみを持っていなかったが、今、源氏に対する昔の敵意がよみがえってきた。弘徽殿の子供たちも、人並み以上の美しさで称されたが、源氏とは比べものにならなかった。この少年の愛らしさは、光源氏（輝く源氏）と呼ばれるほどで、藤壺の姫君も多くの時から賞賛され、光を放つ太陽の姫君と呼ばれていた。</p>	<p>この愛情があまりにはっきりしていたため、皇妃は不機嫌になり、藤の御殿の姫と特別良い関係でもなかったことから、桐の御殿の女官に抱いていた昔の怨恨が再びわき上がってきた。皇妃がこの世に並ぶ者がないと信じ、宮中で非常に重んじられている自分の息子はもとより、他に若皇子の輝くような美しさと比べられるような人物は一人もいなかった。世間では彼を「光り輝く殿下」と呼んでいた。そのかたわらで陛下の愛情を分かち合っていた藤の御殿の女官は、「輝く太陽の姫君」と呼ばれていた。</p>
<p>60 光源氏は十二歳で兄東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う「この君の〜」(2483 / 二四⑤ / 四四)</p>	<p>この君の御童姿、いと変へまうくおぼせど、十二にて御元服したまふ。居起ちおぼしいとなみて、限りあることに、事をそへさせたまふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式、よそほしかりし御響きにおとさせたまはず。所々の響など、内蔵寮、穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなることもぞ、ととりわき仰せ言ありて、清らを尽くして仕うまつれり。</p>	<p>このように愛らしい少年に大人の装束を着せるのは残念なように思えたが、もう十二歳になったので、元服の儀式をする時がやってきた。天皇は疲れを知らぬ熱心さで準備を取り仕切り、慣例より盛大に祝いたいと望んだ。一年前に南の広間で行われた正統な後継者の元服は、今回の支度の豪華さを超えるものではなかった。いろいろな場所で催される祝宴の準備、出納官と穀物管理官の仕事については、役人の怠慢がないよう陛下ご自身が監督し、最後には完璧にできあがった。</p>	<p>成年に達すると服装を変えないといけないのは残念に思われたが、十二歳の誕生日には元服の儀式が行われ、若君は成人男性の衣装を着用した。帝は準備万端整え、一年前に南の御殿で執り行われた皇太子の元服となら劣ることのないよう、定められた式次第にいくつか新しい事項を加えた。儀式に続く祝宴についても、もし宮中倉庫と食料品貯蔵所に通常の任務を委ねたら、何かがおおざりにされる恐れがあるとして、すべてが完璧に行われるよう、特別に指示して準備をした。</p>
<p>61 清涼殿で左大臣が光源氏に冠を被せ、帝は更衣がいたらと感極まる「おはします〜」(2537 / 二四⑩ / 四五)</p>	<p>おはします殿の東の廂、東向きに椅子立てて、冠者の御座、引き入れの大臣の御座、御前にあり。申の時にて源氏参りたまふ。みづら結ひたまへるつらつき、顔の匂ひ、さま変へたまはむと惜しげなり。大蔵卿、蔵人仕うまつる。いと清らなる御髪をそぐほど、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばとおぼし出づるに、堪へがたきを、心強く急じかへさせたまふ。</p>	<p>儀式は天皇のお住まいの東舎で行われ、帝の玉座は東向きに、元服を受ける皇子と介添人（左大臣）の椅子はその向かいに置かれた。源氏は申の刻に到着した。子供らしい長い巻き毛が麗しく、その髪を緋色の紐で束ねるという職務を終えたばかりの介添人は、髪がまもなく失われてしまうのを残念に感じていた。また出納所の長官さえも、儀式用の刀でその美しいお下げ髪を断ち落とすのをためらっているようだった。この行程のすべてに立ち会っていた天皇は、ほんの一瞬、皇子の母がこの場にいたらどれほど誇らしく思ったろうと考えたが、すぐにこの空しい思いを振り払った。</p>	<p>陛下が普段生活される御殿の東側の外部屋には、東向きに玉座が置かれ、その向かいに元服を迎える男子と、儀式用の烏帽子を渡す役目の左大臣の席がしつらえられた。源氏は申の刻に到着した。角髪（みづら）に結び上げられた髪に包まれた顔の優美さは、まもなく起きるであろう変化が残念に思われるほどだった。宝物省長官の皇子が髪を結う役目を仰せつかった。少し心を痛めながら髪に鉗を入れたとき、帝は果てしない郷愁とともに亡き女官を思い出し、彼女がここにいず、この若者の姿を見ることができないのを嘆いたが、何とか深い動揺を抑えることができた。</p>

62 加冠の儀の後、光源氏の拝舞にみなは感涙し帝も更衣を想い感無量「かうぶり〜」(2580 /二五①/四五)	かうぶりしたまひて、御休み所にまかてたまひて、御衣奉りかへて、おりて拝したてまつりたまふさまに、皆人涙落としたまふ。帝はた、ましてえ忍びあへたまはず、おぼし紛るるをりもありつる昔のこと、とりかへし悲しくおぼさる。いとかうきびはなるほどは、あげ劣りやと疑はしくおぼされつるを、あさましうつくしげさ添ひたまへり。	正式に戴冠した源氏は、控えの間に下がり、大人の男性用装束をまとった。そして中庭に下りて、挨拶の舞を披露した。そのあまりの優美さは皆の涙を誘った。このときの天皇は、先ほどより辛さが和らいでいたが、ふたたび昔の思い出に打ちのめされた。子供の装束を着るのをやめると、繊細な顔立ちの魅力が損なわれるかと心配されたが、その反対に、源氏はこれまでにないほど美しく見えた。	皇子が烏帽子をかぶった後、内部屋に引き下がり、そこで大人の衣装に着替え、庭に下りて典礼通り感謝のお辞儀をしたとき、居合わせた人々は誰も涙をこらえることができなかった。とりわけ帝は感動を隠すことができず、やっとわずかの間忘れることができた昔の思い出が再びよみがえり、悲しみに胸が一杯になった。このように幼い年頃では、髪を束ねると息子の美貌がくすんでしまうのではないかと心配をしていたが、かえってそれが面立ちに新たな魅力を加えていた。
63 左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする「引き入れの〜」(2623 /二五⑥/四六)	引き入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしづきたまふ御娘、春宮よりも御気色あるを、おぼしわづらふことありける、この君に奉らむの御心なりけり。内裏にも、御気色たまはらせたまへりければ、「さらば、このをりの後見なかめるを、添ひ臥しにも」と、もよほさせたまひければ、さおほしたり。	介添人を努めた左大臣には一人娘があり、正統な後継者はその美貌に気づいていた。だが今、父はこの縁談を勧めるのはやめ、源氏に娘を進呈しようと考え始めたのである。天皇に探りを入れたところ、帝は少年にこのように強力な姻戚関係の恩恵を得させられたいへん喜ばしいと思っていることがわかった。	元服の間、若皇子に儀式用烏帽子を手渡した左大臣は、ある皇女との間に生まれた一人娘があった。手塩にかけて育てられた娘は、皇位継承者に興入るよう請われていたが、左大臣は娘を若き源氏に嫁入りさせたいと思っていたから、この申し出に当惑していた。御所ではその考えは好意的に受け入れられたようだった。「そういうことならば、この子には誰一人後見人がいないのだから、今晚添い寝する花嫁としたらどうか……」このように伝えられ、左大臣はすぐに了解の意志を示した。
64 祝宴で左大臣から娘葵の上との結婚を仄めかされ光源氏は恥じらう「さぶらひに〜」(2658 /二五⑨/四六)	さぶらひにまかてたまひて、人々大御酒などまゐるほど、親王たちの御座の末に、源氏着きたまへり。大臣気色ばみきこえたまふことあれど、ものの慎ましきほどにて、ともかくもあへしらひきこえたまはず。御前より、内侍、宣旨承り伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御禄のもの、上の命婦取りてたまふ。白き大袿に御衣一領、例のことなり。	祝杯を挙げるために宮廷人たちが勢揃いし、源氏は他の皇子たちの間に着席した。左大臣はその近くへ行き、何か耳元に囁いた。だが少年は恥じらいで赤くなり、どう答えてよいかわからなかった。一人の侍従が左大臣に近づき、すぐに陛下のところへ来るようにという命令を伝えた。左大臣が玉座の前に着いたとき、衣装部屋の女官が、皇子の介添人である大臣に慣例として与えられる大きな白い下衣と娘用の腰巻きを渡した。	出席者全員が宴の間に移って祝い酒を味わっているとき、若君は帝の家族の末席についた。左大臣は何やらほのめかしたが、若君は最も引っ込み思案な年頃で、何と答えていいかわからなかった。陛下の側から内御殿の補佐役が、左大臣に陛下の御前に参上するよう求め、命婦の位を持つ女官が、この儀式のために彼が受け取る贈り物を渡したが、それは白い大袿（おおうちき）と儀式用の衣服一揃いだった。
65 左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拝舞する「御盃のついで〜」(2703 /二五⑭/四七)	御盃のついでに、 いとさなきはつもとゆひに長き世をちぎる心は結びこめつや御心ばへありて驚かせたまふ。 結びつる心も深きもとゆひに濃きむらさきの色しあせずはと奏して、長橋よりおりて、舞踏したまふ。	それから玉杯から酒を飲ませた後、天皇は歌を詠み、その中で、緋色の紐の結び目が両家の絆を象徴することを願った。そこで、左大臣は、緋色の飾り帯の色が褪せない限り、何事もこの強い絆を断ち切ることはできないでしょう、と答えた。そして、長い階段を下り、中庭から大いなる服従の意を表した。	それから帝は大臣に酒の杯を差し出しながら、自分の意向を表した歌を詠んだ。  若い髪の毛を束ねた紐によって 一生涯続く絆の約束が 結ばれたのでしょうか？  強い信念によって 編みこまれた 紫の紐が その色を決して失わずに いてほしいものです  左大臣はこう答へ、屋根付き廊下を渡って東の庭へ下り、規範に従って感謝のおじぎをした。
66 左大臣や親王たちは禄を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大「左馬寮の〜」(2730 /二六④/四七)	左馬寮の御馬、蔵人所の鷹据えてたまはりたまふ。御階のもとに、親王たち上達部連ねて、禄ども品々にたまはりたまふ。その日の御前の折櫃物、籠物など、右大弁なん承りて仕うまつらせける。屯食、禄の唐櫃どもなど所狭きまで、春宮の御元服のをりにも数まされり。なかなか限りもなくいかめしうなん。	同じ場所に、皇室厩舎から馬数頭と、鷹舎から鷹が数羽、源氏への贈り物として用意されていた。階段の下には、褒賞を受け取るために皇子たちや宮廷人たちが整列し、あらゆる種類の貢ぎ物が与えられた。この日は、大小の籠に盛り合わせた果物が、天皇の意向によって右秘書官から配られ、お菓子の箱や贈り物が辺り一面に積み重ねられ、身動きもできないほどだった。正統な後継者の元服の時もこれほどの豪勢さは見られなかった。	宮中左厩舎からは馬一頭が、私的文書局からは支柱に載せた一羽の鷹が贈られた。庭に並んだ皇子と高官たちは、それぞれの位に応じた贈り物を受け取った。帝の前に並べられた各種の美味な食べ物が満杯の檜の樹皮で作られた盆や果物籠は、帝のご命令により右大監督官が自ら用意したものだった。山盛りの炊いた米や贈り物が収められた中国の櫃がほとんど隙間なく並ぶ様は、皇太子のために行われた儀式より更に豪勢だった。まさに他に例のない、盛大な饗宴だった。

67 元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚「その夜〜」(2768 / 二六⑧ / 四七)	その夜、大臣の御里に、源氏の君までさせたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしつききこえたまへり。いときびはにておはしたるを、ゆゆしうつくしと思ひきこえたまへり。女君は、少し過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥づかしとおぼいたり。	その夜、源氏は左大臣の家に赴き、そこでは彼の婚約式が盛大に祝われた。若皇子は少し幼く、華奢な様子に見えたが、その美しさは出席者全員を驚愕させた。ただ四歳年上の花嫁だけが、源氏をまだ子供と違って、気恥づかしさを感じていた。	その夜、若き源氏は、左大臣邸に伴われた。源氏を迎える儀式は入念に執り行われ、彼は最大の敬意をもってもてなされた。まだ幼さの残る容貌には、人々を狼狽させるような美しさが現れていたが、何歳か年上の花嫁の目には若すぎて、気恥づかしと思われるほどだった。
68 左大臣は帝の信頼に加えて光源氏まで加わり右大臣家を凌ぐ勢いに「この大臣の〜」(2800 / 二六⑩ / 四八)	この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内裏の一つ后腹になんおはしければ、いづ方につけてもいと華やかなるに、この君さへかくおはしそひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき、右大臣の御勢は、ものにもあらずおされたまへり。	ナシ	大臣は天皇から全幅の信頼を得ていた上、第一夫人は陛下の母親である同じ皇后から生まれていた。したがって、あらゆる角度から見て、彼は最も輝かしい地位にある一人であり、今は若君も近くに置いたのだから、皇太子の祖父で、将来世の中の政治を執ることになるはずの右大臣の重みも、彼の前では取るに足りないものになってしまったようだった。
69 左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う「御子ども〜」(2833 / 二七① / 四八)	御子どもあまた、腹々にものしたまふ。宮の御腹は蔵人少将にて、いと若うをかしきを、右大臣の、御仲はいとよからねど、え見過ぐしたまはで、かしつきたまふ四の君にあはせたまへり、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになん。	ナシ	左大臣には何人もの妻と多くの子供がいたが、その中でとりわけ若く美丈夫だったのが、第一夫人から生まれた文書局の役人兼護衛隊第三司令官だった。右大臣は、左大臣家と特別よい関係ではなかったが、この若者の資質を見くびることができず、手塩にかけて育てた四番目の娘を娶らせて婿に迎えていた。左大臣が自分の婿に対するのに劣らず、右大臣はこの婿をこの上なく丁重に扱っていたから、二つの強力な家族内部の関係は、非常に好ましいものように思われた。
70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠「源氏の君は〜」(2863 / 二七④ / 四九)	源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえしたまはず。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、類ひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見ぬ、似る人なくもおはしけるかな、大殿君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心一つにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。	天皇は源氏がまだ宮中に残ることを望み、源氏は自分の独立した家を持たなかった。心の底では、彼女が他の誰よりもずっと気品があると思い、あのような女性とだけ一緒にいたいと願っていたが、残念ながら誰も彼女にはかなわなかった。婚約者である葵の姫のことを皆が誉めていたが、源氏は彼女にまったく優美さを見出せなかった。今や、後宮の若い女性が源氏の幼い思いのすべてを占めてしまい、その妄想が不幸へと変わっていった。	帝の傍らにるように常に要望を受けていた若き源氏は、あまり多くの時を左大臣邸で過ごさなかった。彼の心の中には、この世にまたない美しさで、誰一人肩を並べられない藤の御殿の姫の思い出が残り、あの方のような女性を娶ることができさえすれば、と思っていた。左大臣の娘はたしかにとても美しく、大切に育てられたように思われたが、彼の愛情をかき立てはせず、こうして、他の女性に没頭する彼の若い心は、激しい苦しみへと変わっていった。
71 宮中での光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う「大人になり〜」(2912 / 二七⑨ / 四九)	大人になりたまひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れたまはず。御遊びの折々、琴、笛の音に聞こえ通ひ、ほのかなる御声を慰めて、内裏住みのみ好ましくおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日など、絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は、幼き御ほどに、罪なくおぼしなして、いとなみかしつききこえたまふ。御方々の人々、世の中におしなべたらぬを、選(え)り整えすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなおほなおぼしいたつく。	もう「成人」だったから、かつてのように女性たちの居室に出入りすることはできなかった。だが時折、催し物があるときには、琴や笛の響きに溶け合っかすかに聞こえてくる彼女の歌声を聞くことに慰めを見出した。そして、大人としての自分の存在が耐えられないもの思えた。五、六日間留守をした後、たまに二、三日婚約者の家で過ごした。舅は、この怠惰さを若すぎるゆえと考えていたから、心配することもなく、いつも大変丁重にもてなした。源氏が訪れるたびに、彼と知り合えるよう、当時最も個性豊かで気性のよい若者たちが招かれ、源氏を楽しませるための遊戯を揃えるために、莫大な労力が払われた。	成人を迎えてから、源氏は以前のように、竹の帳を越えることが許されなくなった。何か音楽の催しが催されるときは、帝の部屋から聞こえてくる琴の音に自らの笛を合わせ、遠くからかすかに漏れ聞こえる姫の歌声に心を慰めた。そのため、宮廷での暮らしは源氏を幸せにした唯一のことだった。五、六日天皇の許でお勤めをした後、ときに二、三日大臣邸へ帰るだけだったが、大臣はこのような怠惰を若すぎるゆえのこととして、咎め立てせず、丁重にもてなし続けた。左大臣は、特に洗練された女官たちを若夫婦のお付きとし、源氏の興味を誘う刺激するような催しをいくつも準備させた。
72 後の二条院を修築し、そこで理想の女性と暮らしたいと望む光源氏「内裏には〜」(2976 / 二七⑭ / 五〇)	内裏には、元の淑景舎を御書司にて、母御息所の御方の人々、まかで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ。元の木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りののしる。かかる所に、思ふやうならむ人を据えて住まばやとのみ、嘆かしようおぼしわたる。光る君といふ名は、高麗人のめできこえて、つけたてまつりけるとぞ、言ひ伝へたとむ。	宮廷では、淑景舎という、亡き母が使っていた居室の一つが、公式の住まいとしてあてがわれ、以前母にお仕えしていた者たちが、源氏の供回りを形成するため、再び集められた。祖母の住んでいた屋敷は荒廃しかかっていたが、帝室工事局が修復の命令を受けた。木立と周囲の丘の形がその場所を常に趣深くさせていた。今は池が拡張され、他にもいろいろな改修が行われた。「ああ、こんな所に愛する女性と一緒に住めたなら！」源氏は悲しみをもって思った。 この光(輝く)という名前は、聞くところによると、朝鮮半島の人相見が感嘆して皇子をこう呼んだという。	宮中では、亡き母がかつて使っていた居室が源氏に与えられ、母の世話をしていた女官たちが引き続き仕えることになった。さらに、母方の実家が昔の輝きを取り戻せるよう、修繕局と大工局に命令が伝えられた。人工の林や小山が以前は屋敷に趣きを与えていたが、池を広げる作業が進むにつれ、庭は興奮したように活気づいた。この地に、理想にぴったりな方と一緒に住むことさえ可能ならば、と思いつながら源氏はため息をついた。「光る」という愛称は、言い伝えによれば、高麗から来た使者が称賛の念を込めてこう呼んだということだ。

小見出し	原文（池田本校訂本文・伊藤鉄也作成）	ロシア語訳（デリュージナ訳）
1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する「いづれの御時〜」（0001 / 五① / 一七）	いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。	どの帝の治世だっただろうか？…当時、様々な称号の多くの婦人が宮中にお仕えしていて、その中に一人 — 非常に高い位とは言えないが、帝の格別な寵愛を得ている女性がいた。かつて「まあ、私より優れた方なんて…」と誇り高き思いを持って宮中に入った方々は、今や彼女を侮辱で打ちのめし、彼女と同等または下の者は羨ましさのあまり全く平静を失った。
2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる「朝夕の宮仕〜」（0031 / 五④ / 一七）	朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかすははれるものに思ほして、人の譏りをえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御てもなしなり。上達部、上人なども、あいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。	宮中での通常の朝夕のお務めを果たす時でさえ、彼女は周囲の人々の心に恨み以外のものを呼び起こさず、絶えず彼らの怒りを招いていて — よく分からぬが、そのためであろうか — 彼女は衰弱し、意気消沈して、より多くの時間を父の家で過ごすようになった。帝はといえば、彼女に対する憐れみのために疲弊し、愚痴をこぼした、このような心の弱さが人々には非難すべきだと思われるかもしれないことを考慮せずに。つまり、彼のこの婦人への寵愛は、彼女の噂が、疑いなく、後の世代にまで伝わるだろうというほどなのである。「こんなにも帝が過度にこの方に一途なのは見ていられない」 — 重要な高官や一般の廷臣は、目を隠しながら不平を言った。
3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る唐土にも〜」（0073 / 五⑧ / 一七）	唐土にも、かかることの起こりにこそ、世も乱れ悪しかりけれと、やうやう天の下にも、あぢきなう人のもて悩みぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いととはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへの類ひなきを頼みにて、まじらひたまふ。	「思ひ出して下さい、まさにこのような状況で、かつて中国では動乱が始まったのです。」 不平は天下全域にたちまち広まり、この婦人の名前は憤慨の種となり、楊貴妃の例さえ想起されかねなかったので、彼女の悲しみは日ごとに増していったが、帝の無比の、実に説明しがたい寵愛を支えにして彼女は以前通り宮中で暮らした。
4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活「父の大納言〜」（0103 / 五⑩ / 一八）	父の大納言は亡くなりて、母北の方なん、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたり世のおぼえ華やかなる御方々にもいたう劣らず、何事の気色をももてなしたまひけれど、とりたててはかばかしき後見しなければ、ことある時は、なほよりどころなく心細げなり。	婦人の父アゼチーノ ダイナゴンは既に逝去し、彼の家の北の間の夫人である母は、旧習を守り生来の高貴さを備えたお方で、あらゆる儀式的折には、両親が揃ってその社会的意義に疑いを持たれない他の婦人方に、娘が全く劣らないようにと努めていた。それでもなお彼女には影響力のある庇護者がなく、何かあった折には — 彼女は支えがなく全く孤独であった。
5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する「前の世にも〜」（0136 / 六① / 一八）	前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながせたまひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなるちごの御容貌なり。一の御子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君、と世にもてかしづききこゆれど、この御句ひには並びたまふべくもあらざりければ、大方のやむごとなき御思ひにて、この君をば、私ものに思ほしかしづきたまふこと限りなし。	世に遠くさかのぼる結び付きが彼らの間にあったからか、または他の何らかの理由によるのか、彼らに、世の中にかつてなかったような素晴らしい、貴重な真珠のような男の子が生まれた。帝は、— ああ、いったいつか？ — と待ち遠しさに焦がれて、なるべく早く宮殿に連れてくるよう命じ、見てみると — 本当に類いまれな美しさを持つ稚児だと確信した。第一皇子はニョウゴという称号の夫人 — 右大臣の娘によって生まれ、強大な庇護者がいる故に、この皇子は疑いなき帝位の後継者とみなされ、皆が彼を非常にかわいがり、甘やかしていた。だが新しい赤子は彼をも凌駕した。帝は以前通り長男にご好意をお持ちになったが、弟に対する愛情は誠に限りなく、まるで最も高価な私財のように慈しみ、大切にしていた。
6 帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立坊に疑いを抱く「はじめより〜」（0184 / 六⑦ / 一九）	はじめより、おしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑあることの節々には、まづ参上らせたまふ、ある時には大殿籠り過ぎて、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽きかたにも見えしを、この御子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この御子のあたまふべきなめり、と一の御子の女御はおぼし疑へり。	弟皇子の母は、常に宮中に仕えている婦人には決して属していなかった。彼女の宮廷における重要性ははるかに高かったし、容貌も、最も高貴な方々と全く変わらなかった。ただ帝が、恐らく過度に頑固に、彼女を自分の側から一歩も離さなかったのだ。宮廷で音楽演奏の為に集まったり、あるいは他の娯楽が企画されたりした時 — あらゆる好機をとらえて帝はまさに彼女を誰よりも先に召して、帝の部屋で夜を過ごした後も自分に仕えさせていたのだ — つまり、彼女を最もつましい身分だと見なされかねないように帝は振る舞っていたのである。だが新しい皇子が生まれてからは、帝はこの夫人に対する態度を明らかに変えたので、第一皇子の母ニョウゴの心にすら「もしかして幸運は私達のもとを去って、まさに彼がお世継ぎに指名されるのでは？」という疑いが生まれた。
7 帝は弘徽殿女御を気遣うも桐壺更衣を寵愛し、更衣の気苦労は増す「人より先に〜」（0248 / 六⑬ / 一九）	人より先に参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御諫めのみぞ、なほ煩はしう、心苦しう思ひきこえさせたまひける。かしこき御陰を頼みきこえながら、おとしめ、疵を求めたまふ人は多く、我が身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。	このニョウゴは誰よりも先に入内しており、帝は彼女に特別な注意を払っていて、しかも子供たちの母親なのだから、彼女が気を悪くすることに帝が配慮しないではいられたであろうか？一方、あのお方は、情け深い庇護におおわれてはいたものの、あらゆる機会をとらえて彼女を貶め、笑ひ者にしようとする悪意のある人々が宮廷に少なからずいた。その上、健康状態も弱く、地位も非常に不安定で、彼女は帝の寵愛を喜ぶというよりもむしろ苦しんでいた。
8 更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける「御局は桐壺〜」（0288 / 七③ / 二〇）	御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふも、げにこのわりと見えたり。参上りたまふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿のここかこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾堪へがたく、まさなきこともあり。また、ある時には、えさならぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた心を合はせて、はしたなめわづらはせたまふ時も多かり。	この夫人はキリツボの御殿に住まっていた。帝は、あまりにも頻繁に、他の夫人方の部屋を通り過ぎてそこを訪れるので、彼女達に不満の種があったのは当然である。彼女が自分で帝のお部屋へ向かった折には — こういう事は少なからず起こったのだが — 妬む人々が、彼女の通る道で待ち伏せをしていて、— 打ち橋や渡殿のあちこちに — 極めて醜い悪ふざけを行っており、そのために彼女を見送り・出迎える婦人達の裾は、時折まさに目も当てられない姿になってしまうことがあった。その上、彼女が避けることはできない吊り通路の戸を示し合わせて双方向から閉めて、彼女が屈辱的な苦境に陥ってしまうこともしばしばだった。
9 帝は桐壺更衣への虐待を不憚に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す「ことにふれ〜」（0344 / 七⑨ / 二〇）	ことにふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いどあはれと御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を、ほかに移させたまひて、上局にたまはず。その恨みましてやらむ方なし。	折に触れて増える不当な仕打ちや屈辱的行為のために、不幸な女性はますます気落ちしてしまい、遂には、帝は憐れみ、コウリョウデン — 後涼の御殿にずっと住んでいたコウイという称号の夫人を他の居住場所に移して、彼女をそこに移すよう命じた。このコウイの恨みがいかに大きいか、想像に難くない！
10 若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる「この御子三つ〜」（0378 / 七⑩ / 二一）	この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮のたてまつりしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじうせさせたまふ。それにつけても、世の譏りのみ多かれど、この御子のおよすけもておはする御容貌、心ばへ、ありがたくめづらしきまで見えたまふを、えそねみあへたまはず。ものの心知りたまふ人は、かかる人も世に出でおはするものなりけり、とあさましきまで目を驚かしたまふ。	幼児が三歳になった時、空前の華やかさでハカマを着る儀式が挙行された。このような折のために — これについて帝自身が腐心したのが — 宮殿の宝物殿や倉庫に保管されている最も貴重な物が引き出された。今まで、このような栄誉に浴したの第一皇子だけであった。それにつけても少なからず誹られたが、男の子が成長すると、悪意ある人々はより少なくなっていく。この幼子の驚くべき魅力の前に屈しないでいることは困難であった。物の心を洞察した人々は、彼を見て、「まさかこんなことが我々の世に起こりうるものか？…」と驚いて呆然となった。

<p>11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出「その年の夏〜」(0439 / 八㉔ / 二一)</p>	<p>その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さりにゆるさせたまはず。年ごろ、常のあつしさになりたまへれば、御目馴れて、「なほ、しばし試みよ」 とのみのたまはするに、日々に重りたまひて、ただ五六日のほどに、いと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたまつりたまふ。かかるをりにも、あるまじき恥もこそ、と心づかひして、御子をば留めたまつりて、忍びてぞ出でたまふ。</p>	<p>その年の夏、桐の御殿のミヤスドコロは、病を得て、宮殿を退出しようとしていたが、帝はそれでも彼女を行かせなかった。「もう少し待ってみよう、ひよっとしたら…」と、最近彼女がかなり頻繁に体調不良だったことに慣れていた帝は頼んだ。 しかし病人の状態は悪化し、5、6日経って、彼女は全く衰弱してしまった。母は泣きながら帝に彼女を退出させるよう懇願した。今になっても、新たな恥を ― 万が一にも？ ― さらすことのないようにと、ミヤスドコロは幼い息子を宮殿に残し、密かに去ることを選んだ。</p>
<p>12 帝は絶え入らばかりの桐壺更衣をご覧になるにつけ途方に暮れる「限りあれば〜」(0488 / 八㉔ / 二二)</p>	<p>限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなさ、言ふ方なく思ほさる。いと匂ひやかにうつくしげなる人の、いたう面瘦せて、いとあはれものを思ひしみながら、言に出でも聞こえやらず、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを、御覧ずるに、来し方行く末おぼしめされず、よろづのことを、泣く泣く契りたまはずれど、御答へもえ聞こえたまはず、まみなどもいとたゆげにて、いとどなよなよと、我がの気色にて臥したれば、いかさまにとおぼしめし惑はる。</p>	<p>全てには限りがあり、帝はこれ以上彼女をとどめなかったが、彼女を見送ることさえ彼には許されないとと思うといかに辛いだった。ミヤスドコロの顔は、いつもは鮮やかな美しさで魅了したのだが、痩せこけて、深い悲しみが彼女の容貌に現われていた。言葉を口にする力もなく、不幸な女性はただため息をついた、そして帝は、彼女がいかに速く衰えていくかを目にして、過去の事も未来の事も忘れ、ただ痛ましく泣いて彼女に様々な誓いをささやいたが、彼女はもはや答えることもできなかった：意識なく横になっていて、目は疲れた様子で、体は力なくなよなよとしていた…「一体どうすればいいのか？」と帝は途方に暮れた。</p>
<p>13 輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する「輦車の宣旨〜」(0537 / 八㉔ / 二二)</p>	<p>輦車（てぐるま）の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえゆるさせたまはず。 「限りあらむ道にも、後れ先だたじ、と契らせたまひけるを、さりともうち捨てては、え行きやらじ」 とのたまはするを、女もいとみじと見たてまつりて、 限りとて別る道の悲しきにかまほしきは命なりけり いとかく思ひたまへましかば」 と息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながらともかくもならむを御覧じはてむとおぼしめすに、 「今日始むべき祈りども、さるべき人々承れる、今宵より」 と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながら、まかでさせたまふ。</p>	<p>輿についての命令を出したものの、彼女の部屋に入り、再び彼女と別れることができない… 「私達は、この最後の道にも一緒に踏み入れようとお互い誓ったのではないか。あなたは私なしで去ってしまうことはできないでしょう、」と彼は言う、そして尽きせぬ悲しみを眼差しにたたえて彼女は彼を見つめる。  「ほら、もう果て ― 私達の道は別れていく。何と悲しいことか！私はさらに進みたかったのに 命の道を…」  ああ、もしこうなると私が知っていたなら…」とミヤスドコロは息絶え絶えに口にし、さらに何か言いたそうであるが、力はすっかり衰えてしまい、帝は「こうなったら、なるようになれ、彼女を行かせない」と決意するが、そこへ使いがやって来る。「本日予定されており、そのために尊敬すべき僧が招かれている祈禱は、今晚中に開始されなければなりません」と彼は病人を急がせるので、帝は、いかに彼にとって辛くても、その通りにせざるを得ない。</p>
<p>14 心塞がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる「御胸つと〜」(0608 / 九㉔ / 二三)</p>	<p>御胸つと塞がりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行き交ふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、 「夜中うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」 とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。聞こしめす御心惑ひ、何事もおぼしめしわかれず、籠りおはします。</p>	<p>暗い心で彼は自分の部屋に残り、まさに夜が明けるまで目をつむることができなかった。彼女の家に遭わされた使いが帰って来る時間も経たないうちに、帝はもう不安でいても立ってもいられず、止めどなく泣き言を周囲に漏らしていた。 そうこうしているうちに使いは、家の近くへ来ると、大きな泣き叫び声を耳にした。「夜中過ぎるや否や、息を引き取りました」と使いは知らされ、気落ちして、急ぎ帰った。この悲痛な知らせが帝に届いた時、混乱がいかに彼の心を占めたことか！世の全てに構わず、自分の部屋に閉じこもってしまった。</p>
<p>15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する「御子は〜」(0644 / 九㉔ / 二四)</p>	<p>御子は、かくてもいと御覧ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ、例なきことなれば、まかでたまひなんとす。何事があらむともおぼしたらず、さぶらふ人々の泣き惑ひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを、よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれに言ふかひなし。</p>	<p>息子には、会いたいけれども、このような折に宮殿に子供を残した先例がないので、母の家に行かせざるを得なかった。その子は、何も分からずに、痛ましく泣いているお側の人々や、帝の頬を止めどもなく流れている涙を見てただ驚いていた。愛する息子と別れるのは常につらいことだが、その母親が亡くなったばかりならばなおのこと…。</p>
<p>16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒に泣き焦られる「限りあれば〜」(0684 / 一〇㉔ / 二四)</p>	<p>限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、同じ煙にのぼりなん、と泣きこがれたまひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて、愛宕といふところに、いといかめしうその作法したるに、おはし着きたる心地、いかばかりかはありけん。</p>	<p>しかしながら全てに限りがある ― 葬儀の実施に着手すべき時が来て、故人の母は力なく焦がれて叫んだ：「ああ、私もこの煙と共に昇ってしまうことができたなら！…」</p>
<p>17 気が動転している母は、火葬の現実も受け入れられず諦めきれない「むなしき〜」(0712 / 一〇㉔ / 二四)</p>	<p>「むなしき御骸（から）を見る、なほおはするものと思ふが、いとかわなければ、灰になりたまはんを見たてまつりて、今は亡き人、とひたぶるに思ひなりなん」と、さかしのたまひつれど車よりも落ちぬべうまるびたまへば、さは思ひつかし、と人々もてわづらひきこゆ。</p>	<p>はかないご遺体を見送る婦人の方で、彼女は馬車に乗り、まもなく、壮大な儀式が既に開始されているオタギに到着した。母の悲痛の深さを表現するための言葉が見つかるであろうか？ 最初は彼女の言葉はまったく理性的だった。「今となっては、生きているものとして娘について考えるのは、意味がないと分かります、」と、彼女の前に横たわっているむなしき抜け殻を見つめながら、彼女は言った、「もしかしたら、彼女の体が灰になるのを目にすれば、私の大切な子供はこの世を去ったのだとようやく信じることができるかもしれません…」 だが次第に絶望が不幸な女性をとらえたので、ほとんど馬車から落ちそうになった。「ああ、こうなると分かっていましたよ！」と婦人方はあたふたと彼女の世話に取りかかった。</p>

18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す「内裏より御使〜」(0741 / 一〇⑧ / 二五)	内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだにいはずなりぬるが、あかず口惜しうおぼさるれば、いま一階（ひときざみ）の位をだに、と贈らせたまふなりけり。これにつけても、憎みたまふ人々多かり。	宮殿から、亡き人に三位を授ける知らせを伝える使いがやって来て、その特別に遣わされた官吏が命令を読み上げ始めた時、参集した人々は新しい悲しみにとらわれた。どうやら、生前ニョウゴと一度も呼ばれなかった故人を不憫に思って、帝は「せめて一つ上に昇進させよう」と判断して、彼女の位を高くすることにしよう。悲しいかな、これに対しても多くの人々は憤慨をもって迎えた。
19 聡明な女房たちは桐壺更衣の美質を追想し、思慕の情をもって偲ぶ「もの思ひ知〜」(0775 / 一〇⑩ / 二五)	もの思ひ知りたまふは、さま容貌などのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりしことなど、今ぞおぼし出づる。さまあしき御もてなしゆこそ、すげなうそねみたまひしか、人柄のあはれに情ありし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とは、かかるをりにやと見えたり。	物の意味を洞察した人々は、故人がいかにかぐい稀な美しさを有していたか、いかに善良で温和であったかを思い出していた。そう、彼女に対して立腹することはまったく不可能だったのだ！本当に、もしこのような帝の寵愛がなかったら、誰も彼女に対して軽蔑や敵意を持って接しようとは思わなかったであろう。帝のお部屋に仕える婦人方ですら、彼女の愛らしい気質や感受性のある心を思い出し、恋しがった。恐らく、かつて「だがほらー君はいない、そして心は…」と言われたのは、まさにこのような折だったのだろう。
20 秋となり帝はただ涙の日々の中、弘徽殿女御は桐壺更衣を許さない「はかなく〜」(0809 / 一一① / 二六)	はかなく日ごろ過ぎて、後のわざなどにも、細かにとぶらはせたまふ。ほど経るままに、せむ方なう悲しうおぼさるるに、御方々の御宿直なども絶えてしたまはず、ただ涙にひちて明かしく暮らさせたまへば、見たまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほゆるしなうのたまひける。	憂鬱で、単調な繰り返しで日が過ぎていった。追悼の法事が行われた時、帝は故アゼチ - ノ ダイナゴンの家にお悔やみの使いを遣わした。時が経ったが、彼の心を占める暗闇は晴れなかった。帝は宮廷の婦人方を自分の部屋に泊めるのをやめてしまい、ただ昼も夜も痛ましく涙を流していた。彼のお側に仕えている人々も、袖が乾く間がなかった。その秋は、このように露が多かったのである…。コキデン、豊富な褒賞の宮殿においてのみ、今なお亡き人を許さなかった：「こんなにも帝を自分に執着させるとは呆れたものだ！彼女はもういないのに、未だに人々の心を乱しているとは」
21 帝は若宮を恋しがり、野分だつ夕暮に靱負命婦を更衣の里に遣はす「一の宮を〜」(0850 / 一一⑤ / 二六)	一の宮を見たまつたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほしいでつつ、親しき女房、御乳母などをつかはしつつ、ありさまを聞こしめす。野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりもおぼし出づること多くて、靱負（ゆげい）の命婦といふを遣はす。	兄皇子を見るにつけ、帝は弟の柔和な魅力を恋しく思い出して、彼の様子を聞く為に、信頼できる侍女や乳母を絶えず遣わしていた。野を貫く風が吹いて突然寒くなったある夕暮れに、思い出が非常に強くわき上がって来たので、帝は、故ミヤズコロの家にユゲイ女史という婦人を遣わすことにした。
22 帝は夕月夜の美しい折に催した管弦を思い出し、更衣の面影に浸る「夕月夜の〜」(0877 / 一一⑨ / 二六)	夕月夜のをかききほかに、出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなるものの音を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりし気配容貌の、面影につと添ひておぼさるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。	素晴らしい月夜だった。使者となった女性が退いた後、帝は、悲しい物思いにふけりながら、さらに長い間月を見ていた。かつては、このような時に彼らは二人で音楽演奏をするのを好んでいた。彼女の指元では、何と甘美に弦が響いたことか！彼女の口から、全く不意に漏れた言葉は、またとない優雅さで魅了したものだ：ああ、彼女はかくも素晴らしかった、かくも他とは似ていなかった…生きていたかのように彼女は彼の目前に立ち現れたが、それでもなお、それは「夜にほの見えうつつ…」ですらなかった。
23 命婦は亡き更衣の邸に入り、八重葎で荒れた庭には月影が差し込む「命婦かこ〜」(0907 / 一一⑫ / 二七)	命婦（みょうぶ）かこにまうで着きて、門引き入るより、気配あはれなり。やもめ住みなれど、人一人の御かしづきに、とかくつくろひたてて、めやすきほどにて過ぐしたまへる、闇にくれて臥しつみたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎（やへむぐら）にもさはらずさし入りたる。	ユゲイ女史が故人の家の近くまでやって来て、邸内に入ると、彼女の目の前に哀感をたたえた魅力に満ちた光景が現われた。故人の母は一人で、やもめ暮らしをしていても、以前は娘の為に常に家がきちんとしているように気を配り、見た目には幸福な暮らしをしているように見せることができていた…。今や彼女は絶望の闇に沈み、床から起き上がらず、草は次第に高く伸びていき、庭を吹き荒れる風が、周囲に満ちる荒涼さをいっそう深めていた。ただ月の光だけが家に差し込んでいて、どうやら、「この茂つた八重葎ですらそれをせき止めることができなかった」
24 更衣の母は命婦と対面し感極まり涙し、命婦は帝の仰せ言を伝える「南面に〜」(0937 / 一二② / 二七)	南面（みなみおもて）に下ろして、母君もとみにえものものたまはず。「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の、蓬生の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなむ」とて、げにえ堪ふまじく泣いたまふ。『参りてはいとど心苦しう、心肝もつくるやうになん』と、典侍の奏したまひしを、もの思うたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたうはべりけれ」とて、ややためらひて、仰せ言伝へきこゆ。	家の南側で客人を馬車から降ろしたが、彼女も、不幸な母もまた長い間全く言葉を口にすることができなかった。「それでなくともこの世に長居しているのは辛いのに、帝のお使いが、私の家のよもぎの葉から露をお払いなさった今、赤面の思いでございます…」とようやく母は言って、抑えることができず、泣く。「ナイン - ノ スケ女史が既に帝に『故人の家に来ると、いっそうつらくなって、ただ心が張り裂けそうになります』と話していました。悲しいかな、それは本当で、物の心を洞察できない私ですら忍びがたいです…」とユゲイ女史は答え、少しためらってから帝の言葉を伝える。
25 命婦は帝の心意を更衣の母に伝え、涙にむせぶ帝からの手紙を渡す「『しばしは〜』」(0987 / 一二⑦ / 二八)	『しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひあはずべき人だになきを、忍びては参りたまひなんや。若宮のいとおぼつがなく、露けき中に過ぐしたまふも、心苦しうおぼさるるを、とく参りたまへ』など、はかばかしうも、のたまはせやらず、むせかへらせたまひつつ、かつは人も心弱く見たてまつらむと、おぼしつたまぬにしもあらぬ御気色の心苦しさに、承りてはぬやうにてなむ、まかではべりぬる」とて御文たてまつる。	『最初は途方に暮れていて、夢ではないか？とずっと思っていた。でも、次第に落ち着いてきて、目覚めることはもうないのだと理解すると、いっそう辛くなってきた。というも隣に私の悲しみを分かち合えるような人がいないから…貴方が忍んで宮殿に来てくれたなら…子供のことも心配で、露が茂る中でわびしい暮らしを余儀なくされていると考えるのも苦しいことだ…ああ、早く来てください！』— 彼は最後まで言うことができなかった、というのも泣くのも『人前で自分の弱さをさらすべきではない』ときまりが悪かったから。— ああ、彼を見るのは何と心苦しかったことか！依頼を聞き終わるか終わらぬかのうちに、私はこちらへ急いだったのでございます。」そして彼女は故人の母に手紙を渡した。

<p>26 帝からの文は、若宮と共に参内するようにと懇ろに促すものだった 「目も見え〜」（1043／一二⑬／二八）</p>	<p>「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなん」とて見たまふ。 「ほど経ば少しうち紛ることもや、と待ち過ぐす月日にそへて、いと忍びがたきはわりなきわざになむ。いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、もろともにはぐくまぬおぼつかなさ、今はなほ昔の形見になずらへてものしたまへ」など、細やかに書かせたまへり。 宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれとあれど、え見たまひはず。</p>	<p>「私の目には全てが曇ってしまっていますが、この慈悲深いご書簡は一光の筋のようでございます…」と彼女は言い、読む。 『私は、せめて時間が少しでも私の悲しみを紛らわしてくれるかと待っていたが、無駄であった；月日は経つが、私の心の中にはなお苦しい憂鬱がある。一緒に慈しまないのを残念がりながら、可愛い息子に思いを馳せている。彼の中に故人の思い出を見ることにしよう、そして貴方が彼と共に宮殿に早く来るよう願う、』と帝は懇ろに書いた。</p> <p>風が露のしずくを 宮殿の野原で吹き払った。 その音に 耳をすますと、心配な思いが ハギの小さい茂みに向かう―</p> <p>このような歌で帝の書簡は終わっていたが、不幸な母は最後まで読むことができなかった。</p>
<p>27 母君は桐壺更衣の入内のいきさつを語り、横死のようなさまを嘆く「命長さの〜」（1094／一三⑥／二九）</p>	<p>「命長さの、いとつらう思ひたまへ知るるに、松の思はんことだに、恥づかしう思うたまへはべれば、ももしきに行きかひはべらんことは、ましていと憚り多くなん。かしこき仰せ言をたびたび承りながら、自らはえなん思ひたまへたつまじき。若宮は、いかに思ほし知るにか、参りたまはんことをのみなむおぼし急ぐめれば、ことわり悲しう見たてまつりはべる、など内々に思ひたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも、いまいまして、かたじけなくなむ」とのたまふ。</p>	<p>「今になって、長生きすることはこんなにもつらい試練になり得ると分かりました。」と彼女は言う。「タカサゴの松がどう思うか？」という思いだけで、恥づかしくなります。まして私が百の石の壁の向こう側に現われるのは不適切でございます。帝がたびたびご書簡を下さることに感謝はいたしておりますが、それでも決意するのは難しいです…一方子供は…彼の心の中はいかがでしょう？恐らく、なるべく早く宮殿に行けたらと夢見てばかりいることでしょう。彼の望みは理解できますが、悲しいかな、それを自覚するのは悲しいことです…このように忍んで帝にお伝え下さいませ。ああ、彼がかくも不運な者の家にとどまっていたはいけないことは分かります。縁起でもないですし、こんな貧しい住まいで生活するには彼の地位は高すぎます…</p>
<p>28 若宮が就寝した後、勅使役の命婦は役目を終えたために帰参を急ぐ「宮は大殿籠〜」（1149／一三⑩／三〇）</p>	<p>宮は大殿籠（おほとのごも）りにけり。 「見たてまつりて、くはしう御ありさまも奏しはべらまほしきを、待ちおはしますらん、夜ふけはべりぬべし」とて急ぐ。</p>	<p>ちょうどその時男の子はお休みになった。 「宮殿で詳しくお話する為に、幼い君にお目にかかりたかったのですが、帝が私を待っていますし、もう遅い時間です…」とユゲイ女史は退出しようとする。</p>
<p>29 亡き更衣の母君は、横死した我が子への尽きせぬ思いを命婦に語る「くれ惑ふ〜」（1163／一三⑭／三〇）</p>	<p>「くれ惑ふ心の闇も堪へがたき片端をだに、はるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも、心のどかにまかてたまへ。年ごろ、嬉しく面だたきついでにて、立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、返す返すつれなき命にもはべるかな。生まれし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、『ただ、この人の宮仕への本意、かならず遂げさせたまつれ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』と、返す返す諫めおかれはべりしかば、はかばかしう後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに、出だしてはべりしを、身にあまるまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつ、まじらひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなりそひはべりつるに、横さまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなん、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になん」と、言ひもやらず、むせかへりたまふほどに、夜もふけぬ。</p>	<p>「ああ、『惑う闇』にせめてつかの間の光を見る為に、自分の悲しみを貴方と分かち合いたいといかに願っていることでしょう」と故人の母は言う。「ゆっくり語り合うために、用事はなくても、ただこちらへお寄り下さい。この近年はずっと、ただ喜ばしく晴れがましい知らせの時にばかり貴方はこちらへいらっしゃいましたのに、今は—どんな書簡のお陰で私は貴方にお目にかかる喜びを得ているというのでしょうか！返す返すも私の運命はいかに悲しいことか、と考えています！私の哀れな娘は、生まれた時からどんなに有望だったことでしょうか！亡きアゼチ-ノダイナゴンは」最期の時までずっと私に諫めました： 『私の宿願—娘を入内させること—を必ず実行するように。私が傍らにいなくなったからといって、気落ちして希望を失わないように。』と。私自身には、頼りになる庇護者なしで宮廷の夫人になることは名誉なことではなく、むしろ反対だと思いましたが、それでもなお、彼の遺言に背きたくないと思って私は入内させたのですが、それでどうなったでしょう？まさに彼女に帝の慈悲深い眼差しが留まり、そのために彼女は絶えず他人からの侮辱と粗野な振る舞いの対象になってしまいました。ああ、彼女は不平をこぼさず宮中で生活し続けましたが、彼女の競争者の心にもますます恨みがつのって、あらゆる方向から彼女に災難が降り掛かり、ついには哀れな子は重い病気にかかって、そのために彼女の命は絶えてしまいました。ですから、私は帝の大いなる寵愛をむしろつらく思っております。でもご理解下さい、その原因は、私の分別のない「闇にさまよう心」なのだ」と彼女は最後まで言えず、涙にむせんだ。 その間に夜が更けた。</p>
<p>30 命婦は帝が悲涙の内に更衣との因縁を偲ぶさまを語って帰参を急ぐ「上もしか〜」（1256／一四⑩／三一）</p>	<p>「上もしかなん。 『我が御心ながら、あながちに人目驚くばかりおぼされしも、長かるまじきなりけり、と今はつらかりける人の契りになむ。世に、いささかも人の心をまげたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはては、かううち捨てられて、心をさめむかたなきに、いとど人わろうかたくなになりはべるも、前の世ゆかしうなん』 と、うちかへしつつ、御しほたれがちにのみおはします」と語りて尽きせず。泣く泣く、 「夜いたうふけぬれば、今宵過ぐさず、御返り奏せん」と急ぎ参る。</p>	<p>「帝も同様に思っているんじゃないですか。『かくも短い期間しか私達に与えられなかったのは私のせいなのだと思う、私は絶望する。本当に、あんなにも盲目的に、感情の惹かれるままに耽ってしまわなかったなら、自分の抑えがたい望みのために周囲の不満を招いてしまわなかったなら…自分では、誰のことも何によっても不快にさせてはいないと思えし、彼女のせいで多くの人々が深く傷ついていたとは思ひもよらなかつた。そして私は一人残され、私の心は平静が得られない。人々の目には、自分はいかにも惨めで滑稽であるに違いない。知りたいものだ、この不幸の原因は何だろうか？前世で私達に何があったのか？』と返す返すも繰り返して、頬に涙が速く流れています」とユゲイ女史は語る。 「もう本当に遅いです、夜が明けないうちに帝にお返事を届けなければ、」と言って宮殿に戻ろうと急いだ。</p>

<p>31 月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える「月は入り方〜」（1315 /一五④ /三二）</p>	<p>月は入り方の、空清う澄み渡れるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほ顔なるも、いとたち離れにくき草のもとなり。 鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かな えも乗りやらず。 「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人かことも聞こえつべくなん」と、言はせたまふ。</p>	<p>月が今にも山の端の裏に隠れようとしていて、空は清く澄み、涼しい小風が吹き、草の虫の鳴き声が思わず涙をさそっている…本当に、このような草むらの茂みとは別れがたい。</p> <p>— 鈴虫が 静まらず鳴き続ける この長い夜に。 一方私の目からは涙が 始終流れ続けている…</p> <p>ユゲイ女史は述べて、どうしても馬車に乗ることができない。</p> <p>— 虫が かくも悲しげに鳴いている。一体何のために さらに露も 貴方は私達の庭に振りかけたのか、雲の上の 宮殿から降りてきて？</p> <p>でも私はまたしても愚痴をこぼしていますね、お許し下さい…」と故人の母は侍女の一人を通じて答える。</p>
<p>32 鞍負命婦の帰参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る「をかしき御贈〜」（1358 /一五⑩ /三二）</p>	<p>をかしき御贈り物などあるべきをりにもあらねば、ただかの御形見にとて、かかる用もやと残したまへりける御装束一領、御髪上げの調度めく物添へたまふ。</p>	<p>このような状況で高価な贈り物を交換する習慣はないので、彼女は手紙と共にただ、娘が残した宮廷装束と、このような折のためにと心して亡き人の形見に保管しておいた調髪のための調度が入った箱を送る。</p>
<p>33 亡き更衣の女房たちは若君の参内を促すも祖母君は手放し難く思う「若き人々〜」（1378 /一五⑫ /三二）</p>	<p>若き人々悲しきことはさらにもいはず、内裏わたりを朝夕にならひて、いとさうざうしく、上の御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とく参りたまはむことを唆しきこゆれど、かくいまいましき身の添ひたてまつらんも、いと人聞き憂かるべし、また見たてまつらばしほもあらんは、いと後ろめたう思ひきこえたまひて、さすがともえ参らせたまつりたまはぬなりけり。</p>	<p>故人の若い侍女達がどんな悲しみのうちにいたかは言うまでもない。その上、宮中生活の華麗さに慣れていたので、彼女達は寂しがり、絶えず帝を思い出して、奥様を急がせるが、「かくも不幸な者がいては、悪意ある噂を招くのは避けられない。一方、孫と離れるのは、短い時間であってもあまりにも辛く、不安で落ち着かないでしょう」と思ってどうしても決心できなかった。</p>
<p>34 桐壺帝は女房と語り明かし長恨歌の絵を見ながら命婦の帰参を待つ「命婦は〜」（1420 /一六③ /三三）</p>	<p>命婦は、まだ大殿籠らせたまはざりける、とあはれに見たてまつる。御前の壺前裁の、いとおもしろき盛りなるを御覧するやうにて、忍びやかに、心憎き限りの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり。このごろ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ。</p>	<p>ユゲイ女史は、帝がまだお休みになっていないのを見て非常に感動した。彼は、中の小庭の華やかな草花を鑑賞している振りをして、周囲で最も感受性の高い何人かの婦人達と語りながら、待っている時間をつぶしていた。この頃、最もしばしば彼らの懇ろな語らいの話題になったのは、挿絵付きの『長恨歌』の巻物だった。帝が昼夜眺めていたこれらの絵は、テイジ天皇の筆により、やまと歌や中国の詩はイセとツラユキによって書かれた。</p>
<p>35 帝は里邸の様を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返書に心を遣う「いと細やか〜」（1469 /一六⑧ /三三）</p>	<p>いと細やかにありさま問はせたまふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御返り御覧ずれば、 「いともかしこきは、置き所もはべらず。かかる仰せ言につけても、かきくらす乱り心地になん。 あらし風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞ静心なき」 などやうに乱りがはしきを、心をさめざりけるほど、と御覧じゆるすべし。</p>	<p>ユゲイ女史が故人の家で見たことについて、帝は細やかに多くの質問をした。彼女の方は、いかに心動かされ悲しい光景が眼前に広がっていたかを伝えて、手紙を伝えた。 「帝のご慈悲は誠に限りなく、私は戸惑っております…悲しいかな、帝のご親切な書簡は、私の気持ちをいっそう乱し、魂は憂鬱の淵に沈んでしまいました。</p> <p>ほら枯れてしまった 荒い風から守っていた 枝が。 そして不安が心を引き裂く— ハギの小さい茂みはどうなることでしょうか？」</p> <p>故人の母の書き方はかなり支離滅裂で、あまり丁寧ではなかったが、帝は恐らく、彼女はまだ悲しみから回復できていないのだと判断して許したことでしょ。</p>
<p>36 悲嘆を隠せない帝は更衣入内の頃を思い出し祖母君をも不憫に思う「いとかうしも〜」（1504 /一六⑫ /三四）</p>	<p>いとかうしも見えじ、とおぼしむれど、さらにえ忍びあへさせたまはず。御覧じはじめし年月のことさへ、かき集めよろづにおぼし続けられて、時の間もおぼつかかりしを、かくても月日は経にけり。あさましうおぼしめさる。 「故大納言の遺言あやまたず、宮仕への本意深くものしたりし喜びは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ、言ふかひなしや」 とうちのたまはせて、いとあはれにおぼしやる。</p>	<p>帝は、「私の悲しみが人々に見られないように」と精神的な平静さを取り戻そうとどんなに努力しても、恋しさに打ち勝つことはできなかった、そして彼の思いは絶えず故人に向けられていた。彼女が初めて宮中に現われた遠い日を始めとして、彼女と結びついた様々な折を思い出していた。「かつては短い時間ですらも離れているのは辛かったのに、もうこんなにも月日が過ぎた…」と彼は自分に驚きながら思った。「夫の遺言を守って娘を入内させた、故人の母に十分に報いられるようにと、私はいつも考えていた。でも悲しいかな、今や全ては甲斐がない…」と彼はため息をつきながら、悲しい思いを不幸な母に向けていた。</p>

<p>37 帝は若宮の将来を約束し、贈物から長恨歌の叙に思いを重ねて歌う「かくても〜」(1543／一七③／三四)</p>	<p>「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなん。命長くとこそ思ひ念せめ」などのたまはず。かの贈り物御覧ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりけむしるしの叙ならましかばと思はずも、いとかなし。尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく</p>	<p>「それでも、子供が成長すれば、もしかしたら、また機会ができるかもしれない。もう少し長生きできるように専ら心がけよ…」 ユゲイ女史は贈り物を見せる。 「ああ、もしこのかんざしが、亡き人の住処から届けられた思い出の印であったなら…」と彼は夢見るが、悲しいかな…  私にいてほしい 愛しい人を捜しに行く 用意のある道士が、 彼から知りたいものだ、 どこに彼女の魂が住んでいるのかを。</p>
<p>38 帝は玄宗と楊貴妃の物語から、更衣との尽きぬ愛情を恨めしく思う「絵に描ける〜」(1572／一七⑦／三五)</p>	<p>絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いと匂ひ少なし。太液の芙蓉、未央の柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひは麗しうこそありけめ、懐かしうらうたげなりしをおぼし出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべき方ぞなき。朝夕の言くさに、翼をならべ、枝をかさはむと契せたまひしに、かなはざりける命のほど、尽きせず恨めしき。</p>	<p>絵では楊貴妃の顔はどこか生気がない。彼女を描いた画家はいかに名声があっても、どうやら、やはり筆には限界があるようだ。タイイ湖の芙蓉やペイヤン宮殿の柳に彼女はたとえられたが、ここでは衣装の豪華さにまず注意が惹きつけられる。帝はあの他方の女性、あんなに穏やかで優しい女性を思い出していた — ああ、そうだ、彼女の隣では、花ですら見劣りして、鳥の鳴き声はあまり甘美には思えなかった…朝夕常に彼らは「空では別れない鳥の一对として飛び、地では分岐しない枝として伸びるように！」と誓い合ったが、あらゆる誓いはむなしくなり、彼女はこの世を去って、彼にはただ、かくも早く彼らを別れさせた運命を嘆くしかなかった。</p>
<p>39 帝の心を踏みにじるように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る「風の音〜」(1615／一七⑩／三五)</p>	<p>風の音、虫の音につけて、もののみ悲しうおぼさるるに、弘徽殿には久しく上の御局にも参上りたまはず、月のおもしろきに、夜ふくるまで遊びをぞしたまふなる、いとすさまじう、ものしと聞こしめす。このごろの御気色を見たてまつる上人、女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおしたち、かどかどしき所ものしたまふ御方にて、ことにもあらずおぼし消ちて、もてなしたまふなるべし。</p>	<p>風の音や虫の声に耳を済ませながら、帝は悲しい物思いに沈んで時を過ごしていたが、コキデンの御殿では騒々しい音楽が響いていた。素晴らしい月夜で、どうやら、久しく帝のお部屋に現われていないニョウゴは、楽しみを失いたくなくなった。 「こんなに情のないことがあり得ようか！」と帝は思った。彼の悲しみを見知っていた宮廷に仕える男性方や婦人方も、憤慨した。コキデンニョウゴは、いつも強情な性質で際立っているのに、今や何事も起こらなかつたかのように振舞っていた。</p>
<p>40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しみ歌う帝は、眠ることすらできない「月も入りぬ〜」(1660／一八③／三六)</p>	<p>月も入りぬ。 雲のうへも涙にくる秋の月いかですむらん浅茅生の宿 おぼしめしやりつつ、燈火（ともしび）をかかげ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目をおぼして、夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。</p>	<p>だがまもなく月が沈んだ。  秋の月のかんばせは ここ、雲の上の宮殿ですら 涙で暗くなってしまった。 だから澄んでいられようか 雑草が生えた住まいでは？  故人の家に思いを馳せながら、帝は孤燈が消えるまで起きていた。ほら右近衛府の夜警の声が聞こえた — もう牛の警備兵に違いない…好奇の目にさらされたくなくて、帝は寝所に向かったが、長いこと眠りにつけなかった。</p>
<p>41 帝は政治まで疎かにしかねない悲しみの中で食事召し上がらない「朝に起き〜」(1693／一八⑦／三六)</p>	<p>朝に起きさせたまふとも、 「明るも知らず」 とおぼし出づるにも、なほ朝政はおこたせたまひぬべかめり。ものなどもきこしめさず。朝餉の気色ばかりふれさせたまひて、大床子の御膳などは、いと遙かにおぼしめしたれば、陪膳にさぶらふ限りは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。すべて、近うさぶらふ限りは、男女、いとわりなきわざかな、と言ひ合はせつつ嘆く。</p>	<p>早朝に起き上がった時、思わず「夜明けがあることを時折忘れたものだった…」と思い出された。その日は到底、彼はしかるべき注意を政治の事に向けられはしなかつたであろう。最も洗練された食事にも帝は無関心のままであった。朝の米にほんの少し触れただけで、大昼餐の時ですら彼の思いは遙か遠くに飛び、食卓に仕える婦人方は、彼の苦しんでいる顔を見て密かにため息をついていた。そう、側にいた人々は皆 — 男も、女も — 完全に途方に暮れていた。「ほら困った事だ！」と彼らは嘆いた。</p>
<p>42 帝に奉仕する者たちも政道放棄を嘆き楊貴妃の例まで引合いに出る「さるべき契〜」(1731／一八⑩／三七)</p>	<p>「さるべき契りこそおはしましけめ、そこらの人の譏り、恨みをも憚せたまはず、この御ことにふれたることをば、道理をも失はせたまひ、今はたかく世の中のことをも、思ほし捨てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなり」と、人の朝廷の例までひき出で、ささめき嘆きけり。</p>	<p>「どうやら、これが帝の宿命なのでしょう。人々の噂も皆の批判も彼は気にならず、彼女のことだけで頭がいっぱいで、全く理性を失ってしまったようです、そして今やほら、ご覧なさい、国の事をなおざりに始めている — 褒められたことでしょうか？」と、ある他国のこともほのめかしながら廷臣達はささやき合い、苦しげにため息をついていた。</p>
<p>43 若宮参内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵「月日経て〜」(1762／一九②／三七)</p>	<p>月日経て、若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならず、清らにおよすけたまへれば、いとゆゆしうおぼしたり。 明るる年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしうおぼせど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふくおぼし憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、 「さばかりおぼしたれど、限りこそありけれ」と、世人も聞こえ、女御も御心おちみたまひぬ。</p>	<p>月日が過ぎ、ようやく幼い皇子が宮殿に入った。とても美形だったので、異なる世界の存在のように思われ、彼を見た者は誰でも「こんな美しい人が長命でいられようか？」と思わず不安に襲われた。 翌春に新しい皇太子の公表が行われる予定で、以前の意向を取りやめたいという希望が帝に生じなかつたとは言えないが、年下の息子には強力な庇護者がいなかったため、このような任命はむしろ彼にとって害になるであろうし、まして宮廷は決してそのような選択に同意しないであろう。それで帝は誰にも一言も言わなかつた。「そう、いかに年下の子に対する愛が偉大であっても、」と人々は言った、「全てに、どうやら、限りがあるようだ。」一方コキデンの御殿の婦人はようやく平静を得た。</p>

44 祖母君は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去「かの御祖母〜」（1805 / 一九⑥ / 三七）	かの御祖母北の方、慰む方なくおぼしづみて、おはすらん所にだに尋ね行かんと願ひたまひしるしにや、つひに亡せたまひぬれば、またこれを悲しびおぼすこと限りなし。御子六つになりたまふ年なれば、このたびはおぼし知りて恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れ睦びきこえたまへるを、見たてまつりおく悲しびをなむ、返す返すのたまひける。	少年の祖母、故アゼチ - ノ ダイナゴンの家の北の間の夫人は、憂鬱を克服することができず、程なくして一娘と早く一緒にいたいと願っていたからであろうか？ — お亡くなりになった。新たな悲嘆は限りなかった。少年はもう六歳になっていて、失った苦しみに打ちひしがれ、痛ましく泣いた。この頃高年齢の夫人は、孫に愛着を持ち、しばしば彼に、来るべき別れを思えばいかに悲しくなることかと話していた。
45 若宮七歳の読書始めの後は、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服「今は内裏に〜」（1844 / 一九⑩ / 三八）	今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば、読書始めなどせさせたまひて、世に知らず聡うかしこくおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧ず。 「今は誰も誰もえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れてまつりたまふ。いみじき武士、仇、敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。	今や少年は宮殿でのみ暮らしていた。七歳になった時、読書初めの儀式が行われたが、その時彼は、我々の世には非常に稀である明晰な頭脳と才能を発揮したので、帝は彼を幾分かの恐れを感じて眺めた。 「彼を憎むことができようか？ 今や皆、彼には母がないという理由だけでも、かわいがらなければならない。」と帝は言い、あらゆる所へ、コキデンの御殿にすらも、息子を連れて行った — こうして、最も秘められた部屋にも彼と共に入った。容赦を知らぬ粗野な戦士や、敵、悪意ある人ですら、この魅力的な子供を見ると微笑むであろうから、コキデンの御殿のニョウゴは公然とは彼を蔑視することができなかった
46 若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音曲にも秀でる超人さを発揮「女御子たち〜」（1904 / 二〇② / 三九）	女御子たち二所、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしう恥づかしげにおはすれば、いとをかしううちとけぬ遊びぐさに、誰も誰も思ひきこえたまへり。 わざとの御学問はさるものにて、琴、笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続けば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。	彼女は帝の二人の皇女を生んでいたが、誰も年下の皇子を凌駕することができなかった。他の夫人方も彼を敬遠しなかった。今からもう少年はとても可愛らしく、驚くほど美形だったので、彼女達は、当然作法に合った礼儀正しさは保ちながら、彼の遊びに喜んで参加した。定められた学問でいかなる成功を取めたかや、コトや笛でも雲居中を興奮させるように奏でたことを言うに値しようか？ しかしながら、彼のあらゆる長所を挙げ続けたなら、あまりにも完璧な人物像が作られてしまって、信じることはできなくなってしまうだろう。
47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を覩て不思議がる「そのころ〜」（1955 / 二〇⑥ / 三九）	そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こしめて、宮の内に召さんことは、宇多の帝の御誠あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館につかはしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたまつるに、相人驚きて、あまたたび傾きあやしぶ。 「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷の固めとなりて、天下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。	驚いた高麗人は、不思議そうに頭を振りながら少年の顔を熟視した。 「この少年の顔立ちによれば、」とようやく彼は厳かに言った、「彼は国家の父となり、国の権力者の最高位に昇り得るが、それには動乱や困苦が伴うであろう。皇室の固め、天下の第一の後見人となる使命だという可能性もあるが、悲しいかな、それも私は完全に自信を持っては言うことはできない。」
48 博識の右大弁と高麗人が漢詩を作り交わし若宮も興深い詩句を作る「弁も、いと〜」（2019 / 二〇⑬ / 四〇）	弁も、いと才かしてき博士にて、言ひ交したることどもなん、いと興ありける。文など作りかはして、今日明日帰りに去りなんとするに、かくありがたき人に対面したる喜び、かへりては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、皇子もいとあはれなる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたまつる。朝廷よりも多くの物たまはず。おのづからことひろごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかとおぼし疑ひてなむありける。	ウダイベンも非常に学識ある名士なので、彼らの語らいは非常に教訓的であった。彼らは折に寄せて詩を作り合い、しかも予言者は、「今日明日に私は帰国を去らなければならないが、かくも類い稀なる美質を持った人に会って感じられた喜びは、私の心の中で別れの悲しみと結びついている」という自分の気持ちを上手に伝えることに成功していた。 少年も感動的な詩で答え、限りなく感嘆した予言者は彼に豪華な贈り物を捧げた。宮中からも惜しめない報賞が送られた。帝が秘密のままにしようといかに努めても、予言に関する噂は何らかの形で広がった。春の間の皇子の祖父である右大臣等は、「一体それはどういうことか？」と不審がりながら心配した。
49 帝は若宮を臣籍降下させ朝廷の補佐役にと決めると学問に励ませる「帝、かしこき〜」（2075 / 二一⑤ / 四〇）	帝、かしこき御心に、倭相を仰せておぼしよりにける筋なれば、今までこの君を親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけりとおぼして、無品親王の外戚の寄せなきにてはただよはさじ、我が御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなん、行く先も頼もしげなめることとおぼし定めて、いよいよ道々の才を習はさせたまふ。	倦むことなく息子を寵愛している帝は、かつて既に彼の顔立ちを地元の古い表によってお調べになっていて、恐らく、自分で何らかの結論に達していたようであり、ともかく、今に至るまで少年にミコ一親王の称号すら授けていなかった。今や、全てについて熟考して、「この予言者は真に賢い」と思って最終的な決意をした：「母方に影響力ある庇護者のない無位の皇子として、彼を人生の波に漂わせてはいけぬ、という私の世に対する権力も永遠ではないから。否、ただの臣下にして、皇室のお世話をさせよう、ただこのようにしてのみ彼に頼もしい将来を保証できるだろう。」それで帝はいつも息子に学問や芸術が完璧にできるよう奨励した。
50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断「際ことに〜」（2120 / 二一⑩ / 四一）	際ことにかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば、世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこき道の人に勤へさせたまふにも、同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべくおぼしおきてたり。	しかも、少年はあらゆる事に目覚ましい上達を遂げており、彼をただの臣下にとどめるのは極めて惜しかったが、皇子の地位は少なからぬ厳しい視線を集めるであろう。帝は最も賢い占術者達にも問い合わせたが、彼らの予言もただ以前のものの正しさを確認するだけであつたので、最初の決断を最終的に固め、息子をミナモトの氏、別名ゲンジに属させた。
51 更衣が忘れられず世を疎ましく思う帝に、先帝の四の宮の噂が届く「年月にそへ〜」（2147 / 二一⑬ / 四一）	年月にそへて、御息所の御ことをおぼし忘るるをりなし。慰むやとさるべき人々（大島本「人々を」）参らせたまへど、なずらひにおぼさるだにいとかたき世かな、と疎ましうのみよろづにおぼしなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします。	月日が経ったが、帝は片時も故人を忘れることはなかった。憂鬱が晴れるかと期待して、適切と思われる婦人方を召したが、悲しいかな、彼女と比べものになったであろうか？ — 不快以外のものは何も彼の心に呼び起こさなかった。ちょうどその頃、母后にとりわけ気を配って愛育されている先帝の第四皇女の非凡な美しさに関する噂が世に広まっていた。
52 典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏し帝の気を引く「母后世になく〜」（2173 / 二二② / 四一）	母后世になくかづききこえたまふを、上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「亡せたまひにし御息所の御容貌に似たまへる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、後の宮の姫宮こそ、いとようおぼえて生ひ出でさせたまへりけれ。ありがたき御容貌人になん」と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねむごころに聞こえさせたまひけり。	ナイシ - ノ スケという皇室にお仕えする婦人は、先帝にも仕えていたので、皇女と近しく、幼い時から彼女を知っていて、今でも時折会うことが分かった。 「三代の帝にお仕えしましたが、故ミヤスドコロに似ている女性を一度も見ただことはありませんでした。ただ先代の皇后の娘だけは…そうです、本当に、稀に見る美しさを持つお方です！」と彼女は帝に報告して、彼の心は「まさか？」と期待でききめき始めた。皇女の母に対して丁寧なお願いをしたが、

53 帝を巡る女たちの怖さを言う四の宮の母が死ぬと、入内の道が開く「母后、「あな〜」(2233 / 二二⑧ / 四二)	母后、 「あな恐ろしや、春宮女御のいとさがなくて、桐壺更衣の、あらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」 と、おぼしつみて、すがすがしうもおぼしたたざりけるほどに、后も亡せたまひぬ。心細きさまにておはしますに、 「ただ我が女御子たちの同じつらに思ひきこえん」 と、いとねんごろに聞こえさせたまふ。	彼女は娘の運命を案じてためらった。「春の間の皇子の母がいかにか意地悪な性質であるかは皆に知られている、」と彼女は思った。「桐の御殿に住んでいた方の運命にどんなに苦難が降り掛かったかを思い出すだけで十分だ。いや、いや、忌まわしい…」 こうして返事ができない内に彼女は突然お亡くなりになり、皇女はあらゆる支えもなく、一人残されてしまった。 「ただ娘のようにお世話をしましょう」と帝は言い張り、
54 不思議なほど更衣に似る四の宮は周りに押され入内し藤壺と称する「さぶらふ人々〜」(2264 / 二二⑩ / 四二)	さぶらふ人々、御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、かく心細くておはしますよりは、内裏住みせさせたまひて、御心も慰むべくなどおぼしなりて、参らせたまつりたまへり。藤壺と聞こゆ。げに御容貌ありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる。	お仕える婦人方や後見人達、彼女の兄ヒョウブキョウ皇子は「孤独で寂しがつているよりは宮中に住んだ方がいいでしょう、もしかしたら、そこで彼女は少し慰むでしょう」と判断し、彼女を帝に差し出した。彼女はフジツボ、藤の御殿の皇女と呼ばれた。実際に、顔立ちやあらゆる風貌が驚くほど故人に似ていて、
55 藤壺は皇女の身ゆえに誰に気兼ねもなく、帝の寵愛もしたいに移る「これは人の〜」(2295 / 二三② / 四三)	これは人の御きはまさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけばかりであかぬことなし。かれは、人の許しきこえざりしに、御心ざしあやになりにしぞかし。おぼし紛るとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなうおぼし慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。	世における高い地位が彼女を周囲の目にいっそう素晴らしく見せていた。誰も彼女を見下すことができず、帝は妨げられることなく彼女に寵愛を与えることができた — いわば、この結び付きを申し分ないものと呼ぶのを邪魔するものは何もなかった。もしかしたら、当時はまさに周囲の不承認が帝の熱意をあつ程度まで燃やしたのかもしれない、誰が知り得ようか…帝は、過去についての思いを全く捨てたとは言えないが、彼の考えは、自然に、他の方向に向かい、次第に彼は慰んだ。そう、世の全てははかなくて、そのことを思うと、しみじみとした悲しみが魂を貫く…。
56 源氏の君は常に父帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見する「源氏の君は〜」(2327 / 二三⑤ / 四三)	源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方は、え恥ぢあへたまはず。いつれの御方も、我人に劣らむとおぼいたるやはある、とどりにいとめでたけれど、うち大人びたまへるに、いと若うつくしげにて、せちに隠れたまへど、おのづから漏り見たまつる。	若いゲンジの君はどこでも帝の後をついてくるので、他より頻繁に帝が訪れる方は、彼から常に隠れてははられなかった。宮中に、他より劣っていると自分を考える婦人を見出すことができるだろうか？おのおのが長所を持っていることは疑いもないが、彼女達の年齢はもう少なくな、藤の御殿の皇女一人だけが新鮮な若々しい美しさで輝いていた。彼女がどんなに顔を隠そうと努めても、少年は密かに彼女を見て分る事ができた
57 三歳で母と死別した源氏の君は、母に生き写しだという藤壺を慕う「母御息所も〜」(2370 / 二三⑨ / 四三)	母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり」と典侍の聞こえけるを、若き御心地にとあはれと思ひきこえたまひて、つねに参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。	母の姿はぼんやりとした陰としても彼の記憶に残っていなかったが、ナイシ-ノ スケからしばしば、皇女は故人に非常によく似ていると聞いて、彼の若い心に彼女に対する優しい気持ちが無意識に生まれた。「おお、思いついた時にここへ全く気兼ねなく来ることができたなら…」と彼は夢見た。
58 帝は藤壺と源氏を愛し、更衣の形代である藤壺に源氏は好意を示す「上も、限りなき〜」(2396 / 二三⑪ / 四四)	上も、限りなき御思ひどちにて、 「な疎みたまひぞ。あやくよそへきこえつべき心地なむする。なめしとおぼさで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどは、いとよう似たりしゆ糸、かよひて見えたまふも、似げなからずなん」 など聞こえつけたまへれば幼心地にも、はかなき花、紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。	帝は、両者を限りなく愛していて、たびたび頼んだ：「この子を疎まないで下さい。驚くべきことだが、時折貴方に彼の母を見出します。少年に寛容になって、彼を愛するよう努めて下さい。貴方たちはよく似ているので、彼を貴方の息子だとみなすことは十分可能です。」 少年は心から皇女になつき、無邪気な心で、彼女に自分の気持ちを表現するためにあらゆる機会 — 月並みな花なり楓の紅葉なり — を活用した。
59 弘徽殿と藤壺が険悪な中、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃「こよなう〜」(2433 / 二四① / 四四)	こよなう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿女御、またこの宮とも御仲そばそばしきゆ糸、うちそへて、もとよりの憎さもたち出でて、ものしとおぼしたり。世に類ひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほにはほしさはたとへん方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとどりりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。	藤の御殿の夫人に友情を全く感じていなかったコキデンニョウゴは、これに気付かないではいられず、彼女の心に以前からの憎しみが燃え上がった。世の中じゅうに並ぶものがないと感じられた息子に帝は首っただけであった。実際、藤の御殿の素晴らしい居住者ですら彼を凌駕することはできなかった。人々は少年を光っていると呼び、藤の御殿の皇女は美しさで彼にほとんど劣らず、二人とも帝の心に等しい位置を占めていたので、彼女を輝く日の皇女と呼んだ。
60 光源氏は十二歳で兄東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う「この君の〜」(2483 / 二四⑤ / 四四)	この君の御童姿、いと変へまうくおぼせど、十二にて御元服したまふ。居起ちおぼしいとなみて、限りあることに、事をそへさせたまふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式、よそほしかりし御響きにおとさせたまはず。所々の響など、内蔵寮、穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなることもぞ、ととりわき仰せ言ありて、清らを尽くして仕うまつれり。	ゲンジの少年の姿を変えるのは残念だったが、少年はもう十二歳に達し、加冠の儀を行う時期になった。帝自ら、来るべき祝典の準備で疲れを知らずに奔走し、規則で定められている以上の多くの事を加えることができた。数年前に南殿で行われた春の間の皇子の成人式に、儀式の豪勢さと規模で決して劣ってはならず、あらゆる所での最後の饗宴は盛大に行われることになっていて、帝は恐らく、このような折に宮殿の宝物殿や穀倉院の役人の手によって実施される公的な儀式の食事は十分に豪勢ではないだろうと考えたために、この点に関して特別な命令を出した。
61 清涼殿で左大臣が光源氏に冠を被せ、帝は更衣がいたらと感極まる「おはします〜」(2537 / 二四⑩ / 四五)	おはします殿の東の廂、東向きに椅子立てて、冠者の御座、引き入れの大臣の御座、御前にあり。申の時にて源氏参りたまふ。みづら結ひたまへるつらつき、顔の匂ひ、さま変へたまはむこと惜しげなり。大蔵卿、蔵人仕うまつる。いと清らなる御髪をそぐほど、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばとおぼし出づるに、堪へがたきを、心強く念じかへさせたまふ。	清涼の御殿、セイリョウデンの東の前面の部屋に、東向きに玉座が、その前に — 成年に達した人と加冠をする人のための席がしつらえられ、その加冠の役は大蔵卿自身が務めた。そして申の警備の時にゲンジが登場した。彼の頬に子供の髪型『ミヅラ』の紐が丸くなっていて、顔は鮮やかな色つやで輝いていた…。いかに彼は可愛らしく、彼をそのような姿でもはや誰も見る事ができなくなるのは、いかに残念なことか。大蔵省の長官が『髪結い』に着手した。彼がこの素晴らしい髪を切るのを見て無関心ではいられなかった、帝は痛ましく心が締め付けられた：『ああ、もし彼女が今これを見たなら！…』だが意志の力で彼は自分を抑えた。
62 加冠の儀の後、光源氏の拝舞にみは感涙し帝も更衣を想い感無量「かうぶり〜」(2580 / 二五① / 四五)	かうぶりしたまひて、御休み所にまでたまひて、御衣奉りかへて、おりて拝したてまつりたまふさまに、皆人涙落としたまふ。帝はた、ましてえ忍びあへたまはず、おぼし紛るるをりもありつる昔のこと、とりかへし悲しくおぼさる。いとかうきびはなるほどは、あけ劣りやと疑はしくおぼされつるを、あさましうつくしげさ添ひたまへり。	儀式が終わった後、ゲンジは廷臣の部屋へ退出し、そこで着替えをして、庭へ下りた。彼が感謝の舞を行ったのを見て、人々は涙を流した。帝については言うまでもあろうか？彼が自制を保つのはさらに難しかった。既に記憶からぬぐい去られ始めたと思われた昔に関する悲しい思いが再び湧いた。「彼はあまりに幼すぎる、大人の髪型は彼に似合うまい」と帝は案じていたが、新たに調髪された少年はいっそう素晴らしくなっただけであった。

63 左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする「引き入れの〜」(2623 / 二五⑥ / 四六)	引き入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしづきたまふ御娘、春宮よりも御気色あるを、おぼしわづらふことありける、この君に奉らむの御心なりけり。内裏にも、御気色たまはらせたまへりければ、「さらば、このをりの後見なかめるを、添ひ臥しにも」と、もよぼさせたまひければ、さおぼしたり。	儀式の時に加冠の任務を果たした左大臣には、ただ一人、皇女を母に生まれ、両親の世話の最も主要な対象となっている娘がいた。彼女に対し春の間の皇子にも気色があったが、大臣は同意するのをためらった、というのは密かにゲンジに彼女を差し出すつもりだったからである。それ故、帝もこの結び付きに対する意向を述べ、「では、少年にはふさわしい後見人がいない以上、すぐに共寝の儀式に移ってもよい」と提案した時、大臣はためらわずに同意した。
64 祝宴で左大臣から娘葵の上との結婚を仄めかされ光源氏は恥じらう「さぶらひに〜」(2658 / 二五⑨ / 四六)	さぶらひにまかでたまひて、人々大御酒などまゐるほど、親王たちの御座の末に、源氏着きたまへり。大臣気色ばみきこえたまふことあれど、ものの慎ましきほどにて、ともかくもあへしらひきこえたまはず。 御前より、内侍、宣旨承り伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御祿のもの、上の命婦取りてたまふ。白き大袿に御衣一領、例のことなり。	そうこうするうちにお客達は、ご馳走が用意されている廷臣の部屋に移り、ゲンジはしかるべき場所 — 皇子の次に座を占めた。大臣は自分の意図をほのめかそうとしたが、少年は、まだ若く内気で、どう答えたらいいのか分からなかった。しばらく経ってナイシ-ノスケが、帝の部屋に参上するようにとの帝の命令を大臣に伝え、彼は外へ出た。 帝の部屋に仕える婦人は大臣に贈り物 — 儀式に参加した報賞：大きい白いウチキや宮廷装束一式 — つまり、このような折に贈ることになっている物全てを渡した。
65 左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拝舞する「御盃のついで〜」(2703 / 二五⑭ / 四七)	御盃のついでに、 いとときなきはつもとゆひに長き世をちぎる心は結びこめつや 御心ばへありて驚かせたまふ。 結びつる心も深きもとゆひに濃きむらさきの色しあせずはと奏して、長橋よりおりて、舞踏したまふ。	酒の杯を少し飲み、帝は意味有りげに、彼の意図を探りたいと明らかに願って述べた：  子供の髪のを 初めてしっかり結んだ。 長い年月 二人の運命を一緒に結びつける 願いを固めましたか？  しっかりした結び目で 私はこの髪のを結んだ、私の願いは 変わらない。 もし紫の紐が 鮮やかさを失わなければ…  大臣は答え、長橋から下りて、感謝の舞を行った。
66 左大臣や親王たちは祿を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大「左馬寮の〜」(2730 / 二六④ / 四七)	左馬寮の御馬、蔵人所の鷹据えてたまはりたまふ。御階のもとに、親王たち上達部連ねて、祿ども品々にたまはりたまふ。 その日の御前の折櫃物、籠物など、右大弁なん承りて仕うまつらせける。屯食、祿の唐櫃どもなど所狭きまで、春宮の御元服のをりにも数まさされり。なかなか限りもなくいかめしうなん。	左の皇帝の厩舎から馬が連れて来られ、皇帝の保管所から鷹が連れて来られた。名門の高官や皇子達は、階段の近くに整列して、おのおの身分に応じた贈り物を受け取った。糸杉の箱に入ったご馳走や、籠の枝に結びつけられた果物は、帝の指示によってこの日の為に、全て同じウダイベンによって準備された。お米の小箱が乗ったお盆や、参加者への贈り物が入った中国の小箱が辺りの全てを占め、それらは春の間の皇子の成年式の日をも数が上回った。といっても、他のそれ以外のものもはるかに豪華であった。
67 元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚「その夜〜」(2768 / 二六⑧ / 四七)	その夜、大臣の御里に、源氏の君まかでさせたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづきこえたまへり。いとくひはにておはしたるを、ゆゆしうつくしと思ひきこえたまへり。女君は、少し過ぎしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥づかしくとおぼいたり。	その日の夜、若者は左大臣の家に向かった。そこで未来の婿が蔵人に迎えられ、儀式はかつて見たことがない程盛大に行われた。全くまだ子供ではあるが、ゲンジはとても美しいので、彼を見た者は誰でも「このような美が長命であり得ようか？」と思わず不安に襲われた。大臣の娘は少し年上で、ゲンジがいかに若いかを見て、恥づかしくなった。
68 左大臣は帝の信頼に加えて光源氏まで加わり右大臣家を凌ぐ勢いに「この大臣の〜」(2800 / 二六⑩ / 四八)	この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内裏の一つ后腹になんおはしければ、いつ方につけてもいと華やかなるに、この君さへかくおはしそひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき、右大臣の御勢は、ものにもあらずおされたまへり。	左大臣は帝の特別な厚意を受けることができている、この乙女の母は帝と同腹の妹だったので、世の中の彼の地位は極めて揺るぎなかった。左大臣がゲンジも手に入れることに成功した今、皇太子を孫に持ち、世に対し独占的な権力を有していたと思われた右大臣は、全く影響力を失った。
69 左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う「御子ども〜」(2833 / 二七① / 四八)	御子どもあまた、腹々にものしたまふ。宮の御腹は蔵人少将にて、いと若うをかきき、右大臣の、御仲はいとよからねど、え見過ぐしたまはで、かしづきたまふ四の君にあはせたまへり、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになん。	左大臣には様々な妻から多くの子供がいた。彼の息子の一人は、同じ皇女から生まれ、ショウショウの位でクロウの職にあり、クロウ-ノショウショウと呼ばれていた。彼はとても若くて美形だったので、右大臣は、彼の父親に対して反感を持っていたにもかかわらず、若者を無視できなくて、優しく愛されていた四番目の娘を差し出した。彼のことは、ゲンジに対するのと劣らず心遣いされていた — つまり、どちらの結び付きも誠に申し分なかった。
70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠「源氏の君は〜」(2863 / 二七④ / 四九)	源氏の君は、上の常に召しまつせば、心やすく里住みもえしたまはず。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、類ひなしと思ひきこえて、さやならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな、大殿君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心一つにかかりて、いと苦しきまでおはしける。	帝は常にゲンジを自分のものに召し、長い間大臣の家に留まっていることができなかった。彼の心にはただ一人 — 藤の御殿の皇女の姿だけが生きていた、なぜなら彼女に並ぶ者は世にいなかったからである。「彼女のような女性を見つけないものだ」とゲンジは思った。「でも、悲しいかな、そのような人はそれ以上いない。大臣の娘も美しいし、家では大切にされ慈しまれているが、彼女には心がかからない。」こうして、一つの情熱が、時折耐えがたい苦しみをもたらしながら、彼の若い心をとらえていた。

<p>71 宮中での光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う「大人になり〜」(2912 / 二七⑨ / 四九)</p>	<p>大人になりたまひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れたまはず。御遊びの折々、琴、笛の音に聞こえ通ひ、ほのかなる御声を慰めて、内裏住みのみ好ましようおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日など、絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は、幼き御ほどに、罪なくおぼしなして、いとなみかしづききこえたまふ。御方々の人々、世の中におしなべたらぬを、選(え)り整えすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなおほなおぼしいたつく。</p>	<p>ゲンジが大人になった今、最近までは自由に入ることが出来た、夫人方の内側の部屋に入ることを帝はもう彼に許さなかった。だが宮殿で音楽演奏が行われた時、彼の笛の音が彼女のコトの弦の響きと一つになり、時々仕切りからほのかに聞こえる優しい声が届くと、心は甘美なときめきで満たされた…。恐らく、まさにこのために、宮中での生活が彼にはとても魅力的に感じられたのだろう。そこでゲンジは五、六日連続で過ごし、ただ時折二日か三日だけ大臣の家に帰って来たが、彼はこんなに若い時期だから…と考え、非難しなかった。そして婿に以前と変わらずかしくいた。夫婦にたいする奉仕には大臣は最も洗練された若い侍女を配した。婿を自分の家に惹きつけるために、様々な娯楽を企画した — つまり、出来る限り彼を満足させようと努めていたのである。</p>
<p>72 後の二条院を修築し、そこで理想の女性と暮らしたいと望む光源氏「内裏には〜」(2976 / 二七⑩ / 五〇)</p>	<p>内裏には、元の淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々、まかで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ。元の木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りののしる。 かかる所に、思ふやうならむ人を据えて住まばやとのみ、嘆かしようおぼしわたる。光る君といふ名は、高麗人のめできこえて、つけたまつりけるとぞ、言ひ伝へたるとなむ。</p>	<p>明るい景色の部屋 — シゲイシャはゲンジの手に移った。かつて彼の母に仕えた婦人方を散り散りにさせたくない願って、帝は彼らに息子の奉仕をさせた。修理工房や大工局は、しかるべき指示を受けて、彼女の生家を建て替えた — そしてそれには並ぶものがなかった。この屋敷はかつて絵のような一隅、茂った木立、優雅な小山で名高かったが、今は池を広くすることが決まり、にぎやかに作業が進んで、ついに庭は、家と同様に、かつて見たことがないほどの豪華さで輝き始めた。「もしここに、私が常に思いを寄せる唯一の女性のようなお方を住まわせることができたなら…」と若者はため息をつきながら思った。 光っているという呼び名は、かの予言者・高麗人が、ゲンジの美しさに心から感嘆して彼につけたと言われている。</p>

小見出し	原文（池田本校訂本文・伊藤鉄也作成）	中国語『源氏物語』（銭稻孫訳）
1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する「いづれの御時〜」（0001 / 五① / 一七）	いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。	どの王朝であるか、女御、更衣などたくさんいらっしゃる中に、一人だけ特に偉い身分でもないのに、時めいているのがいます。最初から自分が非凡だと自慢している何人かは、目障りだと思い、彼女を貶め、嫉妬しています。同じ位、あるいはより下の更衣たちは、一層苛立っています。
2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる「朝夕の宮仕〜」（0031 / 五④ / 一七）	朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかざあはれるものに思ほして、人の譏りをもえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人なども、あいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。	朝晩伺候に行くだけでも、人の疑心を買うばかりで、それで癪にさわるせいか、彼女は憔悴してきて、病弱の時はよく里帰りしています。そこで、天皇は却って可哀そうにと思い、人の誹りも憚らないで、例のないほど彼女を寵愛しています。殿上にいる公卿たちは目を側め、これが目覚しいご優遇だと言っています。
3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る唐土にも〜」（0073 / 五⑧ / 一七）	唐土にも、かかることの起こりにこそ、世も乱れ悪しかりけれと、やうやう天の下にも、あぢきなう人のもて悩みぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとほしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへの類ひなきを頼みにて、まじらひたまふ。	唐土もこのようなことのせいで、天下を混乱させてしまった、と。更衣もだんだん気まづくなってきて、自分が天下の人々を心配させる話柄となってしまい、訳のわからない悩みは本当に多いものです。ご寵愛の厚さで仕方がなく、なんとか対応しなければなりません。
4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活「父の大納言〜」（0103 / 五⑩ / 一八）	父の大納言は亡くなりて、母北の方なん、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ華やかなる御方々にもいたう劣らず、何事の気色をももてなしたまひけれど、とりたててはかばかしき後見しなければ、ことある時は、なほよりどころなく心細げなり。	お父さんの大納言はすでに亡くなり、お母さんはもともと由緒のある旧家の出であり、礼儀作法などのご用意は両親ともに具し、当世の栄華を極めている家と比べても劣ることはありません。しかしながら、表だって対応するような有力の主を持ちませんので、万が一何かがありましたら、無勢で頼れるところがないと思っています。
5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する「前の世にも〜」（0136 / 六① / 一八）	前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなるちごの御容貌なり。一の御子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君、と世にもてかしづききこゆれど、この御匂ひには並びたまふべくもあらざりければ、大方のやむごとなき御思ひにて、この君をば、私ものに思ほしかしづきたまふこと限りなし。	前世の恩情も浅くないか、更衣は早くも一人の世にも稀な清らかな皇子を生みました。天皇は日数を計りつつ待ち望んでいましたので、急いで宮中に抱いてきてその顔を見ると、本当に清らかなご容貌だった、と。一の皇子は右大臣家の女御が生まれましたので、国中人望が高く、疑いもない儲けの君ですが、容貌という点、こちらとは比べられません。天皇も普通に彼のことを可愛がっていますが、こちらの皇子を自分の秘蔵の宝物として、限りなく大事にしています。
6 帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立場に疑いを抱く「はじめより〜」（0184 / 六⑦ / 一九）	はじめより、おしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑあることの節々には、まづ参上らせたまふ、ある時には大殿籠り過くして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽きかたにも見えしを、この御子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせすは、この御子のみたまふべきなめり、と一の御子の女御はおぼし疑へり。	限りなく大事にしています。生まれの母はもともと普通の伺候している人ではありません。位も人望も高く、もともと身を慎んでいたほうですが、仕方のないことに、天皇はあまりにも寵愛しているため、遊宴のときなり何なりと、必ず彼女を一番先に召すのです。朝の寝殿に起きるのが遅ければ、そのまま傍に居てもらい、御前から離させないのも、自然な成り行きです。皇子が誕生してから、天皇はますます彼女を大事にしています。そのため、一の皇子の女御は疑心を生じ、もしかしたら東宮も、万が一、この皇子のものになるのではないかと、と思っています。
7 帝は弘徽殿女御を気遣うも桐壺更衣を寵愛し、更衣の気苦労は増す「人より先に〜」（0248 / 六⑬ / 一九）	人より先に参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御諫めのみぞ、なほ煩はしう、心苦しう思ひきこえさせたまひける。かしこき御陰を頼みきこえながら、おとしめ、疵を求めたまふ人は多く、我が身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。	実は女御は誰よりも早く入内し、寵愛のほども普通ではないうえ、子供がすでにいますので、この方の話は、天皇も聞かないわけにはいきません。こちらの更衣は天皇の庇護を受けていますが、けちをつける人も少なくありません。自分の体も弱くて、心細くて悩ましく、自らと憂いが多いです。
8 更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける「御局は桐壺〜」（0288 / 七③ / 二〇）	御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふも、げにことわりと見えたり。参上りたまふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿のここかしこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾堪へがたく、まさなきこともあり。また、ある時には、えさらぬ馬道の戸をさして、こなたかなた心を合はせて、はしたなめわつらはせたまふ時多かり。	宮院は桐壺です。いつも御前に上ったり下ったりしていますので、何人かの門前を通らなければなりません、人が迷惑だと思ふのも、当然なことです。あまりにも頻りに御前に出入りするときもあれば、板橋や、過廊や、あちらこちらの道には、変なことが起こり、送迎する女房たちの衣の裾を耐えられないほどひどく汚れています。また、時には、穿堂に閉じ込められ、両端ともに鎖を掛けられてしまうような、大変なことは本当に少なくありません。このようなことに遭うと、本当に困り果て、とても苦しいです。
9 帝は桐壺更衣への虐待を不憚に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す「ことにふれ〜」（0344 / 七⑨ / 二〇）	ことにふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれと御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を、ほかに移させたまひて、上局にたまはず。その恨みましてやらむ方なし。	天皇も可愛そうにと思い、後涼殿に住んでいた更衣たちを他所に移してもらい、彼女の伺候するときの休憩所とします。これによる恨みは、さらにいいようがないほどです。
10 若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる「この御子三つ〜」（0378 / 七⑩ / 二一）	この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮のたてまつりしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじうせさせたまふ。それにつけても、世の譏りのみ多かれど、この御子のおよすけもておはする御容貌、心ばへ、ありがたくめづらしきまで見えたまふを、えそねみあへたまはず。もの心知りたまふ人は、かかる人も世に出でおはするものなりけり、とあさましきまで目を驚かしたまふ。	皇子が三歳になった年に、一の皇子にも劣らないほど着袴の儀式を挙げ、内蔵寮、納殿にある貢上の品を使いきり、非常に盛大な儀式です。このことを誇る人もいますが、この皇子がこれほどの容貌と性格に成長しているのを見てからは、もう言うところはあります。少し物事の分別できる人は、目を大きくして、人の世にこれほどの人物がいるのだ、と感嘆しています。

<p>11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出「その年の夏〜」(0439 / 八㉔ / 二一)</p>	<p>その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず。年ごろ、常のあつしさになりたまへれば、御目馴れて、「なほ、しばし試みよ」 とのみのたまはするに、日々に重りたまひて、ただ五六日のほどに、いと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたまつりたまふ。かかるをりにも、あるまじき恥もこそ、と心づかひして、御子をば留めたまつりて、忍びてぞ出でたまふ。</p>	<p>その年の夏に、貴人は病状が重たくなっていると感じ、暇を乞いたいが、天皇からの許しを得られません。年頃、いつも重たい病状でいるのに慣れていて、天皇はまたその具合を見てみたいと言っていますが、まさか一日に重たくなり、五六日の間に、大変なことになっています。お母さんは泣きながら奏上してから、ようやく許しを得たのです。更衣はこの時になっても、見苦しいと思い、皇子を残して一人だけ退出しました。</p>
<p>12 帝は絶え入らばかりの桐壺更衣をご覧になるにつけ途方に暮れる「限りあれば〜」(0488 / 八㉔ / 二二)</p>	<p>限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなさ、言ふ方なく思ほさる。いと匂ひやかにうつくしげなる人の、いたう面憂せて、いとあはれものを思ひしみながら、言に出でも聞こえやらす、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを、御覧ずるに、来し方行く末おぼしめされず、よろづのことを、泣く泣く契りのたまはずれど、御答へもえ聞こえたまはず、まみなどもいとたげにて、いとどなよなよと、我かの気色にて臥したれば、いかさまにとおぼしめし感はる。</p>	<p>こうなりますと、天皇も強いて留めることができませんが、ただ見送るだけでもできないのは、いいようのないほど悲しいです。あれほど風情あり、美しい人が、このように痩せてしまい、息も絶え絶えで、言いたいことがあるのに、一言もいえないのを見て、天皇はいらいらして、場も構わず、涙を流しながら何度慰めても、一言すら返事はありません。更衣が表情を緩め、夢を見ているように柔らかい体で横になっているのを見ても、どうすればいいかわかりません。</p>
<p>13 輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する「輦車の宣旨〜」(0537 / 八㉔ / 二二)</p>	<p>輦車（てぐるま）の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえゆるさせたまはず。 「限りあらむ道にも、後れ先だたじ、と契らせたまひけるを、さりともうち捨てては、え行きやらじ」 とのたまはするを、女もいとみじと見たてまつりて、 限りとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり いとかく思ひたまへましかば」 と息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたげねれば、かくながらともかくもならむを御覧じはてむとおぼしめすに、 「今日始むべき祈りども、さるべき人々承れる、今宵より」 と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながら、まかでさせたまふ。</p>	<p>宣旨がわざわざ輦車を用意しますが、それが来ると、天皇は却って出発させません。「誓いの言葉は、限りのときには前後することのないようにと願っていますが、あなたはそれを破棄して去っていくようなことはしないでしょ」と言っていますが、更衣は大変驚き、息が絶え絶えで奏上します。 「別れ道になると悲しくて限りないです。 薄命に堪えられず残りの人生を惜しんでいます。 こうなると……知っておけば……」 まだ話の途中で、すでに疲れ果ててしまいます。天皇は、一層のことでこのまま彼女の具合を最後まで見届けると思うようになりますが、外から、「今日は仏壇で祈禱することとなり、執事をする方等は全員揃い、今夜に開くこととなっていますが……」と奏上するのを聞き、仕方がなく、彼女を帰らせました。</p>
<p>14 心塞がる帝は眼れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる「御胸つと〜」(0608 / 九㉔ / 二三)</p>	<p>御胸つと塞がりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行き交ふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、 「夜中うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」 とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。聞こしめす御心惑ひ、何事もおぼしめしわかれず、籠りおはします</p>	<p>その後、天皇は胸が一杯で、一眠りもせず、夜が明けるのを待たずに使いを遣り、心配して仕方がありません。使者はそちらに着くと泣き声を聞き、夜半過ぎにすでに無くなったので、がっかりして帰って奏上しました。天皇は悲しくも何事もせず、ただ殿内にいるばかりです。</p>
<p>15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する「御子は〜」(0644 / 九㉔ / 二四)</p>	<p>御子は、かくてもいと御覧せまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ、例なきことなれば、まかでたまひなんとす。何事があらむともおぼしたらす、さぶらふ人々の泣き惑ひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを、よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれに言ふかひなし。</p>	<p>皇子はどうしても離せない存在ですが、この時に宮中に住む例はありませんので、退出しなければなりません。皇子はまだ何があるのか理解できなく、侍女たちが皆泣いており、天皇も涙を流しているのを怪しく思っているだけです。普通の別れですら悲しいのに、この時の悲しさは言うまでもないです。</p>
<p>16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒に泣き焦がれる「限りあれば〜」(0684 / 一〇㉔ / 二四)</p>	<p>限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、同じ煙にのぼりなん、と泣きこがれたまひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて、愛宕といふところに、いといかめしうその作法したるに、おはし着きたる心地、いかばかりかはありけん。</p>	<p>すべてのことには決まりがありますので、儀礼によって葬送します。その時、老夫人はこの煙と一緒に西天に往きたいと悲しく泣いていますが。葬送する宮女たちの車に乗りかけ、愛宕まで来て、荘厳な儀式を行うのは、どれほど傷心なことです！</p>
<p>17 気が動転している母は、火葬の現実も受け入れられず諦めきれない「むなしき〜」(0712 / 一〇㉔ / 二四)</p>	<p>「むなしき御骸（から）を見る、なほおはするものと思ふが、いとかわなければ、灰になりたまはん見たてまつりて、今は亡き人、とひたぶるに思ひなりなん」 と、さかしょうのたまひつれど車よりも落ちぬべうまるびたまへば、さは思ひつかし、と人々もてわづらひきこゆ。</p>	<p>言うことはまた道理に適っています。「遺体だけ見ては、まるで生きているようですので、この目で灰になるのを見て、やっともうこの世にいないのだと断念できるのです」、と。しかし、車から転ぶほど泣き崩れましたので、皆は驚いて、「こうなるだろうと心配していたのだ！」と騒いでおり、急いで彼女を助けようとしています。</p>
<p>18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す「内裏より御使〜」(0741 / 一〇㉔ / 二五)</p>	<p>内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだにいはずなりぬるが、あかず口惜しうおぼさるれば、いま一階（ひときざみ）の位をだに、と贈らせたまふなりけり。これにつけても、憎みたまふ人々多かり。</p>	<p>宮中から勅使がきました。勅使を読み上げ、三位の位を追贈するとのこと。これで皆はまた大変悲しく思っています。なるほど、天皇が生前女御にもなってもらえなかったことを深く後悔し、今となって少しでも一品上げて追贈したいと思っているからです。これでも異議を持つ人がいますが、</p>
<p>19 聡明な女房たちは桐壺更衣の美質を追想し、慕慕の情をもって偲ぶ「もの思ひ知〜」(0775 / 一〇㉔ / 二五)</p>	<p>もの思ひ知りたまふは、さま容貌などのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりしことなど、今ぞおぼし出づる。さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねみたまひしか、人柄のあはれに情ありし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とは、かかるをりにやと見えたり。</p>	<p>道理を弁える人たちは、誰もが彼女のことを思い出し、その姿の美しさと性格の優しさは何一つ不足がないほどです。ただ天皇の寵愛のせいで、無駄に嫉妬させられましたが、今となると、御前に伺候している宮女ですら彼女の感服に値する人格と心の優しさを感嘆しています。「亡くなった後の思い」というのは、このような人の情けを言うのでしょうか。</p>

<p>20 秋となり帝はただ涙の日々の中、弘徽殿女御は桐壺更衣を許さない「はかなく〜」(0809 / 一一① / 二六)</p>	<p>はかなく日ごろ過ぎて、後のわざなどにも、細かにとぶらはせたまふ。ほど経るままに、せむ方なう悲しうおぼさるるに、御方々の御宿直なども絶えてしたまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほゆるしなうのたまひける。</p>	<p>暫くの忙しさの後、追悼の事などについても、天皇は一々と詳しく訊ねています。悲しい気持ちは遣り切れなく、日に増すばかりです。誰かを寝殿に召す気持ちはまったくなく、朝夕ただ涙ばかり流しています。その御顔を拝見する人々は、誰もが露に染められた秋の悲しみを感じています。弘徽殿だけはまた、「死んだのに、人をいい気にさせないのは、これほどの偏愛からか!」と恨み言を言っています。</p>
<p>21 帝は若宮を恋しがり、野分だつ夕暮に鞍負命婦を更衣の里に遣はず「一の宮を〜」(0850 / 一一⑤ / 二六)</p>	<p>一の宮を見たてまつらせたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほしいでつつ、親しき女房、御乳母などをつかはしつつ、ありさまを聞こしめす。野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりもおぼし出づること多くて、鞍負(ゆげい)の命婦といふを遣はす。</p>	<p>天皇は一の皇子を見るたびに、小さい皇子のほうを思い出し、時折に近侍している宮女や女房などを遣わして、その近状を聞きます。秋の風が起り、寒さが肌に刺すように感じる黄昏に、心配のことは屋より多いので、負朝命婦という者を使わしました。</p>
<p>22 帝は夕月夜の美しい折に催した管弦を思い出し、更衣の面影に浸る「夕月夜の〜」(0877 / 一一⑨ / 二六)</p>	<p>夕月夜のをかききほどに、出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなるもの音を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりし気配容貌の、面影につと添ひておぼさるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。</p>	<p>月の清らかなるうちに遣わして、自分は月に向かって待っています。往時このような月夜には、管絃を以て興を遣り、爪音の清らかさと時折の吟唱は、人が及ばないほどの風情があるのを思い出して、その顔はまるで目の前にあるようでありながら、すでに幻影となって現実の比べ物にはなれません。</p>
<p>23 命婦は亡き更衣の邸に入り、八重葎で荒れた庭には月影が差し込む「命婦かこ〜」(0907 / 一一⑫ / 二七)</p>	<p>命婦(みょうぶ)かこにまうで着きて、門引き入るより、気配あはれなり。やもめ住みなれど、一人の御かしづきに、とかくつろくひたてて、めやすきほどにて過ぐしたまへる、闇にくれて臥しつみたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎(やへむぐら)にもさはらずさし入りたる。</p>	<p>命婦はそちらに着くと、車が門から入ったところから、物悲しい風景を目にします。寡暮らしをしているとはいえ、そのようなお方を育てるために、優美に取り繕っていましたが、このたび先立たれた心の闇で、落ち込んでしまったのでしょう。草が高く生えてしまい、秋風の中で一層物悲しく感じます。月の光だけは逢などを構わず、簾の中まで照らしています。</p>
<p>24 更衣の母は命婦と対面し感極まり涙し、命婦は帝の仰せ言を伝える「南面に〜」(0937 / 一二② / 二七)</p>	<p>南面(みなみおもて)に下ろして、母君もとみにえものものたまはず。「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の、蓬生の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなむ」とて、げにえ堪ふまじく泣いたまふ。「『参りてはいとど心苦しう、心肝もつくるやうになん』と、典侍の奏したまひしを、もの思うたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたうはべりけれ」とて、ややためらひて、仰せ言伝へきこゆ。</p>	<p>南の屋根の下で車から降りました。老夫人は対面して何も話さず、しばらくしてから、「この苦しい命だけはまだこの世に生き残っていますが、勅使が露を取り払い、逢の中までわざわざお越しになったのを蒙り、本当に恥ずかしい極まりないです。」と言っているうちに、涙を抑えられずに泣き出しました。命婦は、「前回典侍が帰って、「御宅に伺うたびに、悲しくて堪えられません」と奏上したのを聞き、物事分らない自分の心も、実に悲しく思います。」と言っています。やや躊躇っていましたが、勅旨を伝えました。</p>
<p>25 命婦は帝の心意を更衣の母に伝え、涙にむせぶ帝からの手紙を渡す「『しばしは〜』」(0987 / 一二⑦ / 二八)</p>	<p>「『しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひあはすべき人だになきを、忍びては参りたまひなんや。若宮のいとおぼつかなく、露けき中に過ぐしたまふも、心苦しうおぼさるるを、とく参りたまへ』など、はかばかしうも、のたまはせやらす、むせかへらせたまひつつ、かつは人も心弱く見たてまつるらむと、おぼしつたまぬにしもあらぬ御気色の心苦しさに、承りてはぬやうにてなむ、まかではべりぬる」とて御文たてまつる。</p>	<p>「天皇は、「その時はただ夢をみているとのみ思っていました、漸く落ち着いてきたのですが、どうも夢は醒める日がないようです。どうすればいいのかわかりませんが、誰も相談できる人はいませんから、密かにこちらに来てはどうですか。皇子のこともそうですね。寂しくて喪中を過ごすのも、痛ましいことですが、早く宮中に送ったほうがいいかな。」と言っています。嗚咽して話も途切れてしまったが、自分の弱さが人に見られるのを配慮しているようで、その顔色は大変惨めです。最後まで聞くのを我慢できなく、そのまま急いで退出してこちらにきました」と、言いながら宸翰を渡して、中にはこのように書いています。</p>
<p>26 帝からの文は、若宮と共に参内するようにと懇ろに促すものだった「『目も見え〜』」(1043 / 一二② / 二八)</p>	<p>「目も見えはべらぬに、かかかしこき仰せ言を光にてなん」とて見たまふ。「ほど経ば少しうち紛ることもや、と待ち過ぐす月日にそへて、いと忍びがたきはわりなきわざになむ。いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、もろともにはぐくまぬおぼつかなさ、今はなほ昔の形見にならずへてものしたまへ」など、細やかに書かせたまへり。宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれとあれど、え見たまひはてず。</p>	<p>「最初は日が遠くなるにつれ少し気分も紛れるだろうと思ったが、数ヶ月経っても日に増すほど堪えられなくて、どうしようもありません。小さい者はどうなっているのかも私の関心を持っているところですが、一緒に育てることができないのを申し訳なく思い、ただご遺愛だと思い、善く育てあげてください!」下に和歌を付けています。「宮城原の風の音の中に、凝る露は先に小さい萩に染めるのです。」老夫人はまだ読み終わっていませんが、命婦に言いました。</p>
<p>27 母君は桐壺更衣の入内のいきさつを語り、横死のようなさまを嘆く「命長さの〜」(1094 / 一三⑥ / 二九)</p>	<p>「命長さの、いとつらう思ひたまへ知るるに、松の思はんことだに、恥づかしう思うたまへばれば、ももしぎに行きかひはべらんことは、ましていと憚り多くなん。かこしき仰せ言をたびたび承りながら、自らはえなん思ひたまへたつまじき。若宮は、いかに思ほし知るにか、参りたまはんことをのみなむおぼし急ぐれば、ことわりに悲しう見たてまつりはべる、など内々に思ひたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも、いまいましう、かたじけなくなむ」とのたまふ。</p>	<p>「延年の辛さを悟ったところですが、松に嘲られるのも恐れています。況や宮中を出入りするの、一層忝いことです。そのため、御言葉を頂戴しても、自分は承ることはできません。しかし、皇子は、何故か大変賢くて、宮中に入りたいたとずっと催促していますので、その気持ちを察するとき、悲しくてたまりません。私のこの願いを、代わりに奏上してください。皇子が長くこの不吉の地に住むのは、もともと道理に合わないことです。」命婦は別れを告げるつもりで言いました。</p>
<p>28 若宮が就寝した後、勅使役の命婦は役目を終えたために帰参を急ぐ「宮は大殿籠〜」(1149 / 一三⑩ / 三〇)</p>	<p>宮は大殿籠(おほのごも)りにけり。「見たてまつりて、くはしう御ありさまも奏しはべらまほしきを、待ちおはしますらんに、夜ふけはべりぬべし」とて急ぐ。</p>	<p>「皇子はすでにお休みのようですが、ももとはお会いして、その様子を詳しく奏上すべきですが、しかし、夜はすでに深くなりました。」</p>

<p>29 亡き更衣の母君は、横死した我が子への尽きせぬ思いを命婦に語る「くれ惑ふ〜」（1163／一三④／三〇）</p>	<p>「くれ惑ふ心の闇も堪へがたき片端をだに、はるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも、心のどかにまかてたまへ。年ごろ、嬉しく面だたしきついでにて、立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、返す返すつれなき命にもはべるかな。生まれし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、『ただ、この人の宮仕への本意、かならず遂げさせたまつれ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』 と、返す返す諫めおかれはべりしかば、はかばかしく後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに、出だしたてはべりしを、身にあまるまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつ、まじらひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなりそひはべりつるに、横さまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなん、かしこぎ御心ざしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になん」 と、言ひもやらず、むせかへりたまふほどに、夜もふけぬ。</p>	<p>老夫人は、「親の闇というものを、少しお話しして、気分を紛れたいと思っているところです。いつか勅命でなくても、いらっしやってください。年頃は慶事場でしかお会いできないので、このたびはこのような勅命でわざわざお越しになったのは、思うと返す返す恥ずかしく思います！彼女が生まれてから、大きな期待を抱いていますが、亡き大納言が臨終の時でも、繰り返して「この入内の願いは、必ず叶えてください。死んだ後だと言って、意志を弛めてはいけません！」と言いつけました。有力な後ろ盾がないと大変なことだとは知りながら、遺言を背くのを恐れ、強いて彼女を入内したのです。まさか度過ぎたご寵愛を蒙り、彼女も辛い目に遭い、我慢しなければなりません、何とかやり過ごしてきました。まさか人から深く嫉妬され、処理しがたいことがますます多くなって、結局このようなことになってしまったのとは思ってもいません。寵愛を蒙るのは却って辛いことになってしまいました。これも親の闇ゆえの妄言です！」と言いながら、嗚咽しています。夜はすでに更けました。</p>
<p>30 命婦は帝が悲涙の内に更衣との因縁を偲ぶさまを語って帰参を急ぐ「上もしか〜」（1256／一四⑩／三一）</p>	<p>「上もしかなん。 『我が御心ながら、あながちに人目驚くばかりおぼされしも、長かるまじきなりけり、と今はつらかりける人の契りになむ。世に、いささかも人の心をまけたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはては、かううち捨てられて、心をさめむかたなきに、いとど人わろうかたくなになりはべるも、前の世ゆかしうなん』 と、うちかへしつつ、御しほたれがちにのみおはします」 と語りて尽きせず。泣く泣く、 「夜いたうふけぬれば、今宵過ぐさず、御返り奏せん」 と急ぎ参る。</p>	<p>命婦は、「天皇もよくそのように言っていますね。 「わが心によるものなどとはいいい、どうしてそこまで人の注意を引くほどのことをしたのでしょうか。これも長くないことの兆しです。今思えば、本当に辛い因縁ですね！一向にして人に辛い思いをさせることがなかったのに、彼女のために、恨みを買う必要のない人たちの恨みまで買い、結局このように見捨てられてしまい、帰る術もなく、つまらなくて辛い目に遭うのは、前世のどのような因縁によるのでしょうか」、と。いつも涙を流しています。」と言っています。このように、話は尽きません。お互い暫く感嘆してから、命婦は立ち上がりました。「夜は本当に更けました。明けるまでに帰らないといけませんね。」と、急いで退出しました。</p>
<p>31 月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える「月は入り方〜」（1315／一五④／三二）</p>	<p>月は入り方の、空清う澄み渡れるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いとたち離れにき草のもとなり。 鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かな えも乗りやらず。 「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人かことも聞こえつべくなん」と、言はせたまふ。</p>	<p>月は西に傾け、寒い光は水に浸るようです。軽い風が涼みをもたらし、草叢に虫の音が聞こえ、お互い催促しているようで、却って人を恋しくさせ、去りがたいです。車に上がる前に、一句を吟じました。 「鈴虫の声は尽きて、悲しみは限りがありません。 夜をなきつくしてもなお涙は零れる。」 老夫人は侍女によって返事を伝えました。 「蓬の中の鈴虫が鳴くのは頻繁なことですが、涙が零れるのは雲の上からの人によるものです。少し恨み言もいわないといけませんね」</p>
<p>32 鞍負命婦の帰参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る「をかしき御贈〜」（1358／一五⑩／三二）</p>	<p>をかしき御贈り物などあるべきをりにもあらねば、ただかの御形見にとて、かかる用もやと残したまへりける御装束一領、御髪上げの調度めく物添へたまふ。</p>	<p>贈り物とまで言えませんが、記念の品として、そのために用意している衣装一式に化粧の道具を添えました。</p>
<p>33 亡き更衣の女房たちは若君の参内を促すも祖母君は手放し難く思う「若き人々〜」（1378／一五⑩／三二）</p>	<p>若き人々悲しきことはさらにもいはず、内裏わたりを朝夕にならひて、いとさうざうしく、上の御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とく参りたまはむことを唆しきこゆれど、かくいまいましき身の添ひたてまつらんも、いと人聞き憂かるべし、また見たてまつらでしばしもあらんは、いと後ろめたう思ひきこえたまひて、すがすがともえ参らせたまつりたまはぬなりけり。</p>	<p>若い人たちの悲しみはさらに言うまでもないです。住み慣れている内裏の賑やかな朝夕とそちらで暮らしているのを思い出し、一層早く宮中に入りたく急かしていますが、しかし、老夫人は不吉の身で連れ添って人前ではあまり相応しくなく、しばらく会わないのも大変心配しますので、躊躇って皇子を宮中に入らせません。</p>
<p>34 桐壺帝は女房と語り明かし長恨歌の絵を見ながら命婦の帰参を待つ「命婦は〜」（1420／一六③／三三）</p>	<p>命婦は、まだ大殿籠らせたまはざりける、とあはれに見たてまつる。御前の壺前裁の、いとおもしろき盛りなるを御覧するやうにて、忍びやかに、心憎き限りの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり。このごろ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ。</p>	<p>命婦は天皇に謁見します。可愛そうなことに、天皇はまだ寝殿に行かずに、御前に満開している花に向かって、四五人の宮女と一緒に、ひそやかに物語をしています。この頃朝夕見ているのは、亭子院のご宸筆、伊勢御と貫之が題詠している長恨歌の絵です。和歌と漢詩、口にするのは、この種類のものだけです。</p>
<p>35 帝は里邸の様を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返書に心を遣う「いと細やか〜」（1469／一六⑧／三三）</p>	<p>いと細やかにありさま問はせたまふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御返り御覧ずれば、 「いともかしこきは、置き所もはべらず。かかる仰せ言につけても、かきくらす乱り心地になん。 あらし風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞ静心なき」 などやうに乱りがはしきを、心をさめざりけるほど、と御覧じゆるすべし。</p>	<p>天皇は細やかにそちらの状況を聞きだします。命婦はそちらの惨めな情景を奏上しました。天皇は返しの手紙を読みます。「ご恩を蒙り、忝いです。温かい御言葉を拝読するたびに、心の闇に迷います。 風に当たり、樹から葉が落ちてから、心は萩のあたりから去る暇はありません。」 書きぶりは乱れていますが、天皇は彼女の傷心を察して、許しています。</p>

<p>36 悲嘆を隠せない帝は更衣入内の頃を思い出し祖母君をも不憚に思う「いとかうしも〜」(1504 / 一六② / 三四)</p>	<p>いとかうしも見えじ、とおぼししづむれど、さらにえ忍びあへさせたまはず。御覧じはじめし年月のことさへ、かき集めよづにおぼし続けられて、時の間もおぼつかかりしを、かくても月日は経にけり。あさましうおぼしめさる。「故大納言の遺言あやまず、宮仕への本意深くものしたりし喜びは、かひあるさまにこそそ思ひわたりつれ、言ふかひなしや」とうちのたまはせて、いとあはれにおぼしやる。</p>	<p>人に見られるのを恐れ、努めて悲しさを抑えています、抑えきれなく、誓いを交わしてからさまざまの悲しみと喜びを思い出し、時が逝くのを深く嘆いています。「彼女は大納言の遺言を背かず、入内させる功を達成したので、いつも彼女を喜ばせたいと思っているのに。今となって何を言っても無駄です！」天皇は彼女のことを大変憐れみ、また言いました。</p>
<p>37 帝は若宮の将来を約束し、贈物から長恨歌の叙に思いを重ねて歌う「かくても〜」(1543 / 一七③ / 三四)</p>	<p>「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなん。命長くとこそ思ひ念ぜめ」などのたまはず。かの贈り物御覧ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりけむしるしの叙ならましかばと思はずも、いとかがひなし。尋ねゆく幻もなつてにても魂のありかをそこと知るべく</p>	<p>「そうですね。皇子が大人になりましたら、自然にそのような機会もあるでしょう。彼女が長生きでありますように」と。贈った古い品々を見て、天皇は、もし魂魄の存在の証としての鍬合金釵を探し出せたらと思っています。まあ、言っても無駄な話ですが。「どこから鴻都が出て碧落を探しつくし、魂魄の在り処を私に伝えるでしょう。」</p>
<p>38 帝は玄宗と楊貴妃の物語から、更衣との尽きぬ愛情を恨めしく思う「絵に描ける〜」(1572 / 一七⑦ / 三五)</p>	<p>絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いと匂ひ少なし。太液の芙蓉、未央の柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひは麗しうこそありけめ、懐かしうらうたげなりしをおぼし出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかさはむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほど、尽きせず恨めしき。</p>	<p>絵の中の楊貴妃の容貌は、名筆だと言いながら、筆触には限りがあり、情趣に欠けています。「太液の芙蓉、未央の柳」と譬えられている眉目と唐の様式のお化粧は、実に大変端麗ですが、彼女の可愛らしさは、花の色、鳥の声ですら譬えられないものです。朝夕、比翼連枝の誓いはお互い堅くしたのに、美人薄命の結末になってしまい、この恨みは如何にして尽きることができるでしょう。</p>
<p>39 帝の心を踏みにじるように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る「風の音〜」(1615 / 一七⑩ / 三五)</p>	<p>風の音、虫の音につけて、もののみ悲しうおぼさるるに、弘徽殿には久しく上の御局にも参上りたまはず、月のおもしろきに、夜ふくるまで遊びをぞしたまふなる、いとすさまじう、ものしと聞こしめす。このごろの御気色を見たてまつる上人、女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおしたち、かどかどしき所ものしたまふ御方にて、ことにもあらずおぼし消ちて、もてなしたまふなるべし。</p>	<p>少しでも風の音、鳥の鳴き声を聞くだけでも、愁傷の心が動くのです。しかし、久しく殿上房に上がっていない弘徽殿は、清らかな月の光の下に、管絃を弄び、夜更けまで賑やかでした。殿上で伺候している侍従と宮女は、近頃天皇の顔を拝見し、感慨深く思っています。シビアさのある性格の持ち主であるあの方は、あまりこれを配慮していないようです。</p>
<p>40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しみ歌う帝は、眠ることすらできない「月も入りぬ〜」(1660 / 一八③ / 三六)</p>	<p>月も入りぬ。 雲のうへも涙にくる秋の月いかですむらん浅茅生の宿 おぼしめしやりつつ、燈火（ともしび）をかかげ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目をおぼして、夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。</p>	<p>月は傾けました。「月は雲に隠れて暗くなり、秋の夜の露は、如何にして茅の軒下に留めることができるでしょう。」孤独の灯火が燃えつくしてもなお眠りにつけない天皇は、老夫人のほうに思いを寄せます。右近の官が宿直を奏上する声が聞こえますので、丑の刻であるはずで。人の注意を引くのを恐れ、夕殿に入っても眠れませぬ。</p>
<p>41 帝は政治まで疎かにしかねない悲しみの中で食事もし上らない「朝に起き〜」(1693 / 一八⑦ / 三六)</p>	<p>朝に起きさせたまふとでも、「明るくも知らで」とおぼし出づるにも、なほ朝政はおこたらせたまひぬべかめり。ものなどもきこしめさず。朝餉の気色ばかりふれさせたまひて、大床子の御膳などは、いと遙かにおぼしめしたれば、陪膳にさぶらふ限りは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。すべて、近うさぶらふ限りは、男女、いとわりなきわざかな、と言ひ合はせつつ嘆く。</p>	<p>朝に起きると、「眠りに付いて暁を覚えぬい」恨みを思い出し、朝の政に行く気もありません。食事を取る気もありません。簡単なほうは取っているような格好をしていますが、正式の御膳はまったく取る気はないです。そのため、御膳に伺候している人たちは天皇の愛いの顔を拝見して、誰もが心配しています。男女の侍従たちは、お互いの顔を見合わせながら、道理に合わないだけ嘆いています。</p>
<p>42 帝に奉仕する者たちも政道放棄を嘆き楊貴妃の例まで引合いに出る「さるべき契〜」(1731 / 一八⑩ / 三七)</p>	<p>「さるべき契りこそおはしましけめ、そこの人の譏り、恨みをも憚らせたまはず、この御ことにふれたることをば、道理をも失はせたまひ、今はたかく世の中のことをも、思ほし捨てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなり」と、人の朝廷の例までひき出で、ささめき嘆きけり。</p>	<p>「本当に前世からの因縁ですね！所々人に恨まれても、このことに関しては、何も世間の規則を無視していました。今このように厭世的になってしまったのは、このままだと大変なことですね！」と。他所の朝廷の故事まで引き出し、密かに話をしています。</p>
<p>43 若宮参内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵「月日経て〜」(1762 / 一九② / 三七)</p>	<p>月日経て、若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならず、清らにおよすけたまへれば、いとゆゆうおぼしたり。明るく年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしうおぼせど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふくおぼし憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、「さばかりおぼしたれど、限りこそありけれ」と、世人も聞こえ、女御も御心おちみたまひぬ。</p>	<p>大分経ってから、小皇子は宮廷に入りました。まるでこの世の人でないほど美しく成長したので、天皇は彼に会っても、これから器用な人になると真剣に思っています。その次の年の春に、立坊しました。天皇は変える思いはないわけではなく、頼れる後ろ盾がないので、人々が納得できなく、却って地位が危くなるのを配慮して、何も顔色に出さずに済ませました。世間の人々は、これほど偏愛しているにもなお賢く分別しているのだと感嘆しています。弘徽殿の女御もこれで安心しました。</p>
<p>44 祖母君は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去「かの御祖母〜」(1805 / 一九⑥ / 三七)</p>	<p>かの御祖母北の方、慰む方なくおぼししづみて、おはすらん所にだに尋ね行かんと願ひたまひしるしにや、つひに亡せたまひぬれば、またこれを悲しびおぼすこと限りなし。御子六つになりたまふ年なれば、このたびはおぼし知りて恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れ睦びきこえたまへるを、見たてまつりおく悲しびをなむ、返す返すのたまひける。</p>	<p>外祖母の老夫人は、寂しくていつも思いに耽って祈りをして、娘の後につきたいと願っていました。天道もそれを感じ取っただろうか、つい亡くなりました。これも本当に限りない悲しいことです。皇子はその時六歳になりましたので、物心がつき、老夫人のことを慕って泣いていました。その時老夫人は繰り返して言っていました。「年頃の親しい間柄が、急に引き裂かれたのも苦しいことです。これからは内裏にずっと居てください」と。</p>

45 若宮七歳の読書始めの後は、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服「今は内裏に〜」（1844 / 一九⑩ / 三八）	今は内裏のみさぶらひたまふ。七つになりたまへば、読書始めなどせさせたまひて、世に知らず聡うかしこくおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧す。「今は誰も誰もえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、仇、敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。	皇子は七歳から読書を始めました。世間に例のないほど聡明です。天皇は皇子を見ると大変感服して、「誰も彼を疎遠しないでください。母親に亡くなられたことを思いやり、可愛がってください!」と言いつけています。ある時は弘徽殿まで連れて行き、御簾の中まで入らせました。容貌の美しさは、武士であっても、敵であっても、会うと自然にやさしくなるほどです。女御もつい彼を疎くすることができません。
46 若宮は二人の皇女より優雅で学問や音曲にも秀でる超人さを発揮「女御たち〜」（1904 / 二〇② / 三九）	女御子たち二所、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしく恥づかしげにおはすれば、いとをかしううちとけぬ遊びぐさに、誰も誰も思ひきこえたまへり。わざとの御学問はさるものにて、琴、笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続けば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。	女御が産んだ二人の皇女は、彼ほど美しくないです。各殿舎は回避する必要がないので、愛しさと恥づかしさをも感じて、皆彼と親しく遊びなどを楽んでいます。皇子は、正式な学問はもちろん、琴を弾き、笛を吹くのは、その音は雲まで響き渡ります。一々説明すると、本当に信じられないほどの天才です。
47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を覩て不思議がる「そのころ〜」（1955 / 二〇⑥ / 三九）	そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こしめして、宮の内に召さんことは、宇多の帝の御誠あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館につかはしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人驚きて、あまたたび傾きあやしふ。「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷の固めとなりて、天下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。	その時、天皇は来朝している高麗人の中に、素晴らしい相人がいると聞いています。宇多天皇のご遺誠で、宮中まで召すことはできませんが、密かに皇子を鴻臚館まで連れしました。お供にするのは右大弁であり、皇子を彼の息子だと装っています。相人は驚いて何度も頭を傾けて、納得できない表情をしています。「この相は一国の主のなり、帝王の位に登るべきですが、そのままだと、反乱が起こる心配があります。朝廷の柱石となり、天下を補佐するのは、その相からいうと間違っています。」と言っています。
48 博識の右大弁と高麗人が漢詩を作り交わし若宮も興深い詩句を作る「弁も、いと〜」（2019 / 二〇⑬ / 四〇）	弁も、いと才かしく博士にて、言ひ交したることもなん、いと興ありける。文など作りかはして、今日明日帰り去りなんとするに、かくありがたき人に対面したる喜び、かへりては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、皇子もいとあはれなる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたてまつる。朝廷よりも多くの物たまはず。おのづからことひろごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかとおぼし疑ひてなむありける。	右大弁は賢人であり、博士であるので、楽しく話しをしていました。文章と漢詩で応酬をして、彼は、今日明日帰る予定ですが、稀世の人に会うことができたのを幸いとして、別れの後を苦しく思うなど、絶妙な文辞を書いたので、皇子は漢詩で返事しました。とても真摯でしたので、相人は大変喜び、貴重な贈り物を上げました。朝廷も貴重な贈り物を賜りました。もともと世間に隠し通すことができないことですので、早くも噂として広まりました。東宮の外祖父である大臣は、どういふことか判別できません。
49 帝は若宮を臣籍降下させ朝廷の補佐役にと決めると学問に励ませる「帝、かしこき〜」（2075 / 二一⑤ / 四〇）	帝、かしこき御心に、優相を仰せておぼしよりにける筋なれば、今までこの君を親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけりとおぼして、無品親王の外戚の寄せなきにてはただよはさじ、我が御世もいと定めなきを、ただ人に朝廷の御後見をするなん、行く先も頼もしげなめることとおぼし定めて、いよいよ道々の才を習はさせたまふ。	実は天皇は優相の法に鑑み、深く配慮することがあります。今この相人の素晴らしさを愛でながら、皇子を外戚の後ろ盾のない無品の親王をさせないと決心しました。自分がどれほどこの位にいるかは定かではないが、普通のひととさせ、朝廷の後ろ盾となってもらったほうが将来も安定しているだろうと思い、ますます彼を勉学させ、諸般の才能を学ばせるのです。
50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断「際ことに〜」（2120 / 二一⑩ / 四一）	際ことにかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば、世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこき道の人に勤へさせたまふにも、同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべくおぼしおきてたり。	彼の天才は優れていますので、普通のひととさせるのも惜しいことです。しかし、親王となると、人に排斥される恐れがあります。また、星を覩て占いのできるこの相人も同じような話をしたので、天皇は源氏の苗字を賜ることを決心しました。
51 更衣が忘れられず世を疎ましく思ふ帝に、先帝の四の宮の噂が届く「年月にそへ〜」（2147 / 二一⑬ / 四一）	年月にそへて、御息所の御ことをおぼし忘るるをりなし。慰むやとさるべき人々（大島本「人々を」）参らせたまへど、なずらひにおぼさるるだにいとかたき世かな、と疎ましようのみよろづにおぼしなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします。	時が流れて行く中、天皇は一刻も更衣のことを忘れることはありません。たくさんの人を召したが、或いは憂いの気持ち少し紛れるだろうと期待しても、ただつまらなくなり、同じほどの美人に出会うのも容易いことではないと嘆くばかりです。先帝には四の姫宮がいます。その美貌は有名で、
52 典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏上し帝の気を引く「母后世になく〜」（2173 / 二二② / 四一）	母后世になくかしづきこえたまふを、上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「亡せたまひにし御息所の御容貌に似たまへる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、後の宮の姫宮こそ、いとおぼえて生ひ出でさせたまへりけれ。ありがたき御容貌人になん」と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねむごろに聞こえさせたまひけり。	母後の養育で一層世に比べ物のいないほど成長してきました。こちらの典侍は先帝の頃からの人で、その母后と慣れ親しんでいます。彼女が成長してきたのを見て、今でも時々会います。そこで、「亡くなった更衣と似ている人と言いましたら、私は三代の天皇を伺候していますが、ただそちらの姫宮は、本当にそっくりで、絶世の美人です」と奏上しました。「そうですか」と、天皇は心に留めて、人を遣わしてそちらにお願いしました。
53 帝を巡る女たちの怖さを言う四の宮の母が死ぬと、入内の道が開く「母后、「あな〜」（2233 / 二二⑧ / 四二）	母后、「あな恐ろしや、春宮女御のいとさがなくて、桐壺更衣の、あらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」と、おぼしつみて、さすががしうもおぼしたたざりけるほどに、后も亡せたまひぬ。心細きさまにておはしますに、「ただ我が女御子たちの同じつらに思ひきこえん」と、いとねんごろに聞こえさせたまふ。	そちらの母后は、「恐ろしいことです！東宮の女御はとても性格が悪くて、実に桐壺の更衣を苦しめ死なせたので、悪い例です。決して入内してはいけません」と心配して、すぐには返事をしません。まもなく母后も亡くなりましたので、姫宮は一人で、大変寂しいです。天皇はまた人を遣わして、「わが娘同様に扱ってはどうか」と懇ろにお願いしました。

54 不思議なほど更衣に似る四の宮は周りに押され入内し藤壺と称する「さぶらふ人々〜」(2264 / 二二⑩ / 四二)	さぶらふ人々、御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、かく心細くておはしませんよりは、内裏住みせさせたまひて、御心も慰むべくなどおぼしなりて、参らせてたまつりたまへり。藤壺と聞こゆ。げに御容貌ありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる。	彼女に伺候している人たちや、後ろ盾となる人たち、及びその兄である兵部卿親王は、皆このように孤独に暮らしているより、入内したほうがいいと思います。それで、気持ちも少しは和らげるだろうと思いますので、そのまま入内させました。藤壺と呼ばれています。その容貌なり、姿勢なり、所々大変似ています。
55 藤壺は皇女の身ゆえに誰に気兼ねもなく、帝の寵愛もしだいに移る「これは人の〜」(2295 / 二三② / 四三)	これは人の御きはまさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけばかりであかめことなし。かれは、人の許しきこえざりしに、御心ざしあやになりにしぞかし。おぼし紛るとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなうおぼし慰むやうなるも、あはれるわざなりけり。	こちらは、出身も高く、品格も端正であるので、誰も批判することはできません。天皇はわが心に適ったと思い、少しも不満だと感じません。以前のほうはやはり人に排斥され、その上度過ぎて寵愛されていました。天皇は旧い人を忘れ、新しい人に心を移ったというわけではないですが、感情移入をするのも自然のことで、楽しいところに赴くのも感嘆すべきところ です。
56 源氏の君は常に父帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見する「源氏の君は〜」(2327 / 二三⑤ / 四三)	源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡られたまふ御方は、え恥ぢあへたまはず。いつれの御方も、我人に劣らむとおぼいたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うち大人びたまへるに、いと若ううつろひて、せちに隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。	源氏は片時も天皇の左右から離れませんので、頻繁にご寵愛を受けている殿舎の人たちは、恥ずかしくて回避することもできません。どちらの方も、自分が人より劣っていると思わないでしょう。皆美人でありながら、大人の姿勢を取っていますが、こちらの方だけは、若くて美しく、いつも回避していながらも、自然に親しむこともあります。
57 三歳で母と死別した源氏の君は、母に生き写しだという藤壺を慕う「母御息所も〜」(2370 / 二三⑨ / 四三)	母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり」と典侍の間こえけるを、若き御心地にとあはれと思ひきこえたまひて、つねに参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。	源氏は生まれの母のことをすっかり忘れてしまったが、典侍の話しによると、大変似ていますので、少年の心には思慕の種が植えられました。時々その方に近づき、ご機嫌をとりたいと思っています。
58 帝は藤壺と源氏を愛し、更衣の形代である藤壺に源氏は好意を示す「上も、限りなき〜」(2396 / 二三⑪ / 四四)	上も、限りなき御思ひどちにて、「な疎みたまひそ。あやしきよそへきこえつべき心地なむする。なめしとおぼさで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどは、いとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも、似けなからずなん」など聞こえつけたまへれば幼心地にも、はかなき花、紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。	この二人は特に天皇に寵愛されていますので、天皇はわざわざ、「他人だと思わないでください。二人は本当に似合うような感じですね。羨がないと思わなく、優しくしてあげてください。眉目も表情も相似ていますので、本当の親子としてもおかしくないようですね!」と言いつけました。子供の気持ちも、この上ない親しさを感じ、春の花や、秋の葉に事寄せて、話を伝え、懇ろに近づいています。
59 弘徽殿と藤壺が険悪な中、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃「こよなう〜」(2433 / 二四① / 四四)	こよなう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿女御、またこの宮とも御仲そばそばしきゆゑ、うちそへて、もとよりの憎さもたち出でて、ものしとおぼしたり。世に類ひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほにほはしさはたとへん方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとりどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。	弘徽殿女御もこちらの姫宮と相性がよくなく、以前の恨みなども思い出していますので、気に入らないです。世間の人々は、この美貌で有名な姫宮よりも美しい方を、光る君と呼んでいます。藤壺も天皇に特に寵愛されていますので、昭陽の姫宮と呼んでいます。
60 光源氏は十二歳で兄東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う「この君の〜」(2483 / 二四⑤ / 四四)	この君の御童姿、いと変へまうくおぼせど、十二にて御元服したまふ。居起ちおぼしいとなみて、限りあることに、事をそへさせたまふ。一年の春宮の御元服、南殿にてあり儀式、よそほしかりし御響きにおとさせたまはず。所々の響など、内蔵寮、穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなることもぞ、ととりわき仰せ言ありて、清らを尽くして仕うまつれり。	この君が童の装束を変えるのは、惜しいことですが、十二歳になって加冠をします。天皇は起居の間ずっとこのことについて計画して、格別に万事を整えたいと思っています。盛況は南殿で開かれた東宮の加冠の儀ほど劣らず、荘重な挙式の様子はとても立派です。所々饗宴のことについては、内蔵寮、穀倉院などに特別な勅旨を下していますので、適当な食事でごまかすのではなく、ご馳走に華美を尽くしました。
61 清涼殿で左大臣が光源氏に冠を被せ、帝は更衣がいたらと感極まる「おはします〜」(2537 / 二四⑩ / 四五)	おはします殿の東の廂、東向きに椅子立てて、冠者の御座、引き入れの大臣の御座、御前にあり。申の時にて源氏参りたまふ。みづら結ひたまへるつらつき、顔の匂ひ、さま変へたまはむこと惜しげなり。大蔵卿、蔵人仕うまつる。いと清らなる御髪をそぐほど、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばとおぼし出づるに、堪へがたきを、心強く念じかへさせたまふ。	東の廂に東に向けて御座の椅子を設け、冠者の座席と加冠をする大臣の座席は皆御前にあります。申の刻となると、源氏は殿上に上がります。総角の髪型で修飾した御顔と風采は、すぐに変えますので、実に惜しいです。大蔵卿は蔵人を担当します。美しい髪を取り上げ、その美しさは切ろうとして切れないほどです。天皇は、もし更衣が今日の光景を目にすることができたらと思い、とても悲しいです。
62 加冠の儀の後、光源氏の拝舞にみなは感涙し帝も更衣を想い感無量「かうぶり〜」(2580 / 二五① / 四五)	かうぶりしたまひて、御休み所にまかてたまひて、御衣奉りかへて、おりて拝したてまつりたまふさまに、皆人涙落としたまふ。帝はた、ましてえ忍びあへたまはず、おぼし紛るるをりもありつる昔のこと、とりかへし悲しくおぼさる。いとかうきびはなるほどは、あげ劣りやと疑はしくおぼされつるを、あさましううつろしげさ添ひたまへり。	儀式が終わり、休憩所に退出し、上の服を着替えます。階段の下で拝調している姿は、見る人皆涙を流しています。天皇も一層堪えられないです。近頃別のことで心を分けたのですが、この時は昔に戻り、悲しくて堪えられません。まだ加冠していなかったときは、服装を変えることでその風采を損なえるだろうと心配していたが、まさか非凡な風采を加え、一層美しくなったとは思わなかったです。
63 左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする「引き入れの〜」(2623 / 二五⑥ / 四六)	引き入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしづきたまふ御娘、春宮よりも御気色あるを、おぼしわづらふことありける、この君に奉らむの御心なりけり。内裏にも、御気色たまはらせたまへりければ、「さらば、このをりの後見なかめるを、添い臥しにも」と、もよほさせたまひければ、さおぼしたり。	加冠をする大臣は、宮腹の姫君がただ一人いますが、東宮が求婚しているのに、躊躇って返事をしないのは、実はこの君のほうに気に入っているからです。これも深く天皇の意を得たことです。そこで、天皇は、「誰も世話する人のいない今日という日に、お連れ合いとしてはいかがでしょうか?」と聞いています。大臣は許諾しました。
64 祝宴で左大臣から娘葵の上との結婚を仄めかさされ光源氏は恥じらう「さぶらひに〜」(2658 / 二五⑨ / 四六)	さぶらひにまかてたまひて、人々大御酒などまゐるほど、親王たちの御座の末に、源氏着きたまへり。大臣気色はみきこえたまふことあれど、ものの懐ましきほどにて、ともかくもあへしらひきこえたまはず。御前より、内侍、宣旨承り伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御祿のもの、上の命婦取りてたまふ。白き大柱に御衣一領、例のことなり。	皆は殿上から降りて宴席に来て、源氏も一緒に席に入り、親王たちの末席に列しています。大臣は宴席の間にそのことを仄めかしましたが、源氏は遠慮していたので、何も話しませんでした。天皇は内侍を遣わして勅旨を下し、大臣を殿上まで召します。大臣は殿上に上がりますと、命婦は上のほうからの贈り物を賜りました。例の白い大褂とご衣裳の一式です。

65 左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拝舞する「御盃のついで〜」(2703 / 二五⑭ / 四七)	御盃のついでに、 いとときなきはつもとゆひに長き世をちぎる心は結びこめつや 御心ばへありて驚かせたまふ。 結びつる心も深きもとゆひに濃きむらさきの色しあせずは と奏して、長橋よりおりて、舞踏したまふ。	酒を飲んでいて、天皇は和歌を下しました。 「童の総角はおかげで始めて結び上げましたが、 根から固い契りを結ぶことができるでしょう？」 わざとその意を示しましたので、大臣は恐れ入って、和歌で返事をしました。 「根から固い契りを結ぶのは辞せないことですが、 濃い紫色は何時までに褪せないことを願っています。」 長い廊から下りて、また舞踏して拝礼をしました。
66 左大臣や親王たちは禄を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大「左馬寮の〜」(2730 / 二六④ / 四七)	左馬寮の御馬、蔵人所の鷹据えてたまはりたまふ。御階のもとに、親王たち上達部連ねて、禄ども品々にたまはりたまふ。 その日の御前の折櫃物、籠物など、右大弁なん承りて仕うまつらせける。屯食、禄の唐櫃どもなど所狭きまで、春宮の御元服のをりにも数まさされり。なかなか限りもなくいかめしうなん。	天皇は左馬寮の馬と蔵人所の鷹を賜りました。階段の下にいる親王たちと公卿たちは、列をしてお祝いをし、身分によって賜りものをいただきました。この日に、御前にさまざまなお品物は、右大弁が担当して用意します。塞がるほど並べているお菓子と唐櫃は、東宮の加冠の時より多いです。本当に限りない盛大と華美です！
67 元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚「その夜〜」(2768 / 二六⑧ / 四七)	その夜、大臣の御里に、源氏の君まかでさせたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづききこえたまへり。いとときびはにておはしたるを、ゆゆううつくしと思ひきこえたまへり。女君は、少し過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥づかしとおほいたり。	その夜、源氏は大臣の邸宅に行きます。儀式の盛大さは、世にも稀です。大臣は彼が若くにして賢いのみで、大変喜んでいて。姫君はすこし年上ですが、若くて恥ずかしいご様子は諭えられないです。
68 左大臣は帝の信頼に加えて光源氏まで加わり右大臣家を凌ぐ勢いに「この大臣の〜」(2800 / 二六⑩ / 四八)	この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内裏の一つ后腹になんおはしければ、いづ方につけてもいと華やかなるに、この君さへかくおはしそひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき、右大臣の御勢は、ものにもあらずおされたまへり。	大臣は朝廷において、いつも手厚く遇されています。母宮は天皇と同じ腹で、出身は大変高く、今度のご縁を添えますと、東宮の外祖父としてまもなく天下の権力を握る右大臣の勢いをも圧倒するほどです。
69 左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う「御子ども〜」(2833 / 二七① / 四八)	御子どもあまた、腹々にものしたまふ。宮の御腹は蔵人少将にて、いと若うをかききを、右大臣の、御仲はいとよからねど、え見過ぐしたまはで、かしづきたまふ四の君にあはせたまへり、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになん。	違う奥さんからたくさんの子供が生まれました。姫宮の腹からは、もう一人蔵人少将がいます。若くて才能があり、あまりこちらと親しくない右大臣でも、そのまま放って置くことができなく、最愛の娘である四の君を彼に嫁ぎました。少将を大切にすることは、こちらが源氏を大切にすることと同じほです。本当に羨ましいご両家の間柄です。
70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠「源氏の君は〜」(2863 / 二七④ / 四九)	源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえしたまはず。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、類ひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな、大殿君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心一つにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。	源氏はよく天皇に召されていますが、家で寛いで長くいることができません。心の中は藤壺の比べ物のない姿を慕い、妻をもらうにはこれほどの器量がいいと思ながらも、なかなか同じほの方に出会うことができません。邸宅にいるこの方は、よく嫉妬られて、品格も高貴ですが、どうも相性がよくなく、若い心はそちらにばかり傾け、苦しい思いで悩んでいます。
71 宮中で光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う「大人になり〜」(2912 / 二七⑨ / 四九)	大人になりたまひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れたまはず。御遊びの折々、琴、笛の音に聞こえ通ひ、ほのかなる御声を慰めて、内裏住みのみ好ましようおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日など、絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は、幼き御ほどに、罪なくおぼしなして、いとなみかしづききこえたまふ。御方々の人々、世の中におしなべたらぬを、選(え)り整えすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなおほなおほしいたつく。	大人となってから、以前のように御簾の内に入ることができません。しかし、内裏に住むのが好きで、天皇が遊宴を催すときに、琴の音と笛の音から、和歌や話の一声か二声を微かに聞こえるのを慰めとしています。住むのは五六日ぐらいで、偶に邸宅に来るのは、二三日だけ住みます。こちらは若さを考え、あまり咎めませんが、つとめて彼の機嫌を取ろうとしています。伺候している人も、普通でないほうを選んでいきます。彼の気に入らぬものを選び、彼を喜ばせます。
72 後の二条院を修築し、そこで理想の女性と暮らしたいと望む光源氏「内裏には〜」(2976 / 二七⑭ / 五〇)	内裏には、元の淑景舎を御書司にて、母御息所の御方の人々、まかで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ。元の木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くして、めでたく造りののしる。 かかる所に、思ふやうならむ人を据えて住まばや とのみ、嘆かしようおぼしわたる。光る君といふ名は、高麗人のめできこえて、つけたまつりけるとぞ、言ひ伝へたとなむ。	内裏のほうでは、もとの淑景舎を彼の住所とし、生母の更衣に伺候していた侍女たちをそのまま彼に伺候させることにします。邸宅の中は、修理職と内匠寮を召して、新しく改造しました。もとの木々と築山のあるところを、池を広げ、巧みに營造しています。源氏はただこれほど綺麗な邸に、わが意に適える人がともに住むことができないことを嘆いています。光る君というあだ名は、高麗の人が彼のことを愛でて付けた呼称だそうです。

●ヒンディー語訳『源氏物語』『桐壺』データ

小見出し	原文（池田本校訂本文・伊藤鉄也作成）	ヒンディー語訳（Pandey 訳）
1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する「いづれの御時〜」（0001 / 五① / 一七）	いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。	とても昔の話だ。日本の国にひとりの皇帝がいた。名前はミン・フエング (ming fueng) だった。王の後宮 (女性部屋) にはたくさんの女性と侍女がいた。その中の一人の名前がヤング・キューフィー (yang kyufi) だった。彼女は高位の家系の者ではなかった。しかし皇帝は彼女を特別気にかけるようになった。このせいで王宮の高位の女性たちは彼女にやきもちをやき嫉妬し始めた。なぜなら皆ひとりひとりが心の中でこう願っていたからだ。いつか皇帝の特別なお気持ち彼女たちの中の誰かに向けられるだろうと。しかし皇帝と彼女たちの間に来た彼女が彼女たちの期待を台無しにした。彼女の階級の女性たちも彼女に不満だった。なぜならこれほど高位まで彼女がたどりつくことは気に入らなかったからだ。
2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる「朝夕の宮仕〜」（0031 / 五④ / 一七）	朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあつくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものと思ほして、人の譏りをもえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人なども、あいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おほえなり。	宮廷での彼女の地位はもちろんあがったが、その結果は彼女にとって良いものではなかった。彼女は執拗なやきもち、妬み、嫉妬の的となった。この卑怯な嫌がらせに困り果て、彼女の心は沈みがちになった。彼女はあまりにつらく悲しいので何度も実家に戻るところだった。しかし皇帝の心が彼女に飽きることも彼女から離れることもなかった。それどころか、彼女が嬉しくも楽しくもないと知って、彼は彼女にますます慈悲深く、やさしくなった。このことから宮廷では様々な話が持ち上がり始めた。何人もの臣下が皇帝に願っても、皇帝はその者たちの話を気に留めなかった。その結果として、この話の噂が一带にひろがってしまった。宮廷の中でも内緒話のはじまった。なぜなら誰もがこの関係を非常に不適切だと思っていたからだ。
3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る唐土にも〜」（0073 / 五⑧ / 一七）	唐土にも、かかることの起こりにこそ、世も乱れ悪しかりけれと、やうやう天の下にも、あぢきなう人のもて悩みぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとほしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへの類ひなきを頼みにて、まじらひたまふ。	彼らが言うには―― 海を越えた国でどこかの皇帝がこのような始末をしでかした。結果として、その国民は反乱を起こした。まさにこの出来事の後、国民をさまざまな災難や災害が襲った。国民はそれをミン・フエング皇帝と恋人のヤング・キューフィーの関係のせいにした。王の品行のせいでは我々は危機に陥っているというのが国民の言い分だった。国中にこのような不満が充満していたにも関わらず、ヤング・キューフィーに目を向ける勇気は誰にもなかった。なぜなら皇帝が彼女を特別に気にかけていたからだ。
4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活「父の大納言〜」（0103 / 五⑩ / 一八）	父の大納言は亡くなりて、母北の方なん、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおほえ華やかなる御方々にもいたう劣らず、何事の気色をももてなしたまひけれど、とりたててはかばかしき後見しなければ、ことある時は、なほよりどころなく心細げなり。	ヤング・キューフィーの父親が亡くなった。彼は宮廷に務める顧問だった。彼女の母親は夫が生前高い地位にいたことが忘れられなかった。母は自分の娘に礼儀作法の十分な教育を与えた。それは、両親が健在で、裕福で地位のある人々の子息が受けるような教育だった。影響力のある保護者の誰かがヤング・キューフィーを見守ってくればよかったのだが、彼女の運命はあまりよくなかった。母親の他に彼女の面倒を見る者は誰もいなかった。どんなに不幸な時も誰も彼女の母親に手を貸す者は無かった。それで彼女は時に困り果て、時に非常に嫉妬深くなる。
5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する「前の世にも〜」（0136 / 六① / 一八）	前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなるちこの御容貌なり。一の御子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君、と世にもてかしたづききこゆれど、この御匂ひには並びたまふべくもあらざりければ、大方のやむごとなき御思ひにて、この君をば、私ものに思ほしかしづきたまふこと限りなし。	母親の話はこの辺にして、娘の話を聞いてください。その後彼女は皇子を生んだ。前世の関わりか何かの因縁か、その赤ん坊もとても美しかった。その国にそれほど美しい子供は他にいなかった。古いしきたりのため、生まれてから数週間、皇帝は幼い王子の顔を見ることができなかった。ミン・フエング皇帝は落ち着かなかった。王子が宮廷に入る時がきた。彼の月のような面影をみて皇帝は嬉しくてたまらなかつた。王子は彼が聞いていた通りだった。ミン・フエング皇帝の前の恋人で、法務大臣の娘のカキダンにも息子がひとりいた。臣下たちはこの王子をととても敬っていた。なぜなら彼らはこの王子を未来の王座の後継者で自分たちのの主人と思っていたから。しかし彼はあの赤ん坊ほど美しくはなかった。また、あの女性を皇帝は寵愛していたので、皇帝はこの生まれたばかりの赤ん坊をととても可愛がっていて、特別な宝のように思っていた。
6 帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立坊に疑いを抱く「はじめより〜」（0184 / 六⑦ / 一九）	はじめより、おしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。おほえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまづはさせたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑあることの節々には、まづ参上させたまふ、ある時には大殿籠り過ぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽きかたにも見えしを、この御子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この御子のあたまふべきなめり、と一の御子の女御はおほし疑へり。	しかし運の悪いことに、ヤング・キューフィーの家柄は皇帝の側近の廷臣たちほど高くなかつた。皇帝がヤング・キューフィーを心から欲していたのは確かだった。ヤング・キューフィーも王妃としてのあらゆる徳を備えていた。それでも、祭や政治の重大な討議の場などで、皇帝はとても気に入り悪そうに彼女をそばに座らせていた。皇帝が朝、寝て起きるとヤング・キューフィーがそばにいる。そして皇帝は彼女を自分の部屋に帰さない。このようにして彼女はいつも皇帝のそばにいる。あたかも皇帝がいつも彼女の助けを必要としているかのようには。皇帝のこの様子を見てカキダンの心に恐れが生じてきた。非常に気を付けなければ、皇帝がヤング・キューフィーの子どもを皇太子の地位につけるようなこともあり得る、と。
7 帝は弘徽殿女御を気遣うも桐壺更衣を寵愛し、更衣の気苦劣は増す「人より先に〜」（0248 / 六⑬ / 一九）	人より先に参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおほしませば、この御方の御諫めをのみぞ、なほ煩はしう、心苦しう思ひきこえさせたまひける。かしこき御陰を頼みきこえながら、おとしめ、疵を求めたまふ人は多く、我が身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。	カキダンはヤング・キューフィーよりもずっと前から皇帝の恋人だったことが誇りだった。皇帝の寵愛を彼女は受けた。彼女の息子が一人目の王子だった。皇帝はカキダンの非難をあまり恐れていなかった。人生の新しい出来事に対する不安程度に思っていた。だから皇帝からまたとない寵愛を受けているにも関わらず、彼の新しい恋人をカキダン側の人々は軽んじていた。それで、ヤング・キューフィーは自分をとてもみじめで弱いと感じていた。彼女は皇帝の恋人になり地位や名誉を得たせいで、安穩のかわりに悲しみばかりを手に入れたと事あるごとに感じていた。

<p>8 更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける「御局は桐壺〜」(0288 / 七③ / 二〇)</p>	<p>御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふも、げにことわりと見えたり。参上りたまふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿のここかしこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾堪へがたく、まさなきこともあり。また、ある時には、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた心を合はせて、はしたなめわづらはせたまふ時も多かり。</p>	<p>彼女の特別な部屋の名は桐壺だった。自室から皇帝のところに行き来するために多くの女性の部屋の前を通らねばならなかった。彼女が何度もいったりきたりするの女性たちの気に障った。ヤーング・キューフィーを困らせたり、怖がらせたりするために彼女たちは橋や廊下に恐ろしい物を置いたり、彼女の輿を担ぐものの着物が汚れてしまうような汚い物をあちこちに置いたりした。 ある日、誰かが廊下の戸を閉めてしまった。可哀そうなヤーング・キューフィーは何時間もうろうろと困ってしまった。このようなことが日常茶飯事で、彼女は困り果てていた。</p>
<p>9 帝は桐壺更衣への虐待を不憚に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す「ことにふれ〜」(0344 / 七⑨ / 二〇)</p>	<p>ことにふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれと御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を、ほかに移させたまひて、上局にたまはず。その恨みましてやらむ方なし。</p>	<p>皇帝も彼女の苦しむ姿を見ていられなくなるほどだった。だから彼女は女性をコロデンから追い出した。コロデンにはその時まで宮殿の上位の女性が住んでいた。皇帝は彼女を外に住ませた。このようにして彼女に平穏を与えようとしていたのに、皇帝は彼女の新しく恐ろしい敵を作ってしまったのだ。</p>
<p>10 若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる「この御子三つ〜」(0378 / 七⑩ / 二一)</p>	<p>この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮のたてまつりしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじうさせたまふ。それにつけても、世の譏りのみ多かれど、この御子のおよすけもおはする御容貌、心ばへ、ありがたくめづらしきまで見えたまふを、えそねみあへたまはず。ものの心知りたまふ人は、かかる人も世に出でおはするものなりけり、とあさましきまで目を驚かしたまふ。</p>	<p>小さい皇子が三歳になった。男性用のズボン（衣服）を着せる儀式が皇太子の儀式のように盛大に行われた。たくさんの贈り物が分け与えられ、多くの人が受賞した。これもたくさんのひとから非難中傷の的となった。しかしこのことで、皇太子に対して敵意を持った人は誰もいなかった。王子の美しさと彼の上品さに皆心酔していた。偉い人や老人たちは口ぐちに、この罪深い時代にこのような男子の生まれることは稀だと語った。</p>
<p>11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出「その年の夏〜」(0439 / 八② / 二一)</p>	<p>その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず。年ごろ、常のあつしさになりたまへれば、御目馴れて、「なほ、しばし試みよ」とのみのたまはするに、日々に重りたまひて、ただ五六日のほどに、いと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたまつりたまふ。かかるをりにも、あるまじき恥もこそ、と心づかひして、御子をば留めたてまつりて、忍びてぞ出でたまふ。</p>	<p>この年の夏、ヤーング・キューフィーはとても調子が悪くなってきた。実家の母のところに行きたいと何度もお願いしたが、皇帝は彼女の願いを気にかけなかった。一年ほど、彼女の具合の悪さは続いた。彼女が皇帝に休みをお願いすると、かれは決まってこう答えた。「あと数日かんばってみてください」しかし彼女の調子は日に日に悪くなっていった。あるとき、彼女の調子が何日間の酷い状態が続き、彼女の母が目には涙をためながら皇帝に休みを頂けるようお願いした。ヤーング・キューフィーの心にはいつもこの恐れがあった。この機を利用して彼女の敵が侮辱する策略を練っているのではないかと。彼女は皇子を王宮に残し、こっそり母のところへいく準備を始めた。</p>
<p>12 帝は絶え入らんばかりの桐壺更衣をご覧になるにつけ途方に暮れる「限りあれば〜」(0488 / 八⑦ / 二二)</p>	<p>限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなさや、言ふ方なく思ほさる。いと匂ひやかにうつくしげなる人の、いたう面瘦せて、いとあはれとものを思ひしみなながら、言に出でても聞こえやらず、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを、御覧するに、来し方行く未おぼしめされず、よろづのことを、泣く泣く契りのたまはずれど、御答へもえ聞こえたまはず、まみなどもいとたゆげにて、いとどなよなよと、我がの気色にて臥したれば、いかさまにとおぼしめし惑はる。</p>	<p>皇帝は彼女を行かせたくなかったが、彼女を送ることに決めた。しかし彼女が皇帝に会わずに黙って行ってしまふのは我慢ならなかった。だから皇帝は彼女の所へ行つた。ヤーング・キューフィーの体は痩せ細り、弱弱しくなっていた。それでも彼女の顔にはあの絶世の美しさがあった。彼女は皇帝を優しいまなざしで見つめたが、彼女の口は一言も発しなかった。彼女は生きていないのか？彼女の命の火はとても弱くなってしまつて、とても彼女の命の火がまだ燃えているとは信じられなかった。皇帝はその時、ヤーング・キューフィーが今までどんな酷い目にあい、またこの先どんな目にあうのか知りもしなかった。彼は彼女を愛情をこめて呼んだ。そして彼女の唇に何度もキスをし、胸に抱きしめた。皇帝の目から涙が止めども無くあふれた。しかし彼女は何も答えなかった。なぜなら彼女の瞳の光はもう弱まってしまい、聴力も非常に弱くなってしまったからだ。彼女は記憶力も無くしてしまったかのように寝台に意識を失くしたように横たわっていた。</p>
<p>13 輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する「輦車の宣旨〜」(0537 / 八⑭ / 二二)</p>	<p>輦車（てぐるま）の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえゆるさせたまはず。「限りあらむ道にも、後れ先だたじ、と契らせたまひけるを、さりともうち捨てては、え行きやらじ」とのたまはするを、女もいとみじと見たてまつりて、限りとて別る道の悲しきにかまほしきは命なりけりいとかく思ひたまへましかば」と息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながらともかくもならむを御覧じはてむとおぼしめすに、「今日始むべき祈りども、さるべき人々承れる、今宵より」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながら、まかでさせたまふ。</p>	<p>彼女のこの様子を見て皇帝は驚いた。心から泣いた。彼は輿を呼んだ。人々が彼女を持ち上げ輿に横たえようとすると、皇帝はそれを止めて言った。「私たちふたりは誓ったんだ。誰もが最後の時に渡らなければならないあの道を一人きりでは絶対渡らないと。だから私を残して行かせることはできない。」ヤーング・キューフィーは皇帝の言葉を聞き、とても静かに言った。「望んで最期の時がきて私が一人で行くのなら、この一人で行くことがとても私は嬉しいのです。それを想像するのはわずかしい。」  彼女はとても小さな声で弱弱しくこの言葉を語った。そう言うだけの力はあったが、一言一言をとても苦労して辛そうに口から出していた。どんなことがあって皇帝は彼女の最期の時を見とどけたかったが神へ祈祷するため僧侶をもう母親のところへ送ってしまった。だから彼女は夕方になる前にそこに到着しなければならなかった。皇帝は仕方なく彼女を見送った。</p>
<p>14 心塞がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる「御胸つと〜」(0608 / 九⑦ / 二三)</p>	<p>御胸つと塞がりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行き交ふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、「夜中うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。聞こしめす御心惑ひ、何事もおぼしめしわかれず、籠りおはします。</p>	<p>その夜皇帝はなんとか眠ろうとしたが、彼の目はひきつってしまったかのように閉じなかった。彼女の母の家から王宮まで一晩中使いが行ったり来たりしていた。最初から皇帝にいい知らせは無かった。夜中の12時過ぎに来た使いの知らせによれば、そこでは皆の泣く声が聞こえたとのことだった。家の中の者に聞いたところ王妃は亡くなったそうだ。皇帝はまるでその言葉が耳に入らなかったように茫然としていた。</p>

<p>15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する「御子は〜」(0644 / 九⑩ / 二四)</p>	<p>御子は、かくてもいと御覧ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ、例なきことなれば、まかでたまひなんとす。何事かあらむともおぼしたらず、さぶらふ人々の泣き惑ひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを、よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれに言ふかひなし。</p>	<p>皇帝は幼い皇子を大変かわいがった。彼をいつも自分のそばに置いた。それでもこの事件の後皇子を王宮から外にだすのが最善だとされた。王子は何も知らなかったが、召使たちが悲しがったり、皇帝が酷く泣いているのを見てなにか恐ろしいことが起こったということだけは理解できた。別れというものは一般に人が沈み悲しむものだと思っていたが、このように泣き悲しむのを前に見たことがなかった。だから彼はなにかとても酷く普通じゃない別れがあったのだと考えた。</p>
<p>16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒に泣き焦がれる「限りあれば〜」(0684 / 一〇② / 二四)</p>	<p>限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、同じ煙にのぼりなん、と泣きこがれたまひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて、愛宕といふところに、いとかめしうその作法したるに、おはし着きたる心地、いかばかりかはありけん。</p>	<p>葬式の時にヤーン・キューフィーの母は言った。「私の娘を焼く薪の隣で私の薪からも煙がでたらよかったのに」王宮の女性たちが火葬に参列するために乗ってきた車で彼女も火葬場に行った。アタゴで火葬が正式に執り行われた。</p>
<p>17 気が動転している母は、火葬の現実も受け入れられず諦めきれない「むなしき〜」(0712 / 一〇⑤ / 二四)</p>	<p>「むなしき御骸（から）を見る、なほおはするものと思ふが、いとくひなければ、灰になりたまはんを見たてまつりて、今は亡き人、とひたぶるに思ひなりなん」と、さかしうのたまひつれど車よりも落ちぬべうまるびたまへば、さは思ひつかし、と人々もてわづらひきこゆ。</p>	<p>彼女の母は娘をととても愛していた。亡骸が薪に乗せられるまで、娘を抱き、まるで彼女が生きているかのように撫でて続けた。薪がごうごうと燃えだすと彼女は自分の娘が死んだことを理解した。彼女は自分を抑えることに必死だった。それでもめまいがして気を失いパタンと大地に倒れてしまった。そこにいた女性たちは口ぐちに言った。「やっと現状が分かったようだ」</p>
<p>18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す「内裏より御使〜」(0741 / 一〇⑧ / 二五)</p>	<p>内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだにいはせずなりぬるが、あかず口惜しうおぼさるれば、いま一階（ひときざみ）の位をだに、と贈らせたまふなりけり。これにつけても、憎みたまふ人々多かり。</p>	<p>その時ひとりの使いが王宮に来て、布告を読み聞かせた。その布告によれば、その亡き女性に三番目の位が与えられた。火葬場でこの長い布告を人々は沈み、不機嫌そうに聞いた。皇帝は生前に彼女に第一王妃の位を与えなかったことを心から悲しんでいた。だから、彼は彼女の位をこの布告でひとつ上上げた。この名誉に反対する者もいた。</p>
<p>19 聡明な女房たちは桐壺更衣の美質を追想し、思慕の情をもって偲ぶ「もの思ひ知〜」(0775 / 一〇⑩ / 二五)</p>	<p>もの思ひ知りたまふは、さま容貌などのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりしことなど、今ぞおぼし出づる。さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねたまひしか、人柄のあはれに情ありし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とは、かかるをりにやと見えたり。</p>	<p>しかしそれほど強情でない者は、彼女は絶世の美女だったと言い始めた。彼女の性格や行いを褒める者もいた。素晴らしい女性を嫌う者がいたことを大変恥じるべきだとまで言う者も多かった。彼女がこんな風に一人ぼっちにされなかったら、彼女に対して誰も何も言えなかったはずだ。</p>
<p>20 秋となり帝はただ涙の日々の中、弘徽殿女御は桐壺更衣を許さない「はかなく〜」(0809 / 一一① / 二六)</p>	<p>はかなく日ごろ過ぎて、後のわざなどにも、細かにとぶらはせたまふ。ほど経るままに、せむ方なう悲しうおぼさるるに、御方々の御宿直なども絶えてしたまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほゆるしなうのたまひける。</p>	<p>皇帝の命により、7 週間国は喪に服した。時が経っても、皇帝は宮廷の他の女性に近づかなかった。彼の世話をする者たちの様子は非常に気の毒だった。なぜなら皇帝が昼も夜も泣き続けていたから。カキダンと王宮の高貴な女性たちは容赦なかった。彼女たちは、皇帝はバカみたいに彼女の体にくっついていたが、今度もバカみたいに彼女の思い出にくっついていたいようだといいふらした。</p>
<p>21 帝は若宮を恋しがり、野分だつ夕暮に靱負命婦を更衣の里に遣はす「一の宮を〜」(0850 / 一一⑤ / 二六)</p>	<p>一の宮を見たてまつらせたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほしいでつつ、親しき女房、御乳母などをつかはしつ、ありさまを聞こしめす。野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりもおぼし出づること多くて、靱負（ゆげい）の命婦といふを遣はす。</p>	<p>彼は時々カキダンの息子、上の皇子を見に行っていたが、彼の心はいつも下の皇子に会いたがっていた。信頼できる召使に、特に前の乳母に、よく彼の様子を見に行かせていた。落ち葉の季節が訪れようとしていた。夕方の風に体が不思議に震えた。昔の思い出が彼を苦しめた。どうしようもなくなり、彼はヤーン・キューフィーの母に手紙を書いた。矢筒運びの娘に託して手紙を送った。</p>
<p>22 帝は夕月夜の美しい折に催した管弦を思い出し、更衣の面影に浸る「夕月夜の〜」(0877 / 一一⑨ / 二六)</p>	<p>夕月夜のをかしきほどに、出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなるものの音を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりし気配容貌の、面影につと添ひておぼさるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。</p>	<p>夜の気持ちの良い時間だった。あたりは月明かりに包まれていた。手紙を送った後、しばらくの間立ったまま彼は夜の美しさを見つめていた。こんな時彼の心は音楽を強く求めた。彼はヤーン・キューフィーの美しい歌声が音楽の美しい調べに調和していたこと思い出した。彼女がそのまま彼の前に現れ、彼は自分を見失った。彼は心の中であの詩を詠み始めた。その心は、「暗闇の中には現実のものも夢のように現れる」そして彼は心の中で言った。「ああ夢でもいいからあの夜の顔に会えたら」</p>
<p>23 命婦は亡き更衣の邸に入り、八重葎で荒れた庭には月影が差し込む「命婦かこ〜」(0907 / 一二② / 二七)</p>	<p>命婦（みょうぶ）かこにまうで着きて、門引き入るより、気配あはれなり。やもめ住みなれど、一人の御かしづきに、とかくつくろひたてて、めやすきほどにて過ぐしたまへる、闇にくれて臥しつみたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎（やへむぐら）にもさはらずさし入りたる。</p>	<p>使者の女性は、屋敷の門に着いた。彼女は戸を押し開けた。家の様子を見て彼女はびっくりした。母は何年も前に未亡人になっていた。家計の重荷はすべて娘の上のしかかっていた。彼女の死は老婦にとって大変な衝撃だった。彼女は家の様子に全くかまわなかった。家のそこそこに草やいばらが伸びていた。落ち葉の風がその様子をもっとひどくしていた。サボテンの木が茂っていて、まるで月の光はそこだけにあるようだった。</p>
<p>24 更衣の母は命婦と対面し感極まり涙し、命婦は帝の仰せ言を伝える「南面に〜」(0937 / 一二② / 二七)</p>	<p>南面（みなみおもて）に下ろして、母君もとみにえものものたまはず。「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の、蓬生の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなむ」とて、げにえ堪ふまじく泣いたまふ。「『参りてはいとど心苦しう、心肝もつくるやうになん』と、典侍の奏したまひしを、もの思うたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたうはべりけれ」とて、ややためらひて、仰せ言伝へきこゆ。</p>	<p>使者の女性は門のところに来た。ヤーン・キューフィーの母は彼女の顔を見つめていた。彼女はもうどうしたらいいか分からなかった。やっと彼女はこう言った。「死神の使いも忘れてしまった。あなたがここまでくるのは大変だったでしょう。道には棘のある茨も生えているし、それを超えてくるのは並大抵のことじゃない。」こう言って、彼女はしくしく泣き出した。その時使者の女性は言った。「ここに来た王宮の侍女が皇帝に、ここの様子を見て胸が張り裂けるようだったと言いました。今私も同じ気持ちです。」一瞬黙って、彼女は皇帝の伝言を告げた。</p>

<p>25 命婦は帝の心意を更衣の母に伝え、涙にむせぶ帝からの手紙を渡す 「『しばしは〜』(0987 / 一二〇 / 二八)</p>	<p>「『しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひあはずべき人だになきを、忍びては参りたまひなんや。若宮のいとおぼつかなく、露けき中に過ぐしたまふも、心苦しうおぼさるを、とく参りたまへ』など、はかばかしようも、のたまはせやらず、むせかへらせたまひつつ、かつは人も心弱く見たてまつるらむと、おぼしつづまぬにしもあらぬ御気色の心苦しさに、承りはてぬやうにてなむ、まかではべりぬる」とて御文たてまつる。</p>	<p>しばらくの間、私は自分の心の闇の夢の中から外に出る道を探していた。しかしそれは無駄な努力だった。この無知の淵から意識を取り戻すための道が見つからない。私を元気づける者もここには誰もいない。秘密にこっそりと私の所に来れませんか。皇子をそのような人気もなく、不吉な場所で過ごさせるのはよろしくないでしょう。彼も連れてきてください。」 このようなことを彼はたくさん述べた。彼は自分の心の思いをはっきり言うことができないようだった。自分の心の悲しみを私に隠すために非常に葛藤している様子を私は見た。私は王宮から急いで出てきたので、皇帝の話をすべて聞くことができなかった。彼は一通の手紙も託しました。</p>
<p>26 帝からの文は、若宮と共に参内するようにと懇ろに促すものだった 「目も見え〜」(1043 / 一二〇 / 二八)</p>	<p>「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなん」とて見たまふ。 「ほど経ば少しうち紛ることもや、と待ち過ぐす月日にそへて、いと忍びがたきはわりなきわざになむ。いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、もろともにはぐくまぬおぼつかなさを、今はなほ昔の形見になずらへてものしたまへ」など、細やかに書かせたまへり。 宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれとあれど、え見たまひはず。</p>	<p>母は言った。「目が悪くなってしまいました。明るいところで読みます。」手紙にはこう書いてあった。 「私は時間が経てば彼女の思いも薄れていくだろう、時間の覆いが掛かっていくだろうと思っていた。だが違った。時間が経てばたつほど、私の人生は耐えられないものになっていく。子どものことが思われて辛くなる。どんなふうに通過しているだろうかと。私とその子の母親がその子の成長の道をひろげていくだろうと思っていた。あなたがその子の母親の代わりにできませんか、過ぎし日の形見を私の所に連れてこれませんか？」これがその手紙の言葉だった。その後、さまざまな指示が続き、最後に詩がひとつあった。その意味はこうだ。「タガの沼地の冷たい露のしずくが受ける風の音は、私の心にあの蓮の根のように柔らかい体の人を思い出させて悩ませる。」 皇子について彼はそのように暗示する言葉で書いた。しかし彼女は手紙を最後まで読まなかった。最後に母は言った。</p>
<p>27 母君は桐壺更衣の入内のいきさつを語り、横死のようなさまを嘆く 「命長さの〜」(1094 / 一三〇 / 二九)</p>	<p>「命長さの、いとつらう思ひたまへ知らるるに、松の思はんことだに、恥づかしう思ひたまへばれば、ももしきに行きかひはべらんことは、ましていと憚り多くなん。かしこき仰せ言をたびたび承りながら、自らはえなん思ひたまへたつまじき。若宮は、いかに思ほし知るにか、参りたまはんことをのみなむおほし急ぐめれば、ことわりに悲しう見たてまつりはべる、など内々に思ひたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも、いまましう、かたじけなくなむ」とのたまふ。</p>	<p>「私はこの地に長く生きすぎた。タカサゴのヒマラヤスギの前でも私は恥じなければならぬだろう。私のような100歳にもなるおばあさんがあの王宮であちこち動けるわけがない。皇帝様は私を何度も思い出してくれるだろう、しかし私は皇帝様のご命令に従う能力がない。私は皇子が皇帝様の願いを知っているかどうか知らない。しかし彼は王宮にもどりたくてうずうずしている。彼がここでとても悲しく暮らしているのをしって驚くことでもない。皇帝様このことを伝えてください。私が自分のことについて言ったことも伝えてください。そう、ここはあの幼い男の子にふさわしい場所ではない。」</p>
<p>28 若宮が就寝した後、勅使役の命婦は役目を終えたために帰参を急ぐ 「宮は大殿籠〜」(1149 / 一三〇 / 三〇)</p>	<p>宮は大殿籠（おほとのごも）りにけり。 「見たてまつりて、くはしう御ありさまも奏しはべらまほしきを、待ちおはしますらんに、夜ふけはべりぬべし」とて急ぐ。</p>	<p>使いの女性は言った。 「皇子は寝てしまったと聞きました。皇帝に彼の様子を伝えるために一目お目にかかりたいのですが、私はとどまることができません。皇帝様が私の帰りを待ちきれないでいるでしょうから。」 彼女が行きかけると、母が言った。</p>
<p>29 亡き更衣の母君は、横死した我が子への尽きせぬ思いを命婦に語る 「くれ惑ふ〜」(1163 / 一三四 / 三〇)</p>	<p>「くれ惑ふ心の闇も堪へがたき片端をだに、はるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも、心のどかにまかだたまへ。年ごろ、嬉しく面だたしきついでにて、立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、返す返すつれなき命にもはべるかな。生まれし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはととなるまで、『ただ、この人の宮仕への本意、かならず遂げさせてまつれ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』と、返す返す諫めおかれはべりしかば、はかばかしよう後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに、出だしたてはべりしを、身にあまるまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、上げなき恥を隠しつつ、まじらひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなりそひはべりつるに、横さまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなん、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になん」と、言ひもやらず、むせかへりたまふほどに、夜もふけぬ。</p>	<p>「自分の疎ましい考えの闇の中をうろついている者も、お話をすることで前に進むための束の間の光を得ます。だから時間があるときはちょくちょく私のところにも来てください。あなたはこの家が笑いと喜びで安らいでいた日々に来ていた。今日はこの話を持ってきてくれた。運命を信じるなんて大馬鹿者だ。この子が生まれてすぐから、父親はこの子を王宮に仕えさせたがっていた。死ぬ間際までそう言い続けた。後ろ盾のないこの子が大変な苦勞をしなければならぬことはよく分かっていて。しかし私は彼の願いを守った。宮廷でこの子は大変な恩恵を受けた。しかしそれと共に裏では残酷極まりない妬みと嫉妬的にならなければならなかった。ついには、嫌悪という重荷に押しつぶされ彼女は死んだ。殺されたようなものだ。皇帝様が彼女に示してくださった深い愛情は、無関心よりも残酷なものだったように思う。」 こんな風に言いながら、彼女は泣きじゃくった。のどがつまってしまった。そして夜になってしまった。</p>
<p>30 命婦は帝が悲涙の内に更衣との因縁を偲ぶさまを語って帰参を急ぐ 「上もしか〜」(1256 / 一四〇 / 三一)</p>	<p>「上もしかなん。 『我が御心ながら、あながちに人目驚くばかりおぼされしも、長かるまじきなりけり、と今はつらかりける人の契りになむ。世に、いささかも人の心をまげたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはては、かううち捨てられて、心をさめむかたなきに、いとど人わろうかたくなになりはべるも、前の世ゆかしうなん』と、うちかへしつつ、御しほたれがちにのみおはします」と語りて尽きせず。泣く泣く、 「夜いたうふけぬれば、今宵過ぐさず、御返り奏せん」と急ぎ参る。</p>	<p>使いの女性。 「皇帝様が全部ご自分でお言いになったのです。こうもおっしゃいました。『自分の意に反して私は情熱の虜になってしまい、みんなに目を付けられてしまった。たぶん私たち二人の時間はとても短い運命だったのだろう。束の間の逢瀬の運命を持つものはこんな風に深い愛情の虜になってしまうのだろう。私の愛がもて、誰かを苦しめてはならないと深く決意していたのに、彼女は人々の嫌悪的にならざるを得なかった。特に、彼女のせいで自分たちは不公平なめにあっているという罪深い心を持つ者たちに嫌われてしまった。』 私はこのような事をお殿様が目に涙をためて話すのを何度も聞きました。もう夜も更けました。私はすぐに戻らねばなりません。朝になる前に皇帝にここの話を伝えられるように。」 こう言いながら彼女は泣いてしまった。そしてそのままそこを発とうとした。</p>

<p>31 月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える「月は入り方〜」(1315 / 一五④ / 三二)</p>	<p>月は入り方の、空清う澄み渡れるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いとたち離れにくき草のもとなり。 鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかざる涙かな えも乗りやらず。 「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人かかとも聞こえつべくなん」と、言はせたまふ。</p>	<p>清らかな空に月がその時も輝いていた。風にそここの茂が揺れていた。その中で鈴虫が鳴いていた。その茂を後にして前に進むのは容易でなかった。使者の足は止まった。詩を口ずさみだした。その意味はこうだ。 「鈴虫が絶え間なく鳴くように私の目からも涙が絶え間なく流れる」 これをうけて、母は言った。 「この小さな虫の鳴く茂に、大空の涙が露となって降り注ぐ。なぜなら宮廷の人々は雲の上に住む人とされているから」</p>
<p>32 鞍負命婦の帰参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る「をかしき御贈〜」(1358 / 一五⑩ / 三二)</p>	<p>をかしき御贈り物などあるべきをりにもあらねば、ただかの御形見にとて、かかる用もやと残したまへりける御装束一領、御髪上げの調度めく物添へたまふ。</p>	<p>その後彼女は使いの女性に鏡や櫛や身の回りの物を渡しながら言った。 「亡くなった女性は私のところにこれ全てを置いていった。彼女が皇帝から貰った贈り物です。彼女が使っていたものです。彼女が逝ってしまった後これらに用のある者にはここにはいません。」 昔の思い出として彼女は皇帝にそれらを送った。</p>
<p>33 亡き更衣の女房たちは若君の参内を促すも祖母君は手放し難く思う「若き人々〜」(1378 / 一五⑫ / 三二)</p>	<p>若き人々悲しきことはさらにもいはず、内裏わたりを朝夕にならひて、いとさうざうしく、上の御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とく参りたまはむことを唆しきこゆれど、かくいまいましき身の添ひたてまつらんも、いと人聞き憂かるべし、また見たてまつらでしばしもあらんは、いと後ろめたう思ひきこえたまひて、さすがともえ参らせたまつりたまはぬなりけり。</p>	<p>皇子を連れて来た乳母たちは自分の主人の死にそれほどふさぎ込んでいなかった。それよりも王宮の毎日から離れてしまったことのほうが憂鬱にさせた。だからすぐにでも戻りたかった。しかし母は王宮にはいかないと心に決めていた。何故ならそこにはいかなる拠り所も無く、孤独だから。それにこどもと離れてしまつたら四六時中そのこの心配ばかりするだろう。それが彼女が自ら王宮に行かずまた子供も送らない理由だった。</p>
<p>34 桐壺帝は女房と語り明かし長恨歌の絵を見ながら命婦の帰参を待つ「命婦は〜」(1420 / 一六③ / 三三)</p>	<p>命婦は、まだ大殿籠らせたまはざりける、とあはれに見たてまつる。御前の壺前裁の、いとおもしろき盛りなるを御覧するやうにて、忍びやかに、心憎き限りの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり。このごろ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貴之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ。</p>	<p>使いの女性が王宮に着くと皇帝は起きていた。皇帝は夜に咲く花の美しさ見るのを口実に宮廷の外で待っていた。四、五人の信頼できる女性と一緒にだった。</p>
<p>35 帝は里邸の様を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返書に心を遣う「いと細やか〜」(1469 / 一六⑧ / 三三)</p>	<p>いと細やかにありさま問はせたまふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御返り御覧すれば、 「いともかしこきは、置き所もはべらず。かかる仰せ言につけても、かきくらす乱り心地になん。 あらし風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞ静心なき」 などやうに乱りがはしきを、心をさめざりけるほど、と御覧じゆるすべし。</p>	<p>使いの女性を見るなり、皇帝は彼女のほうにかけより、興奮して向こうの様子を訪ねた。 使いの女性はそこでの事を全て話し終わった後で母からの手紙を皇帝に渡した。そこにはこう書いてあった。 「皇帝のご命令を私は敬意と信頼とともに読みました。しかし皇帝が手紙に書いたことを読んで私の闇はさらに深くなりました。そして私は茫然としてしまいました。」 彼女は最後に詩を書きました。そこに荃が風でめっちゃめっちゃにされた花を自分の運命に例えました。 手紙の言葉は混乱していて、めっちゃめっちゃに書かれていた。普通の時なら誰れもそんな手紙は我慢できなかっただろう。しかし心の傷の癒えていない人に多くを望むことなどできなかった。</p>
<p>36 悲嘆を隠せない帝は更衣入内の頃を思い出し祖母君をも不憫に思う「いとかうしも〜」(1504 / 一六⑫ / 三四)</p>	<p>いとかうしも見えじ、とおぼしむれど、さらにえ忍びあへさせたまはず。御覧じはじめし年月のことさへ、かき集めよろづにおぼし続けられて、時の間もおぼつかなかりしを、かくても月日は経にけり。あさましうおぼしめさる。 「故大納言の遺言あやまず、宮仕への本意深くものしたりし喜びは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ、言ふかひなしや」 とうちのたまはせて、いとあはれにおぼしやる。</p>	<p>皇帝は使いの女性の前では必死に自分を抑えていた。でもヤン・キューフィーが初めて自分のところに来た時のことを思い出した。それとともに何千もの思い出が鮮明になって周りに立ちはだかった。思い出の鎖が繋がり、彼を連れて行ってしまった。自分の知らないうちにどうしてこんなに時が経ってしまったのか考えると震えがきた。全く自分が不注意に思えた。 最後に彼は言った。「私もあの子の父親の最期の願いがこんな風にかないつつあるのは嬉しいことと思っていた。しかし、もうそのことを話しても無駄だ。</p>
<p>37 帝は若宮の将来を約束し、贈物から長恨歌の叙に思いを重ねて歌う「かくても〜」(1543 / 一七③ / 三四)</p>	<p>「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきいつでもありなん。命長くとこそ思ひ念ぜめ」 などのたまはず。 かの贈り物御覧ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりけむしるしの叙ならましかばと思ほすも、いとかひなし。 尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく</p>	<p>幼い皇子が生きているからそういう機会もあり得る。今はその子の長生きを祈らねばならない。」 彼は使いが持って帰ってきた贈り物を見て言った。 「君は彼女の魂が住んでいる場所に行ってきた。そして君はあそこから髪を束ねたところにさすピンを持ってきた。まるでマジックのように。」 そして彼はこのような意味の詩を詠んだ。 「ああ、彼女の様子を知らせて、彼女の魂の居る場所を教えてください。魔術師が来てくれたら。」</p>
<p>38 帝は玄宗と楊貴妃の物語から、更衣との尽きぬ愛情を恨めしく思う「絵に描ける〜」(1572 / 一七⑦ / 三五)</p>	<p>絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いと匂ひ少し。太液の芙蓉、未央の柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひは麗しうこそありけめ、懐かしうらうたげなりしをおぼし出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかはさむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほど、尽きせず恨めしき。</p>	<p>とても腕のいい芸術家が自分の技術を駆使してキューフィーの絵を書いたとしてもそれは結局筆と絵具の仕事で、そこにはこれっぽっちも命は無い。詩人は言う。キューフィーの美貌は宮殿の湖の女神のようだった。もしくは、彼女はヤンの宮殿のナムラー（鶯の一種）のようだった。しかし絵のヤン・キューフィーはただの絵具と筆で、その絵には中国人の見せかけの輝きだけ。 しかし、あの亡くなった女性の面影と甘い話し方を思い出すと彼女は花にも鳥たちの甘い声とも比べられないと皇帝は気づいた。何度も悔しいと思うことは、運命はなぜ、毎日朝に夜に一つのことしか祈ってこなかった人々の願いをかええないのか。その者たちの願いはこうだった。二人が共通の翼をもつ一対の鳥であつたら、ふたりが共通の枝を持つ一対の木であつたら、というものだった。</p>

39 帝の心を踏みにじるように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る「風の音〜」(1615 / 一七⑩ / 三五)	風の音、虫の音につけて、もののみ悲しうおぼさるるに、弘徽殿には久しく上の御局にも参上りたまはず、月のおもしろきに、夜ふくるまで遊びをぞしたまふなる、いとすさまじう、ものしと聞こしめす。このごろの御気色を見たてまつる上人、女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおしたち、かどかどしき所ものしたまふ御方にて、ことにもあらずおぼし消ちて、もてなしたまふなるべし。	小鳥のさえずり、鈴虫の鳴き声で彼は悲しみ気持ちは沈む。そのうえ、ずっと前から皇帝が自分の部屋に入れていないカキダンがやってきて月明かりの夜に遅くまで歌を歌っている。そのせいで彼の心の悲しみはもっとひどくなる。彼の様子をみてそこに居る侍女や廷臣たちも悲しくなる。しかしカキダンは非常に傲慢だった。大変つけあがった態度で、何もなかったような風で皇帝に接した。
40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しみ歌う帝は、眠ることすらできない「月も入りぬ〜」(1660 / 一八③ / 三六)	月も入りぬ。 雲のうへも涙にくる秋の月いかですむらん浅茅生の宿 おほしめしやりつつ、燈火（ともしび）をかかけ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目をおぼして、夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。	月も消えかかっていた。皇帝はキューフィーの母と彼女の住まいを思い出した。そこには、とげだらけの茂みがあった。彼は月の詩を口ずさみだした。どんな悲しみと共に彼は月の消えていくのを見たのだろうか。「なぜなら雲の上に住む私たちもそれが消えていくのを見て泣き出したから」彼は松明の火を強くして、黙って座っていた。ついに、見張り番の鐘の音が聞こえた。それは雄牛の星の時が来たということだった。つまり、夜の1時だった。もうそこに居続けたら人々の目につくので、立ち上がり彼は自分の部屋へ戻っていった。しかし、彼は眠れず、夜明けまで起きていた。
41 帝は政治まで疎かにしかねない悲しみの中で食事も召し上がらない「朝に起き〜」(1693 / 一八⑦ / 三六)	朝に起きさせたまふとても、「明るも知らで」とおぼし出づるにも、なほ朝政はおこたらせたまひぬべかめり。ものなどもきこしめさず。朝餉の気色ばかりふれさせたまひて、大床子の御膳などは、いと遙かにおぼしめしたれば、陪膳にさぶらふ限りは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。すべて、近うさぶらふ限りは、男女、いとわりなきわざかな、と言ひ合はせつつ嘆く。	彼はあの人あの詩の一節を思い出した。その意味はこうだ。「彼女は気づくことができなかった。金色の朝日が彼女の窓をノックしていることを」皇帝は毎朝の支度が全くできないようで、一粒のご飯も口にできなかった。テーブルに飾られた食事に向きもしない！皇帝のこの可哀そうな様子に御付きの者や料理人は困惑した。互いに内緒話を始めた。私たちの仕事は全く無駄になっている。
42 帝に奉仕する者たちも政道放棄を嘆き楊貴妃の例まで引合いに出る「さるべき契〜」(1731 / 一八⑩ / 三七)	「さるべき契こそおはしましけめ、そこらの人の譏り、恨みをも憚らせたまはず、この御ことにふれたることをば、道理をも失はせたまひ、今はたかく世の中のことをも、思ほし捨てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなり」と、人の朝廷の例までひき出で、ささめき嘆きけり。	彼らは皇帝は何か無駄な約束を守っているのだと思っていた。国民のあいだでどんな噂がたっているのか気にもせずに、彼は憂鬱で考え込むのに忙しかった。その結果として、国の政ごとに彼が集中していないとまた噂が始め、またもやこのような不注意が外国でどんな結果をまねいたか言われ始めた。
43 若宮参内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵「月日経て〜」(1762 / 一九② / 三七)	月日経て、若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならず、清らにおよすけたまへれば、いとゆゆしうおぼしたり。 明る年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしうおぼせど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふくおぼし憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、「さばかりおぼしたれど、限りこそありけれ」と、世人も聞こえ、女御も御心おちみたまひぬ。	このようにして何か月かが過ぎた。ついに、ある日幼い皇子が宮廷に入った。この時は彼の顔は晴れやかになった。彼のまたとない美しさを見て皇帝の心は晴れた。来春は国の後継者が発表になる予定だった。皇帝の心はこの皇子に夢中になり、上の皇子を無視してこの幼い皇子を皇太子にしようと思い始めた。しかし宮廷に皇帝のこの好みに賛成する者は誰もいなかった。皇帝は、国民がこの皇子を認めないかもしれないと思った。そうなるこの子の名が上がるどころか、この子を危険にさらすことになるかもしれない。だから彼は自分の心の思いを完全に秘密にした。よって人々は皇帝を褒めて言った。「皇帝はあの少年をひどく愛しているが、それでおろかになるほどではない。」宮廷の他の高位の女性たちもこれで少しは静かになった。
44 祖母君は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去「かの御祖母〜」(1805 / 一九⑥ / 三七)	かの御祖母北の方、慰む方なくおぼしづみて、おはすらん所にだに尋ね行かんと願ひたまひしるしにや、つひに亡せたまひぬれば、またこれを悲しおぼすこと限りなし。御子六つになりたまふ年なれば、このたびはおぼし知りて恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れ睦びきこえたまへるを、見たてまつりおく悲しびをなむ、返す返すのたまひける。	幼い皇子の祖母は以前と同じように悲しみ、一人ぼっちだった。亡くなった娘の魂を探しに行きたくてどうしようもなくなった。そしてある日彼女の目も閉じられた。彼女の死の報で皇帝は酷い衝撃を受けた。この時幼い皇子は6歳になっていた。だからこの不幸を理解するのに時間はかからなかった。彼もしくしく泣き出した。自分を大変かわいがって育ててくれた祖母を一目みるために皇子は送られた。そこで目にしたことを彼はその後何日も泣きながら話し続けた。
45 若宮七歳の読書始めの後は、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服「今は内裏に〜」(1844 / 一九⑩ / 三八)	今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば、読書始めなどせさせたまひて、世に知らず聡うかしこくおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧ず。「今は誰も誰もえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、仇、敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。	その後は王宮に住むことになった。7歳になると勉強が始まった。とても勉強ができるのを見て父親は驚いた。皇帝はもう誰もこの子に嫌がらせをしないだろうと考えた。彼はその子をカキダンや他の女性のところに一緒につれていくようになった。そして彼女たちに言った。「この子の母はこの世にいない。君たちはこの子に優しくしてくれるね。」このようにして幼い皇子は王宮の中を行ったり来たりし始めた。もっとも冷酷な兵隊や有名な敵でもこの子を見るとみんな微笑む。カキダンもその子を自分どころから追い出さなかった。
46 若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音曲にも秀でる超人さを発揮「女御子たち〜」(1904 / 二〇② / 三九)	女御子たち二所、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしう恥づかしげにおはすれば、いとをかしようちとけぬ遊びぐさに、誰も誰も思ひきこえたまへり。わざとの御学問はさるものにて、琴、笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続けば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。	彼女には二人の娘がいたが、どちらも下の皇子のように美しくも上品でもなかった。彼は宮廷の女性たちと遊んでいた。皇子はとても美しく、そして内気だった。だから女性たちはこの子と遊ぶのがとても楽しかった。皇子とは他の者たちも楽しく遊んだ。勉強も一生懸命していた。彼は琴の甘い調べを空に響かせた。もし私が彼の長所を全部あげたら、あなたはきっと押しつぶされそうになるだろう。

47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を觀て不思議がる「そのころ〜」(1955 /二〇⑥ /三九)	そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こしめして、宮の内に召さんことは、宇多の帝の御誠あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館につかはしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人驚きて、あまたたび傾きあやしむ。「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷の固めとなりて、天下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。	そのころ朝鮮の人々が王宮を訪れた。その中に古い師や予言者もいた。皇帝は彼らを宮廷には呼ばなかった、なぜならウダ帝の時代からの決まりがあったのだ。王宮には誰も外国人をいれてならないと。しかし彼はこっそり幼い皇子を彼らのところに送った。法務大臣が彼を連れてそこへ行き、自分の息子だと紹介した。古い師は皇子の手相をみた。手相をよみながら何度も首をかしげていた。あたかも皇子の手相をみてとても驚いているかのようにだった。彼は言った。「この子の相によれば、将来王になるでしょう。もし運命の相が良くであれば、皇帝となるでしょう。しかしこの子の国には騒動や災難の兆候が見えます。政府の上層部役人や国の相談役の地位に就いたとしても良い兆候は見えません。なぜなら、この子は国に従わないからです、先にも言いましたが。」
48 博識の右大弁と高麗人が漢詩を作り交わし若宮も興深い詩句を作る「弁も、いと〜」(2019 /二〇⑩ /四〇)	弁も、いと才かしこき博士にて、言ひ交したることも多し、いと興ありける。文など作りかはして、今日明日帰り去りなるとするに、かくありがたき人に対面したる喜び、かへりては悲しがるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、皇子もいとあはれる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたてまつる。朝廷よりも多くの物たまはず。おのづからことひろごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかとおぼし疑ひてなむありける。	大臣はとても頭がよく、知識も豊富で、才能のある人物だった。彼は古い師と興味深い話をした。詩や文学の様々な分野について話した。古い師は短い演説をうった。その意味はこうだ。「私は帰国も近い時期にこのような学識ある方にお会いできる幸運を得て嬉しいです。ここからおいとまするのは悲しいのですが、ここからとても影響をうけて帰途につきます」幼い皇子は短い詩を贈った。それを聞いて古い師はとても喜んだ。彼は皇子をたいそうほめたたえ、たくさんの贈り物をした。そのお返しに国庫より皇帝が高価な贈り物を贈った。しかし、このことはすべて秘密にされていたのだが、どういうわけか、上の皇子の母方の祖父の耳にはいつてしまった。彼は法務省の大臣(右大臣か左大臣?)だった。彼は皇帝を疑いだした。
49 帝は若宮を臣籍降下させ朝廷の補佐役にと決めると学問に励ませる「帝、かしこき〜」(2075 /二一⑤ /四〇)	帝、かしこき御心に、倭相を仰せておぼしよりにける筋なれば、今までこの君を親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけりとおぼして、無品親王の外戚の寄せなきにてはただよはさじ、我が御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなん、行く先も頼もしげなめることとおぼし定めて、いよいよ道々の才を習はさせたまふ。	その後皇帝は地方の古い師を呼び、古いをさせはじめた。皇帝は言った「幼い皇子には皇太子にするのをやめておいたほうがよいような相がみえる」この問題について、皇帝は大変思慮深い判断されたと皆が口をそろえた。皇帝は心に強く決めていたことがあった。それは、臣下たちの応援を得るまでは、もしくは、母方の家系からだれか影響力のある協力者が出るまでは、皇子を皇太子にするぞ宣言して彼を騒ぎの渦中に陥れることはしないと。彼は心の中で言った。「私の力も怪しいものだ。私にできる最上のことと言えば、私の所から彼が国の上級の役人の監督役になれるようにするくらいだ。」こんな風に彼は皇子の将来を決定し、彼の教育にとっても力を入れ始めた。皇帝は学問の全領域に精通するように教育したかった。
50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断「際ことに〜」(2120 /二一⑩ /四一)	際ことにかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば、世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこき道の人に勤へさせたまふにも、同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべくおぼしおきてたり。	学問の修得に皇子は並はずれた才能を発揮した。その子をこのような一般的な環境に置いておくのを不適切だと皇帝が思うほどだった。不ぞして、もし自分が彼を皇太子にしたら、彼は大変な不幸に見舞われるだろうということも分かった。だから彼は星や星座や月の動きに特別に精通している古い師の助言を求めた。そんな古い師たちは口をそろえて言った。皇子を源(ゼン)の一族の一員にした方が良いと。
51 更衣が忘れられず世を疎ましく思う帝に、先帝の四の宮の噂が届く「年月にそへ〜」(2147 /二一⑬ /四一)	年月にそへて、御息所の御ことをおぼし忘るるをりなし。慰むやとさるべき人々(大島本「人々を」)参らせたまへど、なずらひにおぼさるるだにいとかたき世かな、と疎ましうのみよろづにおぼしなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします。	そのようになった。ゆっくりと時が過ぎたが、皇帝は亡くなった妃のことが忘れられなかった。その頃王宮には、皇帝の心を慰めるためにたくさんの美女が連れてこられたが、皇帝は誰にも見向きもしなかった。なぜなら、彼が無くした宝石に匹敵する者はだれもいなかったから。その頃、ある女性の美しさの評判が聞こえてきた。彼女は前帝の4番目の娘だった。
52 典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏上し帝の気を引く「母后世になく〜」(2173 /二二② /四一)	母后世になくかじつききこえたまふを、上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「亡せたまひにし御息所の御容貌に似たまへる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、後の宮の姫宮こそ、いとおぼえて生ひ出でさせたまへりけれ。ありがたき御容貌人になん」と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねむごころに聞こえさせたまひけり。	彼女の母、つまり皇后は彼女をとても大切に育てたとされている。皇帝の後宮のある侍女がその前帝にお仕えしていた。彼女は皇女を知っていた、幼少のころから彼女を知っていた。最近も時々彼女を遠くから見ているものだった。その侍女は言った。「私は3つの宮廷に仕えましたが、亡き妃ほどの美女を今日まで見たことがなかった。もしも彼女と比べられるとしたら、あの皇女しかいません。彼女もとても美しいです。」皇帝は彼女の話に非常に注意深く聞いた。
53 帝を巡る女たちの怖さを言う四の宮の母が死ぬと、入内の道が開く「母后、「あな〜」(2233 /二二⑧ /四二)	母后、「あな恐ろしや、春宮女御のいとさがなくて、桐壺更衣の、あらにははかなくもてなされにし例もゆゆしう」と、おぼしつみで、さすががしうもおぼしたたざりけるほどに、后も亡せたまひぬ。心細きさまにておはしますに、「ただ我が女御子たちの同じつらに思ひきこえん」と、いとねんごころに聞こえさせたまふ。	皇后である母親がこの噂を耳にして恐怖に震えた。なぜなら彼女は、カキダンが亡き妃にどんな酷いことをしたのか知っていたから。彼女ははっきりとは言えなかったが、どうにか言い訳をして皇女を宮廷に送る話を進めなかった。しかしある日突然彼女は亡くなってしまった。皇帝は皇女が非常に悲しみにくれ、可哀そうな様子なのを知って彼女の所にお見舞いの伝言を送った。これからは君は自らを皇帝の娘、皇女と思うようにしなさいと伝言した。

54 不思議なほど更衣に似る四の宮は周りに押され入内し藤壺と称する「さぶらふ人々〜」(2264 / 二二② / 四二)	さぶらふ人々、御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、かく心細くておはしまさんよりは、内裏住みせさせたまひて、御心も慰むべくなどおぼしなりて、参らせたまへり。藤壺と聞こゆ。げに御容貌ありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる。	皇女の御付きの者、後見人そして彼女の兄弟である皇子ハイヨ・ブコヨネは、王宮の賑わいで彼女の心もぎれるだろうと考えた。少なくともこんな悲しみでいっぱいの方がよいかとこのほうが絶対良いだろう。だから、みんなは彼女を王宮に送った。彼女は藤壺(wisteria tub)の宮殿に住んでいた。そしてその名前前で彼女は知られていた。皇帝は彼女を見て、あの亡き妃にかなり似ていることが分かった。
55 藤壺は皇女の身ゆえに誰に気兼ねもなく、帝の寵愛もしだいに移る「これは人の〜」(2295 / 二三② / 四三)	これは人の御きはまさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけばりてあかぬことなし。かれは、人の許しきこえざりしに、御心ざしあやしくなりしぞかし。おほし紛るとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなおほし慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。	彼女はとても高い家系の出だったので、王宮の誰もが喜んで彼女を迎え入れた。そしてみんなはどんなことでも彼女の自由にさせた。それとは逆に、亡き妃が皇帝の愛情とは真逆の仕打ちを受けたのは、王宮が彼女を受入れようとしなかったからだった。亡き妃に対する皇帝の愛情は絶対に薄れることはなかった。時々この新しい王女のことを思い出してかなり慰められたとしても、彼の人生の流れは同じように味気なく、沈んでいた。
56 源氏の君は常に父帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見する「源氏の君は〜」(2327 / 二三⑤ / 四三)	源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方は、え恥ぢあへたまはず。いづれの御方も、我人に劣らむとおぼいたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うち大人びたまへるに、いと若うつくしげにて、せちに隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。	源の一族で、皇子の名は源氏となった。彼はいつも皇帝と一緒にだった。皇帝の部屋に行き来する女性たち全員とかれはとても懇意になった。だから皇帝の部屋に毎日呼ばれる女性に対して恥ずかしがる必要もなかった。女性たちが源氏に好かれるように競争しはじめたのも無理はなかった。彼がいろいろな褒め言葉を送る女性もたくさんいたが、その振る舞いのほとんどは年上に対するものだった。新しく来た皇女だけが美しく若かった。彼女は自分と皇子の目につかないようにしていたかったが、二人は何度も出くわしてしまった。
57 三歳で母と死別した源氏の君は、母に生き写しだという藤壺を慕う「母御息所も〜」(2370 / 二三③ / 四三)	母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり」と典侍の聞こえけるを、若き御心地にとあはれと思ひきこえたまひて、つねに参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。	皇子には自分の母親の記憶がなかったが、ある侍女が皇子に母親の見目形がこの皇女にかなり似ていると教えた。その言葉は皇子の中の子供心をひどく揺さぶった。皇女のほうに彼は傾いていったそしていつも彼女の近くにいるようになった。
58 帝は藤壺と源氏を愛し、更衣の形代である藤壺に源氏は好意を示す「上も、限りなき〜」(2396 / 二三① / 四四)	上も、限りなき御息ひどちにて、「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべき心地なむする。なめしとおぼさで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどは、いとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも、似げなからずなん」など聞こえつけたまへれば幼心地にも、はかなき花、紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。	ある日、皇帝は皇女に言った。「彼に冷たく接してはいけない。君に寄って来るのは、君が母親ににていると聞いたからだ。彼の無礼を気にしないで。彼をかわいがってください。君の顔や表情、見目形は彼の母親になれるほど似ている。」皇子はまだ少年だったが、皇女的美貌に魅せられてしまった。彼は愛に魅了されることを初めて経験した。
59 弘徽殿と藤壺が険悪な中、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃「こよなう〜」(2433 / 二四① / 四四)	こよなう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿女御、またこの宮とも御仲そぼそぼしきゆゑ、うちそへて、もとよりの憎さもたち出でて、ものしとおぼしたり。世に類ひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほにははしきはたとへん方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとりどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。	カキダンはこの皇女を一度も優しい目で見なかった。源氏に対する昔の敵対心がまた湧いてきた。彼女の子供はまたとなく美しいと思われていた。しかし源氏の前ではその影も薄い。彼はとても愛らしかったので、みんなは、彼をヒカル源氏、もしくは優しく美しい源氏の名で愛で、呼んだ。藤壺の皇女を称賛する者も多く、皆彼女を優しく美しい皇女という名で呼んだ。
60 光源氏は十二歳で兄東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う「この君の〜」(2483 / 二四⑤ / 四四)	この君の御童姿、いと変へまうくおぼせど、十二にて御元服したまふ。居起ちおぼしいとなみて、限りあることに、事をそへさせたまふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式、よそほしかりし御響きにおとさせたまはず。所々の饗など、内蔵寮、穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなることぞ、ととりわき仰せ言ありて、清らを尽くして仕うまつれり。	このように美しい男の子に男性の服を着せるのはみんな恥ずかしいように感じたが、皇子は12歳になったので、儀式の時間がきた。皇帝は大変熱心に準備を整えさせ、決まりよりもかなり盛大に執り行われた。前年南の部屋で皇太子の儀式があったが、それにまさるとも劣らなかった。この機にあちこちでごちそうも供される予定だった。それと出納長と穀物調達の実行者も彼が自らやった。彼は責任者たちが間違いを起こさないとも限らないと疑っていた。行事の全行程は予定通りにつづがなく終了した。
61 清涼殿で左大臣が光源氏に冠を被せ、帝は更衣がいたらと感極まる「おはします〜」(2537 / 二四⑩ / 四五)	おはします殿の東の廂、東向きに椅子立てて、冠者の御座、引き入れの大臣の御座、御前にあり。申の時にて源氏参りたまふ。みづら結びたまへるつらつき、顔の匂ひ、さま変へたまはむこと惜しげなり。大蔵卿、蔵人仕うまつる。いと清らなる御髪をそぐほど、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばとおぼし出づるに、堪へがたきを、心強く念じかへさせたまふ。	儀式の行事は皇帝ご自身の宮殿の東の敷地で執り行われた。王座は東向きに置かれ、儀式を受けるものと儀式を与える者の座席は前にあった。源氏は昼間の3時ちょうどに到着した。巻き毛のために彼はとても美しく見えた。儀式を与える者は、彼を黄色い日もで結ばねばならなかった。彼は心の中で、もうすぐこの見目形も変わってしまうのだと後悔しだした。蔵の事務官も彼の髪を毛を儀礼用の刀で切らねばならないのを苦しく思った。皇帝は黙って座り、すべてを見ていた。彼は心の中で思った。もし今この子の母が生きていたら、この機が嬉しくてたまらなかつたら。しかし彼はこの考えをすぐさま打ち消した。
62 加冠の儀の後、光源氏の拜舞にみならず感涙し帝も更衣を想い感無量「かうぶり〜」(2580 / 二五① / 四五)	かうぶりしたまひて、御休み所にまかてたまひて、御衣奉りかへて、おりて拝したてまつりたまふさまに、皆人涙落としたまふ。帝はた、ましてえ忍びあへたまはず、おほし紛るるをりもありつる昔のこと、とりかへし悲しくおぼさる。いとかうきびはなるほどは、あげ劣りやと疑はしくおぼされつるを、あさましうつくしげさ添ひたまへり。	儀礼が終わるとすぐ源氏は自分の家へ行った。男性の服装で庭に着き、祈りの踊りを舞った。彼は大変優雅に舞ったので、みんなの目に涙があふれた。この事で皇帝の我慢していた悲しみがまた昔を思いだして湧き上がった。人々は子供の服を脱いだら彼の美しさは亡くなってしまうだろうと思っていた。しかし逆に、男性の服を着た彼の美しさはさらに輝きを増した。
63 左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする「引き入れの〜」(2623 / 二五⑥ / 四六)	引き入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしたまふ御娘、春宮よりも御気色あるを、おぼしわづらふことありける、この君に奉らむの御心なりけり。内裏にも、御気色たまはらせたまへりければ、「さらば、このをりの後見なかめるを、添ひ臥しにも」と、もよほさせたまひければ、さおぼしたり。	左大臣が彼に儀式をした。彼には一人娘がいた。皇太子と娘の婚約を考えていた。皇太子と娘が会う機会もあった。しかし源氏を目にして、彼女の父親はその関係を反故にして、娘の結婚を源氏とさせたいと考えだした。彼は皇帝にこの話をした。皇帝はこの話を大変喜んだ。なぜなら、源氏のために彼はこのような影響力のある関係者を欲していたから。

64 祝宴で左大臣から娘葵の上との結婚を仄めかされ光源氏は恥じらう「さぶらひに〜」(2658 / 二五⑨ / 四六)	さぶらひにまかでたまひて、人々大御酒などあるほど、親王たちの御座の末に、源氏着きたまへり。大臣気色ばみきこえたまふことあれど、ものの慎ましきほどにて、ともかくもあへしらひきこえたまはず。御前より、内侍、宣旨承り伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御祿のもの、上の命婦取りてたまふ。白き大柱に御衣一領、例のことなり。	宮廷の人々が集まり、仲良く杯を開けだした。源氏も来て、皇子たちの間に座った。左大臣も来て、彼の耳になにか囁いた。源氏の顔は恥ずかしそうに赤くなり、何も答えられないようだった。その時、皇帝の使いがやってきて、大臣に言った。皇帝様が緊急にお呼びです。彼が王座の前に到着すると、後宮のひとりの女性が彼の前に大きな白い服と女子の服を置いた。儀式を与えた者の資格として、彼は源氏が子供の頃に来ていた衣服を持つ権利があった。
65 左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拜舞する「御盃のついで〜」(2703 / 二五⑩ / 四七)	御盃のついでに、 いとときなきはつもとゆひに長き世をちぎる心は結びこめつや 御心ばへありて驚かせたまふ。 結びつる心も深きもとゆひに濃きむらさきの色しあせずは と奏して、長橋よりおりて、舞踏したまふ。	その後、皇帝は自分の杯で彼に酒を進めた。酒を飲んだ後、皇帝は詩を聞かせた。その意味はこうだ。皇子の髪に糸を結ぶのが縁起が良く、二つの家系を結ぶ印となりますように。返歌で大臣は言った。 黄色い糸が萎れてしまうその時までこの関係が壊れることはない。その後、彼は階段を下り、庭で舞を舞った。
66 左大臣や親王たちは祿を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大「左馬寮の〜」(2730 / 二六④ / 四七)	左馬寮の御馬、蔵人所の鷹括えてたまはりたまふ。御階のもとに、親王たち上達部連ねて、祿ども品々にたまはりたまふ。その日の御前の折櫃物、籠物など、右大弁なん承りて仕うまつらせける。屯食、祿の唐櫃どもなど所狭きまで、春宮の御元服のをりにも数まさされり。なかなか限りもなくいかめしうなん。	そこで彼はこの機に国の馬舎と動物園から源氏に贈られた馬と鷹を目にした。階段の下には列になって臣下や皇子が贈り物を頂くために立っていた。彼らにはたくさん賞が贈られた。その日、皇帝のご命令に従い右大臣はかごいっぱい果物を分け与えた。贈り物やバナナのかごがあまりにもたくさんあったので、そこは人が行き来するのさえ難しかった。このような意気込みは皇太子の儀式の行事の時も目にしなかった。
67 元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚「その夜〜」(2768 / 二六⑥ / 四七)	その夜、大臣の御里に、源氏の君まかでさせたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづききこえたまへり。いとときひはにておはしたるを、ゆゆううつくしと思ひきこえたまへり。女君は、少し過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥づかしとおぼいたり。	その夜、源氏は大臣の家に行った。そこで彼の婚約の義が決まりにしたが行われた。人々は、源氏はまだ子供っぽいから優しいだろうと思っていたが彼の美貌はみんなを魅了した。しかし、花嫁は彼をただの子どものように感じ、自分が彼より4つも年上であることを恥ずかしく思った。
68 左大臣は帝の信頼に加えて光源氏まで加わり右大臣家を凌ぐ勢いに「この大臣の〜」(2800 / 二六⑩ / 四八)	この大臣の御おぼえいとやむことなきに、母宮、内裏の一つ后腹になんおはしければ、いづ方につけてもいと華やかなるに、この君さへかくおはしそひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき、右大臣の御勢は、ものにもあらずおされたまへり。	該当箇所はナシ
69 左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う「御子ども〜」(2833 / 二七① / 四八)	御子どもあまた、腹々にものしたまふ。宮の御腹は蔵人少将にて、いと若うをかきき、右大臣の、御仲はいとよからねど、え見過ぐしたまはで、かしづきたまふ四の君にあはせたまへり、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになん。	該当箇所はナシ
70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠「源氏の君は〜」(2863 / 二七④ / 四九)	源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえしたまはず。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、類ひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな、大殿君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心一つにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。	皇帝は源氏を自分の目の届くところに起きたかった。だから彼のための別の住まいは用意されなかった。皇子は心の中で、藤壺の皇女を飽くことなくほめたたえ、いつも彼女のような人々と一緒にいたがった。しかし、残念なことに！彼女と同じような他の人はいなかった。彼の婚約者アオイの上を人々は口ぐちに褒めたが、彼は彼女に何の上品さも感じられなかった。宮廷のこの若い女性は、彼の未熟な頭脳に完全に住み着いてしまった。そしてこの制限された縁は彼を苦しませた。
71 宮中での光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う「大人になり〜」(2912 / 二七⑨ / 四九)	大人になりたまひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れたまはず。御遊びの折々、琴、笛の音に聞こえ通ひ、ほのかなる御声を慰めにて、内裏住みのみ好ましようおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日など、絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は、幼き御ほどに、罪なくおぼしなして、いとなみかしづきこえたまふ。御方々の人々、世の中におしなべたらぬを、選(え)り整えすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなおほなおぼしいたつく。	源氏は男性となったので、前のように後宮に自由に出入りできなくなった。しかし何かの行事の時は皇女の甘い声を聴くことができた。琴に合わせた歌声が彼の耳に甘く響いた。そのような時、彼はなぜ自分は男に生まれたのかと腹が立つ。5, 6日ごとに彼は婚約者の家に行き、2, 3日滞在する。彼の舅はこの不作法を彼がまだ子供なせいだと思っている。だから彼らはこれっぽっちも不安にならないし、いつも心から彼を歓迎する。彼が来ると、そこの選りすぐりの上品な少年が彼に会いに集められる。彼を楽しませるために大変な思いでさまざまな遊びが用意される。
72 後の二条院を修築し、そこで理想の女性と暮らしたいと望む光源氏「内裏には〜」(2976 / 二七⑭ / 五〇)	内裏には、元の淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々、まかで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ。元の木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りのしる。かかる所に、思ふやうならむ人を据えて住まばやとのみ、嘆かしうおぼしわたる。光る君といふ名は、高麗人のめできこえて、つけたまつりけるとぞ、言ひ伝へたるとなむ。	王宮で彼が暮らすためにシゲイサという名の部屋が与えられた。この部屋は彼の母親のものだった。彼の母に仕えていた者たちが彼に仕えるために御付きになった。 彼の母方の祖母の屋敷は荒れ果てていた。国の職人にその家を修復するように命令が出された。木々の配置やあたりの山の様子からその場所はとても素晴らしい場所だった。湖が広げられた。その他様々な修復がされた。その地を見て源氏の心は沈み、言った。「私の心に住んでいる人とこんなところに一緒に住めたらどんなに美しいだろう。」 朝鮮の予言者がこれに喜び彼に優しく美しいヒカルの名を与えたと言う者もいる。

●ウルドゥー語訳『源氏物語』「桐壺」データ

小見出し	原文（池田本校訂本文・伊藤鉄也作成）	ウルドゥー語訳（フサイン訳）
1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する「いづれの御時〜」（0001／五①／一七）	いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。	ある天皇の宮中に（いつの時代であったか知る必要はない）、衣装の間に仕える侍女たちのなかにひとり、天皇の寵愛を受けているひとがいた。彼女の位はそれほど高くなかった。そのため、自分こそが天皇のお目に止まりたいとひそかに願っていた宮殿の特別位の高い女たちはみな、この成り上がり者の娘に嫉妬し、嫌っていた。というのも、この女が彼女たちの夢の宮殿を粉々に打ち砕いたからであった。彼女よりも裕福でない、衣装の間で同輩だった普通の侍女たちがいたが、彼女はこの人たちに比べて高い地位を与えられた。
2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる「朝夕の宮仕〜」（0031／五④／一七）	朝夕の宮仕へにつけても、人の心をもみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあつくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかざればはれなるものに思ほして、人の譏りをもえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人なども、あいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おほえなり。	こうして彼女は宮廷における名誉を得たものの、絶えず嫉妬と悪意の餌食にならざるを得なかった。これらのささいな心配事に疲れ果て、彼女はまもなく健康を害し、常に憂鬱がちとなり、多くの時間を母親の家で過ごすようになった。しかし天皇は、健康でも快活でもない彼女にうんざりするどころか、なお一層優しく接するようになり、悪口を言う人びとのことなど全く気に留めなかった。このことは国じゅうに広まったばかりか、高位高官や宮廷人ですら、禍のもととなるようなこの愛に眉をひそめるようになり、
3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る唐土にも〜」（0073／五⑧／一七）	唐土にも、かかることの起こりにこそ、世も乱れ悪しかりけれと、やうやう天の下にも、あぢきなう人のもて悩むぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとほしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへの類ひなきを頼みにて、まじらひたまふ。	海を越えた国ではこうした出来事が騒乱や滅亡の原因になった、と互いにささやき合っていた。ほどなくして実際に国じゅうの人びとに不満が生まれ、中には（寵愛を受ける）彼女を明皇の愛人であった楊貴妃にたとえる者もいた。しかし主君の愛が庇護となり、誰も彼女をからかうような大それたことはしなかった。
4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活「父の大納言〜」（0103／五⑩／一八）	父の大納言は亡くなりて、母北の方なん、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたり世のおぼえ華やかなる御方々にもいたう劣らず、何事の気色をももてなしたまひけれど、とりたててはかばかしき後見しなければ、ことある時は、なほよりどころなく心細げなり。	彼女の父親は宮廷の相談役だったが、すでに亡くなっていた。母親は、父親が存命中は有力者であったことを常に忘れなかった。それゆえあらゆる困難にもかかわらず、彼女に両親が健在で裕福な女たちに施されるような養育をする手はずを整えた。もし後見人に影響力のある保護者がいたら、おそらくさまざまな事態にも容易に対処できただろう。ところが不運なことに母親はこの世でまったく孤立しており、何か災難が降りかかると、慰めと同情を求めることのできる相手が誰もいないことを痛切に感じるのだった。
5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する「前の世にも〜」（0136／六①／一八）	前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなるちこの御容貌なり。一の御子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君、と世にもてかしづききこゆれど、この御匂ひには並びたまふべくもあらざりければ、大方のやむごとなき御思ひにて、この君をば、私ものに思ほしかしづきたまふこと限りなし。	しかし、話は娘についてである。幾日かして彼女に皇子が生まれた。おそらく前世でふたりは強い愛の絆で結ばれていたであろう、国じゅうを探しても類を見ない美しい子だった。待つ期間、天皇はやっとのこと我慢したのであった。時が訪れてその子が宮廷に差し出されると、天皇は、この子の美しさについて伝え聞いていた噂には少しの誇張もない、と感じた。彼の最年長の皇子は、右大臣の娘である弘徽殿[kokiidin]皇妃のお腹から生まれた。その皇子はまるで皇太子のように敬われていたが、新たに生まれた皇子ほど美しくはなかった。そのうえ、新生児の母に対する天皇の並はずれた愛も、この子が彼の特別な子だということを表していた。
6 帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立坊に疑いを抱く「はじめより〜」（0184／六⑦／一九）	はじめより、おしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑあることの節々には、まづ参上させたまふ、ある時には大殿籠り過ぎて、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽きかたにも見えしを、この御子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この御子のおたまふべきなめり、と一の御子の女御はおぼし疑へり。	不運にも、この子の母親の位は宮殿で天皇のお世話を任されていた宮廷人ほど高くはなかった。そのため、彼の愛や、自らを敬われるべき女性であると見せるために身につけていた外見の華やかさにもかかわらず、天皇は催し事だけでなく、重要な行事の時にも彼女を傍に置いておくため、かなりの厄介事に直面しなくてはならなかった。しばしば、朝になっても彼女を宿所に帰さなかったため、彼女は自分の気持ちは関係なしに、常に控えている女性たちの仕事もせざるをえなかった。これを見た弘徽殿皇妃は、もし特別の注意を払わなければ、天皇がこれほど目をかけている新たに生まれた皇子が、すぐにでも東の宮殿に移されるのではないかと、と危惧するようになった。
7 帝は弘徽殿女御を気遣うも桐壺更衣を寵愛し、更衣の気苦労は増す「人より先に〜」（0248／六⑬／一九）	人より先に参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおほしませば、この御方の御諫めのみぞ、なほ煩はしう、心苦しう思ひきこえさせたまひける。かしこき御陰を頼みきこえながら、おとしめ、疵を求めたまふ人は多く、我が身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。	しかし、自分は宿敵よりも勝っているとも感じていた。天皇は彼女のことも深く愛していたし、彼女の子宮からも皇子が産まれているのだ。天皇が新たな暮らしぶりに落ち着きのなさを感じていたのは、特に彼女がうるさく非難したであった。こうしてこの新しい愛人は天皇の特別な庇護を手に入れたが、彼女を辱めてやりたいと思うものも大勢いた。彼女は大量の名誉の雨を浴びることになったものの、あの方は幸せの素を与えてくれるどころか危険を生み出してしまった、と感していた。
8 更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける「御局は桐壺〜」（0288／七③／二〇）	御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふも、げにことわりと見えたり。参上りたまふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿のここかしこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎へる人の衣の裾埋へがたく、まさなきことあり。また、ある時には、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた心を合はせて、はしたなめわづらはせたまふ時も多かり。	彼女の宿所は宮殿の桐壺と呼ばれる区画にあった（そして彼女もその名前でも知られるようになった）。天皇の許への度重なる行き来に際して、彼女が前を通っていく部屋の女性たちが嫉妬するのは至極当然のことであった。しばしば、行き来が度を超えて増すと、彼女が通る道筋にある橋や廊下に思わす震え上るようなさまざまな仕掛けがされたり、お供をする侍女たちの服が台無しになってしまうような汚物が撒き散らされた。一度、誰かが玄関に鍵をかけてしまい、彼女は長いことあちらこちら難儀しなければならなかった。
9 帝は桐壺更衣への虐待を不憚に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す「ことふれ〜」（0344／七⑨／二〇）	ことにふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれと御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を、ほかに移させたまひて、上局にたまはず。その恨みましてやらむ方なし。	これらの厄介事は日増しに彼女を悩ませるようになり、天皇は彼女の苦痛を見るに堪えかねて、後涼殿[korodin]へ移した。彼女のために場所を工面するため、天皇は衣装の間の高官を外に移さなければならなかった。このようなことで、事態が改善されるはずもなく、彼は彼女の途轍もなく危険な敵を生み出してしまったのだった。

<p>10 若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる「この御子三つ〜」(0378 / 七⑩ / 二一)</p>	<p>この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮のたてまつりしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじうせさせたまふ。それにつけても、世の譏りのみ多かれど、この御子のおよすけもおはする御容貌、心ばへ、ありがたくめづらしきまで見えたまふを、えそねみあへたまはず。ものの心知りたまふ人は、かかる人も世に出でおはするものなりけり、とあさましきまで目を驚かしたまふ。</p>	<p>今や幼い皇子も三歳になった。衣着せの儀式が皇太子のものであるかのごとく盛大に祝われた。天皇の宝物庫や貢物の保管庫からあっと驚くようなさまざまな贈り物が差し出された。これにも多くの人が憤慨したが、子どもに対する敵意が生まれることはなかった。この子の日ごとに増していく美しさと魅力的な気質に皆が驚き、喜んでいたので。年老いた経験豊かな者の多くが、この悪い世にこのような子がどうして生まれたのか、と自らの驚きを白状するのだった。</p>
<p>11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出「その年の夏〜」(0439 / 八② / 二一)</p>	<p>その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず。年ごろ、常のあつしさになりたまへれば、御目馴れて、「なほ、しばし試みよ」とのみのたまはするに、日々に重りたまひて、ただ五六日のほどに、いと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたまつりたまふ。かかるをりにも、あるまじき恥もこそ、と心づかひして、御子をば留めたてまつりて、忍びてぞ出でたまふ。</p>	<p>この年の夏、天皇の愛人は大層ふさぎ込むようになった。家へ戻らせてくれるように何度も懇願したが、彼女の願いは決して聞き入れられることがなかった。まる一年がこうして過ぎていった。彼女が嘆願する度に、天皇はこう言った。「もうしばらく様子を見てみよ」。しかし彼女の容態は日増しに悪化し、五、六日経っても衰弱の一途をたどると、母親は彼女を解放してくれるよう、たいそう痛ましい嘆願書を宮殿へ送った。今でも、彼女に汚名を着せようと敵側が奇妙な行動に出る危険があった。そのため、彼女は皇子を残して密かに去ろうと決意した。</p>
<p>12 帝は絶え入らんばかりの桐壺更衣をご覧になるにつけ途方に暮れる「限りあれば〜」(0488 / 八⑦ / 二二)</p>	<p>限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかさを、言ふ方なく思ほさる。いと匂ひやかにうつくしげなる人の、いたう面痩せて、いとあはれとものを思ひしみながら、言に出でても聞こえやらず、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを、御覧するに、来し方行く末おぼしめされず、よろづのことを、泣く泣く契りのたまはずれど、御答へもえ聞こえたまはず、まみなどもいとたゆげにて、いとどなよなよと、我かの気色にて臥したれば、いかさまにとおぼしめし感はる。</p>	<p>天皇は、自分の意に反して、愛人を帰さなければならぬ時がきた、と察した。しかし、彼女が暇乞いもせずに黙って去り行くことに耐え切れず、急いで彼女の許へとやってきた。未だにこの上なく美しく魅力的に見えたが、顔はやつれやせ細っていた。何も言わずに、彼女は愛情に満ちた眼差しで天皇の方を見た。彼女は生きているのだろうか？彼女の眼の消え入りそうな輝きは、辛うじて生きていると言えるほど弱々しいものだった。過ぎたこと、今後過ぎゆくことすべてを一気に忘れて、彼女に千もの愛に満ちた名前呼びかけ、泣きながら幾千もの口づけをした。しかし彼女はまったく答えなかった。天皇の声も眼差しも彼女にはおぼろげにしか届かず、自分が床に伏しているのも覚えていないかのように朦朧としていたからだ。彼女がこのような状態にあるのを見て、天皇はどうしたら良いのか全く分からなかった。</p>
<p>13 輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する「輦車の宣旨〜」(0537 / 八④ / 二二)</p>	<p>輦車（てぐるま）の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえゆるさせたまはず。「限りあらむ道にも、後れ先だたじ、と契らせたまひけるを、さりともうち捨てては、え行きやらじ」とのたまはするを、女もいとみじと見たてまつりて、限りとて別る道の悲しきにかまほしきは命なりけりいとかく思ひたまへましかば」と息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながらともかくもならむを御覧じはてむとおぼしめすに、「今日始むべき祈りども、さるべき人々承れる、今宵より」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながら、まかでさせたまふ。</p>	<p>ひどく困惑し、心配しながら輿を呼んだ。しかし輿の中に彼女を横たえようとする、彼はそれを止めて言った。「いつかはだれもが必ず通る道を、独りでは通らないと、ふたりで誓ったではないか。どうして彼女を独りで行かせられようか」。</p> <p>愛人はこの言葉を聞くと最期の言葉を発した。</p> <p>「願っていた時がついにやって来ました。私は独りで行かなければなりません、こうして独りで行くことが私の幸せなのです」。</p> <p>こう、息も絶え絶えに消え入りそうな声でささやいた。この最期の言葉を発するために力がこみ上げたかのようだったが、ひと言ひと言が大変な苦しみと痛みで発せられたのだった。何があろうとも、天皇は最期まで彼女の傍に居たいと思っていた。しかし困ったことに、彼女のために最期の祈りを捧げる僧侶がすでに家へ派遣されていた。彼女は夜になる前に自分の家に到着しなければならなかった。そのため、天皇は仕方なくその女を行かせたのだった。</p>
<p>14 心塞がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる「御胸つと〜」(0608 / 九⑦ / 二三)</p>	<p>御胸つと塞がりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行き交ふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、「夜中うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。聞こしめす御心惑ひ、何事もおぼしめしわかれず、籠りおはします。</p>	<p>その夜、天皇は何とか眠ろうとしたが、息が詰まるような感覚を覚え、目を閉じることさえかなわなかった。夜通し、宮殿と愛人の屋敷の間を知らせが行き交っていた。初めから良い知らせはなかったが、深夜を過ぎてすぐに、天皇の使者があらへ到着すると家の中から嘆き悲しむ叫び声が聞こえ、調べたところ、今しがた天皇の寵愛を受けていた方が亡くなったと判明した、と通知をうけた。天皇はこれを聞くと、感情も動きもないまま、ただ何も理解していないかのように横たわっていた。</p>
<p>15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する「御子は〜」(0644 / 九⑩ / 二四)</p>	<p>御子は、かくてもいと御覧ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ、例なきことなれば、まかでたまひなんとす。何事があらむともおぼしたらず、さぶらふ人々の泣き惑ひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを、よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれに言ふかひなし。</p>	<p>天皇は幼少の皇子をこの上なく愛しており、離れたくないと思っていた。しかしこの出来事のあと、この子をどこか宮殿の外に置いたほうがよいと思われた。子どもは何か起きたのか理解していなかった。しかし、召使たちが皆嘆き悲しみ、自分の父である天皇がたえず泣いているのを見て、何か大変な不幸が起こったのだと察したのは確かだった。この子は、普通の別れですら人びとを悲しませるということに気付いていた。しかし、これは今までに見たこともないほどの嘆きと弔いのあり様だった。それで、これはただならぬ別れにちがいない、と思い至った。</p>
<p>16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒に泣き焦られる「限りあれば〜」(0684 / 一〇② / 二四)</p>	<p>限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、同じ煙にのぼりなん、と泣きこがれたまひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて、愛宕といふところに、いとかめしうその作法したるに、おはし着きたる心地、いかばかりかはありけん。</p>	<p>出棺時間になると、桐壺の母親は、娘の遺体から煙が立ちのぼったら、その傍らで自分にも火をつけて灰になると泣きながら言った。葬儀に参列するためにやって来ていた宮廷の女性たちとともに、母親も車に乗り込んだ。火葬の儀式は愛宕 [ataago] で盛大に執り行われた。</p>

17 気が動転している母は、火葬の現実も受け入れられず諦めきれない「むなしき〜」(0712 / 一〇⑤ / 二四)	「むなしき御骸 (から) を見る、なほおはするものと思ふが、いとかひなければ、灰になりたまはんを見たてまつりて、今は亡き人、とひたぶるに思ひなりなん」と、さかしのたまひつれど車よりも落ちぬべうまるびたまへば、さは思ひつかし、と人々てもわづらひきこゆ。	母親の愛情は熱く激しく、遺体を見ている間ずっと、桐壺は生きているのだ、と思っていた。遺体に火が付けられた時、彼女はやっと、これは自分の娘の死体なのだと気がついた。それまで分別のある話をしていたが、もがき苦しみ、乗物から落ちてしまった。一緒にいた女性たちは、互いに「やっとすべてわかったのね!」と言い合った。
18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくんだり、女御更衣たちは憎しみを増す「内裏より御使〜」(0741 / 一〇⑧ / 二五)	内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだにいはずなりぬるが、あかず口惜しうおぼさるれば、いま一階 (ひときざみ) の位をだに、と贈らせたまふなりけり。これにつけても、憎みたまふ人々多かり。	宮殿から天皇の布告者がやって来て、亡き愛人に第三の位が与えられたとの勅令を読み聞かせた。天皇は、なぜ最初から彼女に「常に控えている女性」の位を与えておかなかったのか、と後悔していた。それで今、彼女の位を一段上げたのだった。この栄誉が与えられることに不平を言う者も多かったが、
19 聡明な女房たちは桐壺更衣の美質を追想し、思慕の情をもって偲ぶ「もの思ひ知〜」(0775 / 一〇⑩ / 二五)	もの思ひ知りたまふは、さま容貌などのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりしことなど、今ぞおぼし出づる。さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねみたまひしか、人柄のあはれに情ありし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とは、かかるをりにやと見えたり。	それほどかたくなではない者の中には、彼女は間違いなく並々ならぬ美貌の持ち主であったと感じる者や、温和な性格で立ち居振る舞いがとても魅力的だったと思う者、あれほど素晴らしい女性を忌み嫌うなどそれこそ恥ずべきことだ、もし不公平に他の人たちに以上に重用されていなかったら、誰も何も言う余地はなかっただろう、と言う者もいた。
20 秋となり帝はただ涙の日々の中、弘徽殿女御は桐壺更衣を許さない「はかなく〜」(0809 / 一一① / 二六)	はかなく日ごろ過ぎて、後のわざなどにも、細かにとぶらはせたまふ。ほど経るままに、せむ方なう悲しうおぼさるるに、御方々の御宿直なども絶えてしまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほゆるしなうのたまひける。	天皇の命により服喪に定められた7週間は、たいそう盛大に挙行された。時はどんどん過ぎたものの、天皇は宮廷の女性たちから離れ、自分の時間を孤独のうちに過ごしていた。彼に仕える召使たちはひどく悲しんでいた。それは彼が昼夜、いつも泣いてばかりいたからだった。弘徽殿やその他の位の高い女性たちは未だに情け容赦なく言い回っていた。「天皇は、あの女の実しさに囚われていた時の愚かさでもって、あの女の思い出にも縛られ続けるのでしょうか。」
21 帝は若宮を恋しがり、野分だつ夕暮に鞍負命婦を更衣の里に遣はす「一の宮を〜」(0850 / 一一⑤ / 二六)	一の宮を見たてまつらせたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほしいでつつ、親しき女房、御乳母などをつかはしつ、ありさまを聞こしめす。野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりもおぼし出づること多くて、鞍負 (ゆげい) の命婦といふを遣はす。	時折、天皇は年長の皇子つまり弘徽殿の息子を呼び寄せてはいたが、そのせいで亡き愛人の息子にも会いたいという欲望の火がさらに勢いを増すのだった。そのため、信頼できる召使、特に自身の年老いた乳母を遣わし、息子の成長と養育に関する正確な知らせを届けさせていた。秋が訪れていた。風の冷たさが体に触れ始めていた。そんな折、思い出の嵐が押し寄せてきて、彼は矢筒持ちの娘に手紙を持たせて亡き愛人の家に送った。
22 帝は夕月夜の美しい折に催した管弦を思い出し、更衣の面影に浸る「夕月夜の〜」(0877 / 一一⑨ / 二六)	夕月夜のをかしきほどに、出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなるものの音を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりし気配容貌の、面影につと添ひておぼさるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。	月明かりで澄み切った美しい夜だった。手紙を送った後、長い間この光景を眺めていた。まさにこのような時に、音楽を聴きたいと思ったものだった。そっと耳元でささやかれた彼女の言葉が、不思議な旋律にどのように溶け込んでいたかを思い出した。そして、彼女のすべてが特異であったことも思い出した。顔、物腰、姿かたちすべてが。彼は「暗闇のなかでは、現実のものでさえも夢以上に現実味があるものではない」という趣旨の詩を思い出した。そして、あの過ぎ去りし夜ごとの夢のような暮らしに似たおぼろげな何かを手に入れたいものだ、と思うのだった。
23 命婦は亡き更衣の邸に入り、八重葎で荒れた庭には月影が差し込む「命婦かこ〜」(0907 / 一一⑫ / 二七)	命婦 (みょうぶ) かこにまうで着きて、門引き入るより、気配あはれなり。やもめ住みなれど、一人の御かしづきに、とかくつくろひたてて、めやすきほどにて過ぐしたまへる、闇にくれて臥しつづみたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎 (やへむぐら) にもさはらずさし入りたる。	手紙を持って行った娘は屋敷の門にたどりついた。門を開けると、奇妙な光景を目にした。年老いた女性はもう長い間未亡人であったし、家の世話は桐壺に任されていた。しかし彼女亡き後、母親は落胆していたので、屋敷のことには何も手を付けていなかった。至るところに背の高い草が生い茂っていた。そして秋の強い突風が、その荒廃を一段と強めていた。サボテンの灌木が、月明かりだけがその中に光を差し入れることができるほどびっしりと生い茂っていた。
24 更衣の母は命婦と対面し感極まり涙し、命婦は帝の仰せ言を伝える「南面に〜」(0937 / 一二② / 二七)	南面 (みなみおもて) に下ろして、母君もとみにえものものたまはず。「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の、蓬生の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなむ」とて、げにえ堪ふまじく泣いたまふ。「『参りてはいとど心苦しう、心肝もつくるやうになん』と、典侍の奏したまひしを、もの思うたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたうはべりけれ」とて、ややためらひて、仰せ言伝へきこゆ。	使いの娘は玄関で停まった。初め、母親は歓迎の言葉も見つけられなかった。しかし、それからすぐに我に返って言った。「ああ。私はこの世で長いこと、人生の重荷を負ってきました。あなたのような美しい使者が、屋敷への道を塞いでいる露の降りた灌木の中を通って来なければならなかったと考えるだけでも、私には耐えられません。そう言うと、思わず泣き出してしまった。矢筒持ちの娘が言った。「ここへ来た宮殿の侍女のひとりが、天皇のもとへ行行って、こちらの様子を見て胸が張り裂けそうになったと告げました。そして奥方様! 私と同じ気持ちに包まれています。」しばらくためらったあとで、天皇のこの伝言を届けた。
25 命婦は帝の心意を更衣の母に伝え、涙にむせぶ帝からの手紙を渡す「『しばしは〜』」(0987 / 一二⑦ / 二八)	『しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひあはすべき人だになきを、忍びては参りたまひなんや。若宮のいとおぼつかなく、露けき中に過ぐしたまふも、心苦しうおぼさるるを、とく参りたまへ』など、はかばかしうも、のたまはせやらず、むせかへらせたまひつつ、かつは人も心弱く見たてまつるらむと、おぼしつづまぬにしもあらぬ御気色の心苦しさに、承りはてぬやうにてなむ、まかではべりぬる」とて御文たてまつる。	「しばらくの間、この頭の暗闇の中で夢の霧の中から外へ抜け出す道を探していた。しかし、よくよく考えてみても、幼い皇子がそのように物悲しく荒廃した屋敷で生活しているのは良くないと思う。あの子も一緒に連れて来てくれ。そう言いました。他にもお話されていましたが、混乱をきたしたお話で、ため息をつきながら懇願するようにお話していましたが。私にご自分の悲しみを隠そうとすることが、天皇にとって大変な苦勞になっているのだと感じ、話をすべて聞かずに宮殿を発ちました。そうそう、天皇が渡された手紙もあります。」

<p>26 帝からの文は、若宮と共に参内するようにと懇ろに促すものだった 「目も見え〜」（1043 / 一二⑬ / 二八）</p>	<p>「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなん」とて見たまふ。 「ほど経ば少しうち紛ることもや、と待ち過ぐす月日にそへて、いと忍びがたきはわりなきわざになむ。いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、もろともにはぐくまぬおぼつかなさを、今はなほ昔の形見にならずへものしたまへ」など、細やかに書かせたまへり。 宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれとあれど、え見たまひはせず。</p>	<p>母親は言った。「視力が弱ってしまっていて。ちょっと、明かりの下でこの手紙を見させてください。手紙にはこう書かれていた。「しばらくすれば思い出の光景もぼんやりしてくるだろうと思っていた。しかし、そうはならなかった。月日が経つにつれ、私の人生はより無意味で耐えがたいものとなっていく。私はいつも、皇子はどのように暮らしているだろうか、と考えてばかりいる。あの子の母親とふたりで一緒にあの子の養育をしたいと望んでいた。あなたがあの子の母親の代わりになってはくれまいか。今では過去の形見となったあの子を連れて、私の許へ来てはくれまいか」。このような手紙だった。その中には他にもいくつかの指示が記されていた。そして一編の詩。その詩の意味はこうだった。</p> <p>「玉垣 [tamaagaakii] の沼地の上を吹き抜ける露を帯びた冷たい風の音を聞いていると、花菖蒲の繊細な苗を思い出す」</p> <p>これは幼い皇子のことを象徴の幕に隠して語ったものだった。彼女は手紙を最後まで読まずに言った。</p>
<p>27 母君は桐壺更衣の入内のいささつを語り、横死のようなさまを嘆く 「命長さの〜」（1094 / 一三⑥ / 二九）</p>	<p>「命長さの、いとつらう思ひたまへ知らるるに、松の思はんことだに、恥づかしう思ひたまへばれば、もししきに行きかひはべらんことは、ましていと憚り多くなん。かしこき仰せ言をたびたび承りながら、自らはえなん思ひたまへたつまじき。若宮は、いかに思ほし知るにか、参りたまはんことをのみなむおぼし急ぐれば、ことわりに悲しう見たてまつりはべる、など内々に思ひたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも、いまいましく、かたじけなくなむ」とのたまふ。</p>	<p>「長命とは、人生の辛さを増すことだと知ってはいるものの、どうすることもできません。私は高砂 [taakaasaag] の松の前で恥づかしさのあまり頭を垂れてしまうほど長い間、この世におります。それなのに百柱が立つ皇宮へ行き、あちこち歩き回るなどという大それたことがどうしてできましよう。天皇のありがたいご命令が度々届いていますが、それに従うことはできませんでした。しかし皇子のことにに関して言うなら（あの子がこの天皇のご命令を聞いたかどうかは分かりませんが）戻りたくてそわそわしております。それに驚くまでもなく、あの子はたいそう悲しんでおります。陛下の許へ行き、こうお伝えください。そして私の話からあなたが何か察したことがありなら、それもお伝えください。幼い子にとって、ここは確かに絶望をかきたてる場所です…。」</p>
<p>28 若宮が就寝した後、勅使役の命婦は役目を終えたために帰参を急ぐ 「宮は大殿籠〜」（1149 / 一三⑫ / 三〇）</p>	<p>宮は大殿籠（おほのごも）りにけり。 「見たてまつりて、くはしう御ありさまも奏しはべらまほしきを、待ちおはしますらんに、夜ふけはべりぬべし」とて急ぐ。</p>	<p>矢筒持ちの娘は言った。「どうやら皇子は寝ておられるようですね。ああ、皇子にお会いして、天皇陛下にその様子をお伝えできたならよかったのに。ですが、もう遅くなってしまいましたし、宮殿でも私の帰りを待っていることでしょう。」 彼女が立ち去ろうとしたその時、母親が言った。</p>
<p>29 亡き更衣の母君は、横死した我が子への尽きせぬ思いを命婦に語る 「くれ惑ふ〜」（1163 / 一三⑭ / 三〇）</p>	<p>「くれ惑ふ心の闇も堪へがたき片端をだに、はるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも、心のどかにまかでたまへ。年ごろ、嬉しく面だたしきついでにて、立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、返す返すつれなき命にもはべるかな。生まれし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、『ただ、この人の宮仕への本意、かならず遂げさせたまつれ。我亡くなりぬて、口惜しう思ひくづぼるな』と、返す返す諫めおかれはべりしかば、はかばかしう後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに、出だしたてはべりしを、身にあまるまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつ、まじらひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなりそひはべりつるに、横さまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなん、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になん」と、言ひもやらず、むせかへりたまふほどに、夜もふけぬ。</p>	<p>「暗澹たる思いの闇の中を彷徨い歩く者は、時折、他人と会話をしている間に自らの道を明るく照らしてくれるような光を見出すこともあります。お願いだから、いつかお暇な折に、あなたのご意志でここへ来てくださいな。昔、幸せな時や喜ばしい時には、時々ここを訪ねてくれましたね。そして今日、この知らせを持っていたら！運命を信じる者はなんと愚かなのでしょうか。あの娘が生まれた時から、あの娘の父親は自分が死ぬその時まで娘を宮廷に上げたいと望んでいました。そして、もし自分が死んだらその魂が悲しまないよう、私がそれを実現するように、と何度も何度も言っておりました。それ故、後見人がいないためにあらゆる場面で困難に見舞われるであろうと承知しながら、亡き夫の望みを叶えるのだと心に決めておりました。あの娘は、宮廷に入ると、恩寵の雨が自分に降り注ぐのを目の当たりにしました。しかし同時に、野蛮な嫉妬の苦しみにも黙って耐えなければなりません。次第に嫉妬と嫌悪の重荷は背負いきれないほど膨れ上がり、そして死んでしまったのです。死んだのではなく、殺されたようなものです。実のところ、天皇があの子に示そうとした愛情は（少なくとも得体のしれない心の闇の中で私が感じたことですか）冷淡さ以上に致命的でした。彼女は涙で声が完全に遮られるまで、このように語っていた。すでに夜の闇が広がっていた。</p>
<p>30 命婦は帝が悲涙の内に更衣との因縁を偲ぶさまを語って帰参を急ぐ 「上もしか〜」（1256 / 一四⑩ / 三一）</p>	<p>「上もしかなん。 『我が御心ながら、あながちに人目驚くばかりおぼされしも、長かるまじきなりけり、と今はつらかりける人の契りになむ。世に、いささかも人の心をまげたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはては、かううち捨てられて、心をさめむかたなきに、いと人わろうかたくなになりはべるも、前の世ゆかしうなん』 と、うちかへしつつ、御しほたれがちにのみおはします」と語りて尽きせず。泣く泣く、 「夜いたうふけぬれば、今宵過ぐさず、御返り奏せん」と急ぎ参る。</p>	<p>娘は答えた。 「そのことはすべて、天皇ご自身もおっしゃっていました。それどころか、自分自身の望みと決意に反して、どうしようもなくわがままな情熱の餌食となってしまったことで、人びとに非難の機会を与えてしまったのは、ふたりがほんのわずかな間しか一緒にいることができないと運命づけられていたからこそ、定められていたのだろう。これは、すぐに別れざるを得ない者たちの激しく高ぶった情熱だったのだ。私の愛のせいで誰かを苦しめるようなことはしないと固く決めていたのに、結局、彼女のせいで蔑にされたのだと思った者たちの反感という重荷を彼女に背負わせてしまった、とすら言いました。 このように度々天皇が泣きながら話すのを聞きました。もう夜もすっかりふけてしまいました。夜が明ける前に宮殿に伝言を届けなければなりません。」 泣きながらこう言って立ち去ろうとした時、</p>

<p>31 月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える「月は入り方〜」(1315 / 一五④ / 三二)</p>	<p>月は入り方の、空清う澄み渡れるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いとたち離れにくき草のもとなり。 鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かなえも乗りやらず。 「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人かことも聞こえつべくなん」と、言はせたまふ。</p>	<p>澄み切った空には沈みかけの月が輝き、冷たい風に震える草の中で鈴虫が絶え間なく大きな鳴き声をあげていた。この草むらから離れて前へは進み難く、矢筒持ちの娘は帰りたくないと思った。そんな時、娘はこのように詠まれた詩を思い出した。</p> <p>「夜から朝までずっと私の涙はとめどなく流れる まるで決して止むことのない鈴虫の泣き声のように」</p> <p>母親が返した。</p> <p>「幾千もの虫の声がこだまするこの草むらに 雲の上に住む人たちの涙の露が降りる」</p> <p>宮廷に出仕する人びとは雲の上に住む人と呼ばれているのだ！</p>
<p>32 鞍負命婦の帰参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る「をかしき御贈〜」(1358 / 一五⑩ / 三二)</p>	<p>をかしき御贈り物などあるべきをりにもあらねば、ただかの御形見にとて、かかる用もやと残したまへりける御装束一領、御髪上げの調度めく物添へたまふ。</p>	<p>それから母親はこの使いの娘に、手元に残っていた、あるいは天皇が贈った亡き娘の鏡や櫛、その他、幾つかの品物を渡した。娘亡きあと、これらの品物は無用なものだったが、天皇にとっては過ぎ去りし日の形見の品となり得るものであった。</p>
<p>33 亡き更衣の女房たちは若君の参内を促すも祖母君は手放し難く思う「若き人々〜」(1378 / 一五⑫ / 三二)</p>	<p>若き人々悲しきことはさらにもいはず、内裏わたりを朝夕にならひて、いとさうざうしく、上の御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とく参りたまはむことを唆しきこゆれど、かくいまいましき身の添ひたてまつらんも、いと人聞き憂かるべし、また見たてまつらでしばしもあらんは、いと後ろめたう思ひきこえたまひて、さすがともえ参らせたまつりたまはぬなりけり。</p>	<p>皇子とともに来ていた乳母やお守役たちは自分の女主人が死んでしまったことよりも、宮殿の興味深い光景や、趣のある季節ごとの催し物を突然奪われてしまったことを悲しんでいた。彼女たちはすぐにでも戻りたいと懇願し始めた。しかし母親は行くことを了解しなかった。なぜなら、あちらではより一層孤独を感じるのとわかってきたからだ。その一方で、もし子どもを送れば、毎日その子のことを案じて気を揉むことになるだろう、とも考えていた。こうした困惑から、この時は自分が宮殿へ行くことも、皇子だけを送ることもしなかった。</p>
<p>34 桐壺帝は女房と語り明かし長恨歌の絵を見ながら命婦の帰参を待つ「命婦は〜」(1420 / 一六③ / 三三)</p>	<p>命婦は、まだ大殿籠らせたまはざりける、とあはれに見たてまつる。御前の壺前裁の、いとおもしろき盛りなるを御覧するやうにて、忍びやかに、心憎き限りの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり。このごろ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貴之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ。</p>	<p>矢筒持ちの娘が戻ると、天皇はまだ起きていた。咲き誇る鉢植えの花々の鑑賞を口実に、宮殿の前で彼女を待っていたのだ。そして四、五人の信頼のおける侍女が天皇と話をしていた。この頃、天皇は毎朝夕に『永久に続く罪 [長恨歌のこと]』の絵を眺めることを習慣にしていた。本文は亭子院 [tijiinoin] が書き写し、大和言葉と海の向こうの人びとの言葉で書かれた伊勢 [aiaz] と貴之 [tisuuraayuukii] の詩が添えられていた。この時、この詩の物語が話題だった。</p>
<p>35 帝は里邸の様を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返書に心を遣う「いと細やか〜」(1469 / 一六⑧ / 三三)</p>	<p>いと細やかにありさま問はせたまふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御返り御覧ずれば、 「いともかしこきは、置き所もはべらず。かかる仰せ言につけても、かきくらす乱り心地になん。 あらし風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞ静心なき」 などやうに乱りがはしきを、心をさめざりけるほど、と御覧じゆるすべし。</p>	<p>天皇は娘を見つけるとすぐにそちらへ向き直り、たいそう熱心にあらゆることを尋ねた。あの哀愁に満ちた場所の仔細、そして隠された現状すべてを聞かせると、母親からの手紙を渡した。その中にはこう書かれていた。</p> <p>「陛下のご命令を、申し上げようもないほどの崇敬の念で読ませていただきましたが、そのために、私の頭の中にはひどい混乱と闇が広がりました。</p> <p>その他に、孫(幼い皇子)のことを風から守ってくれる木から手折られた花に例えた詩も送っていた。悲しみの傷が未だ癒えぬ者にしか書くことができないほど、乱れたひどい字で書かれていた。</p>
<p>36 悲嘆を隠せない帝は更衣入内の頃を思い出し祖母君をも不憫に思う「いとかうしも〜」(1504 / 一六⑫ / 三四)</p>	<p>いとかうしも見えじ、とおぼしつむれど、さらにえ忍びあへさせたまはず。御覧じはじめし年月のことさへ、かき集めよろづにおぼし続けられて、時の間もおぼつかなかりしを、かくても月日は経にけり。あさましうおぼしめさる。 「故大納言の遺言あやまず、宮仕への本意深くものしたりし喜びは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ、言ふかひなしや」 とうちのたまはせて、いとあはれにおぼしやる。</p>	<p>天皇は自分の使いの前で、なんとか自分自身を抑えようとしていたが、亡き愛人の初めての出会いの光景を思い描くや、数多の思い出が彼を包みこんだ。そして次から次へと湧き上がる思い出に引き寄せられ、ついには、特に気にも留めず、無頓着なうちにこれほどの時と日々が過ぎていったのかと思い、身震いした。 しまいに彼はこう言った。 「私も、彼女の父親の最期の願いが見事に叶えられようとしていると思います、喜んでいたので。だが、そんな話をしても仕方がない。</p>
<p>37 帝は若宮の将来を約束し、贈物から長恨歌の叙に思いを重ねて歌う「かくても〜」(1543 / 一七③ / 三四)</p>	<p>「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなん。命長くこそ思ひ念せめ」 などのたまはす。 かの贈り物御覧ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりけむしるしの叙ならましかばと思ほすも、いとかひなし。 尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく</p>	<p>もし幼少の皇子が生きていれば、また機会が訪れるかもしれない。あの子の長生きを祈らねば」。 彼は娘が持ち帰った贈り物を見て、泣きながら言った。</p> <p>「ああ、お前があちらから、あの人魂の住み処から、魔術師のようにあの人か身に付けていた鳥の形をしたピンを持ってきてくれたら良いのに」。そう言って、この詩を詠んだ。</p> <p>「ああ、あの人を探し出し、わたしにあの人魂がどこに住んでいるのかを教えてください魔術師がいたら良いのに</p>

<p>38 帝は玄宗と楊貴妃の物語から、更衣との尽きぬ愛情を恨めしく思う「絵に描ける〜」（1572／一七⑦／三五）</p>	<p>絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いと匂ひ少なし。太液の芙蓉、未央の柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひは麗しうこそありけめ、懐かしうらうたげなりしをおぼし出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかはさむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほど、尽きせず恨めしき。</p>	<p>（彼女の顔を思い出し）天皇の記憶は熟練した画家が書いた楊貴妃の絵の方へと向かった。しかしその中には生命の香りなどありはしない！詩人が、楊貴妃の美しさは皇帝の池のハスの花か未央宮のヤナギのようであったと言っているが、しかしこの絵が一体何だというのか？まがい物の中国風の媚びを表わした、絵具の集成ではないか。</p> <p>しかし亡き愛人のことを思い出すと、彼女の声や女性らしい容姿には、花々の美しさも小鳥たちの鳴き声も敵いはしない、と思った。運命は、ふたりが昼も夜も話していたあの誓いを果たす機会を与えてくれなかった、いつもそう考えては悲しみに沈んでいた。その誓いとは、ふたりはひとつの翼をもつ一對の鳥のように暮らそう、ひとつの枝をもつ一對の木のように生きよう、というものだった。その思い出がよみがえるや、</p>
<p>39 帝の心を踏みにじるように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る「風の音〜」（1615／一七⑩／三五）</p>	<p>風の音、虫の音につけて、もののみ悲しうおぼさるるに、弘徽殿には久しく上の御局にも参上りたまはず、月のおもしろきに、夜ふくるまで遊びをぞしたまふなる、いとすさまじう、ものしと聞こしめす。このごろの御気色を見たてまつる上人、女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおしたち、かどかどしき所ものしたまふ御方にて、ことにもあらずおぼし消ちて、もてなしたまふなるべし。</p>	<p>風のそよぎと虫の美しい鳴き声が彼を悲しみの深い井戸へと突き落とした！弘徽殿は長いこと天皇の部屋へ入ることを許されていなかったが、いま、月夜に遅くまで音楽の網を編み続ける機会を手にしていて。彼にとっても苦痛だったのは明らかだ。そして一緒にいた宮廷の女中たちや侍女たちもこれに心を痛めた。しかし、この苦痛を与える女性は自分の地位の自尊心を頼りに、宮殿では特筆すべきようなことは何も起こらなかったかのように行動しようとしていた。</p>
<p>40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しみ歌う帝は、眠ることすらできない「月も入りぬ〜」（1660／一八③／三六）</p>	<p>月も入りぬ。 雲のうへも涙にくる秋の月いかですむらん浅茅生の宿 おぼしめしやりつつ、燈火（ともしび）をかかげ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目をおぼして、夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。</p>	<p>すでに月は沈んでいた。天皇は灌木の茂る屋敷に住む愛人の母親のことを思い出した。驚きに沈んだ思いは一編の詩の中に流し込まれた。その意味はこうだった。</p> <p>あの人（つまり母親）は秋の季節の月（娘）が沈むのをどのように眺めているのだろうか！なぜなら月が沈んだ時、雲よりもさらに高いところに住む私たちでさえ泣いていたのだから。</p> <p>天皇は灯火の炎を強くし、感情も動きもないまま座っていた。しかし、しばらくして宮殿の番所の鐘が夜中の一時を告げる音を聞くと、彼は人目につかないように、立ち上がって自室へと戻って行った。眠れなかったので、夜明け前には起きてしまった。</p>
<p>41 帝は政治まで疎かにしかねない悲しみの中で食事も召し上がらない「朝に起き〜」（1693／一八⑦／三六）</p>	<p>朝に起きさせたまふとても、「明るも知らず」とおぼし出づるにも、なほ朝政はおこたせたまひぬべかめり。ものなどもきこしめさず。朝餉の気色ばかりふれさせたまひて、大床子の御膳などは、いと遙かにおぼしめしたれば、陪膳にさぶらふ限りは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。すべて、近うさぶらふ限りは、男女、いとわりなきわざかな、と言ひ合はせつつ嘆く。</p>	<p>人びととの朝の謁見の日課にもまったく関心を払わなかった。まるで伊勢の詩のこの言葉、「朝が窓から覗いていることも知らずに」を思い出したかのようだった。天皇は朝食の干し飯も食べず、机の上に飾られた御馳走にも目を向けなかった。彼の料理人も召使も主人のこの様子を見て悲しんだ。従者は男性も女性も皆、私たちの仕事はなんと無意味なものになってしまったのだろう、と互いにひそひそと言いつつ合点した。</p>
<p>42 帝に奉仕する者たちも政道放棄を嘆き楊貴妃の例まで引合いになる「さるべき契〜」（1731／一八⑩／三七）</p>	<p>「さるべき契こそおはしましけめ、そこらの人の譏り、恨みをも憚らせたまはず、この御ことにふれたることをば、道理をも失はせたまひ、今はたかく世の中のことをも、思ほし捨てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなり」と、人の朝廷の例までひき出で、ささめき嘆きけり。</p>	<p>彼らは、天皇は何か不必要な誓いを守っているのだろうか、と考えた。臣民の不平不満も全く気に留めず、絶えず物思いに耽っていた。その結果、彼は怠惰だという汚名が、以前と同じように国にとって危険なものとなった。人びとはまた、他の国の皇帝についての噂話を含むひそひそ話を始めた。</p>
<p>43 若宮参内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵「月日経て〜」（1762／一九②／三七）</p>	<p>月日経て、若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならず、清らにおよすけたまへれば、いとゆゆしうおぼしたり。 明る年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしうおぼせど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふくおぼし憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、「さばかりおぼしたれど、限りこそありけれ」と、世人も聞こえ、女御も御心おちあたまひぬ。</p>	<p>こうして月日が過ぎ去り、幼少の皇子が宮廷に連れてこられる日もやって来た。子供は成長して、この上ない美しさの持ち主となっていた。天皇はこの子を見てとても喜んだ。来たる春に、王座の後継者が発表されることになっていた。そして彼の心の中に、第一皇子を無視してこの子を皇太子に定めたい、という激しい欲求が生まれた。しかし宮廷にはその選択を指示する者は誰もおらず、臣民がそれを好むことも難しかった。そんなことをしたら、この子の栄光が増すどころか、災難が降りかかっていたことだろう。そこで、彼はこのような考えを持っていることを世間全体に隠した。人びとはこれに大変安堵して言った。「天皇は子供を溺愛しているけれど、それにも限度がある」。宮殿の特別な女性たちもいくぶん安心したのだった。</p>
<p>44 祖母君は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去「かの御祖母〜」（1805／一九⑥／三七）</p>	<p>かの御祖母北の方、慰む方なくおぼしづみて、おはすらん所にだに尋ね行かんと願ひたまひしるしにや、つひに亡せたまひぬれば、またこれを悲しびおぼすこと限りなし。御子六つになりたまふ年なれば、このたびはおぼし知りて恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れ睡びきこえたまへるを、見たてまつりおく悲しびをなむ、返す返すのたまひける。</p>	<p>幼少の皇子の母方の祖母の悲しみは、我慢できないものになっていた。そして、亡き娘の魂を探さずにはいられなくなり、彼女もこの世を去った。天皇の上に再び悲しみの雲が立ち込めた。今回はすでに六歳になっていた皇子も何が起こったのかを理解し、泣きじゃくっていた。この子はしばしば、何年も愛情をこめて育ててくれた亡き祖母を最後に見た時の話を、とても辛そうに話していた。</p>

<p>45 若宮七歳の読書始めの後は、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服「今は内裏に〜」（1844 / 一九① / 三八）</p>	<p>今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば、読書始めなどせさせたまひて、世に知らず聡うかしこくおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧ず。 「今は誰も誰もえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」 とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、仇、敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。</p>	<p>いまや、この子は常に宮殿に住むようになり、七歳になると教育が始まった。教育におけるこの子の並々ならない鋭敏さを見て、父親は驚いた。天皇はもう誰もこの子に不親切に接しはしないだろうと考え、この子を弘徽殿やその他の女性の宿所にこう言って連れて行くようになった。 「もう母親は死んでしまったのだから、この子に親切してくれるだろうね」。 こうして皇子は天皇の後宮に行き来するようになった。ガサツさこの上ない兵士も、ひどく冷酷な敵も、この子を見たら微笑まずにはいられなかった。弘徽殿でさえもこの子を自分のもたら追いやることはなかった。</p>
<p>46 若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音曲にも秀でる超人さを発揮「女御子たち〜」（1904 / 二〇② / 三九）</p>	<p>女御子たち二所、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしう恥づかしげにおはすれば、いとをかしううとけぬ遊びぐさに、誰も誰も思ひきこえたまへり。 わざとの御学問はさるものにて、琴、笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続けば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。</p>	<p>彼女にはふたりの娘がいたが、この皇子のようではなかった。この子は宮廷の女性たちと一緒に遊んでいたし、この子がとても恥ずかしがり屋で美しかったので、女性たちも遊びに加わることを大いに楽しんでた。真面目な学芸を習得するのはもちろんのこと、この子はあつという間にバルバトや竹笛 [ パーンスリー ] の音で周りの雰囲気を満たすことも習得した。しかし、もし私がこの子の優秀なところをすべて挙げたとしたら、この子がとても煩わしい人間になってしまう、とあなたは思うだろう。</p>
<p>47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮をみて不思議がる「そのころ〜」（1955 / 二〇⑥ / 三九）</p>	<p>そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こしめして、宮の内に召さんことは、宇多の帝の御誠あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館につかはしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人驚きて、あまたたび傾きあやしぶ。 「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷の固めとなりて、天下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。</p>	<p>その頃、幾人かの朝鮮人が宮廷にやって来た。その中には占星術師もひとりいた。天皇はこれを聞いても、その人を宮殿に呼ぶことはなかった。なぜなら宇多天皇 が発した法律に照らして、外国人は宮殿に入ることができなかったからだ。しかしそれでも彼は密かに皇子を朝鮮人たちが滞在している客人の間へ送った。この子は司法書記官に付き添われて行った。書記官がこの子を自分の息子だと説明する手筈になっていた。占星術師はこの子の顔立ちや容姿を見て仰天し、何度も頭を振ることでその驚きを表現した。 「この子には、国の主となることができるしるしが見えます。そしてこの子の運命にそう書かれていたとするならば、全国の大帝となるでしょう。しかし、さらにじっくり見てみると、この子の治世は混乱と不安が蔓延る、とも見て取れます。そしてもし単なる国の高官や相談役となったなら、大して幸福なことは起きないでしょう。とういうのも、そうした状態は私が今お話しした王としてのしるしに反するものだからです」</p>
<p>48 博識の右大弁と高麗人が漢詩を作り交わし若宮も興深い詩句を作る「弁も、いと〜」（2019 / 二〇⑬ / 四〇）</p>	<p>弁も、いと才かしく博士にて、言ひ交したることどもなん、いと興ありける。文など作りかはして、今日明日帰り去りなるとするに、かくありがたき人に対面したる喜び、かへりては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、皇子もいとあはれなる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたてまつる。朝廷よりも多くの物たまはず。おのづからことひろごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかとおぼし疑ひてなむありける。</p>	<p>司法書記官は聡明で賢く、また学者であった。彼は占星術師と興味深い会話を始めた。ふたりは互いに詩や論説について意見を交わし、占星術師は短い挨拶の中で言った。「出立の前にこれほど非凡な才能の持ち主にお会いでき、とても光栄です。もう発たなければならぬのが残念ですが、この旅のとても気持ちのいい印象を持って帰ります」。幼少の皇子は占星術師にとっても美しい一編の詩を差し出した。彼はこの上ない称賛と賛美の意を表し、この子にとっても美しい贈り物を贈った。その返礼として、天皇は宝物庫から占星術師に多くの褒美と贈り物を授与した。これらのことはすべて秘密裏に行われたが、どのようにしてか皇太子の母方の祖父、左大臣とその友人たちにこの噂が伝わった。彼らはいそがしい念を持つようになった。</p>
<p>49 帝は若宮を臣籍降下させ朝廷の補佐役にと決めると学問に励ませる「帝、かしこき〜」（2075 / 二一⑤ / 四〇）</p>	<p>帝、かしこき御心に、倭相を仰せておぼしよりにける筋なれば、今までの君を親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけりとおぼして、無品親王の外戚の寄せなきにてはただよはさじ、我が御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなん、行く先も頼もしげなめることとおぼし定めて、いよいよ道々の才を習はせさせたまふ。</p>	<p>天皇は地元で占星術師を召しだし、私自身もこの子に特別なしるしを見たので、今までの皇子にするのを避けてきたのだ、と言って彼らを試した。占星術師たちは口をそろえて、陛下はたいへん思慮深く事を運ばれた、と言った。天皇も頭の中で、天皇の権力や財産の圧倒的な影響力が無い限り、この子を皇太子に定めて災難に巻き込むようなことはするまい、と固く決意した。彼は心の中でこう言った。「私自身の権力は極めて不安定だ。私がしてやれることは、私に代ってこの子に国の高官たちの監視をさせることだ」。 皇子の将来について、これこそ適切な決断だと考え、天皇は真剣にこの子の教育に意を注ぎ、学芸のあらゆる分野を極めさせようと決心した。</p>
<p>50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断「際ことに〜」（2120 / 二一⑩ / 四一）</p>	<p>際ことにかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば、世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこき道の人に勸へさせたまふにも、同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべくおぼしおきてたり。</p>	<p>皇子は教育において生まれながらの才能を顕したので、その子を平凡な位の人間にしておくのはとても残念なことだった。しかしこの子を皇太子に定めれば、人びとが疑いの念を抱くに決まっていた。それで、天皇は天文学や占星術に精通した学者たちに相談した。彼らは声をそろえて、この子をミナモト [miinaamootuu] (つまりゲン [gin]) の家系の一員とするのがよいだろう、と進言した。そこでそのようにされた。</p>
<p>51 更衣が忘れられず世を疎ましく思う帝に、先帝の四の宮の噂が届く「年月にそへ〜」（2147 / 二一⑬ / 四一）</p>	<p>年月にそへて、御息所の御ことをおぼし忘るるをりなし。慰むやとさるべき人々（大島本「人々を」）参らせたまへど、なずらひにおぼさるるだにいとかたき世かな、と疎ましようのみよろづにおぼしなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします。</p>	<p>数年が過ぎて、天皇は亡き愛人を忘れなかった。天皇に興味を持たせよう、と、宮殿には多くの女たちが連れて来られたが、天皇は全員から顔をそむけてしまった。失ってしまった愛人のような人はこの世にはいない、そう思っていた。その頃、美しいとたいそう評判の女性がひとりいた。彼女は先の天皇の四番目の皇女だった。</p>
<p>52 典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏上し帝の気を引く「母后世になく〜」（2173 / 二二② / 四一）</p>	<p>母后世になくかじづきこえたまふを、上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、 「亡せたまひにし御息所の御容貌に似たまへる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、後の宮の姫宮こそ、いとようおぼえて生ひ出でさせたまへりけれ。ありがたき御容貌人になん」と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねむごろに聞こえさせたまひけり。</p>	<p>そしてその母親、つまり未亡人の皇后は並々ならぬ意を注いで彼女を養育したと広く知れ渡っていた。先代の天皇に仕えた後宮のある年老いた女性は、この年若い皇女を良く知っていた。子供のころから知っていたし、今でも時々遠くから見る機会があったからだ。この老女はよくこう言っていた。 「私は三代の宮廷に仕えましたが、天皇の亡き愛人のような人は見たことがありません。もしいるとすれば、未亡人の皇后の娘です。あの人の美しさが類稀なことは疑いようもありません。」この話を彼女は天皇にも聞かせた。天皇はその話にどれほどの真実があるのかを知りたがっているかのように、注意深く聞いていた。</p>

53 帝を巡る女たちの怖さを言う四の宮の母が死ぬと、入内の道が開く「母后、「あな〜」(2233 / 二二⑧ / 四二)	母后、 「あな恐ろしや、春宮女御のいとさがなくて、桐壺更衣の、あらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」 と、おぼしつみで、すがすがしうもおぼしたたざりけるほどに、后も亡せたまひぬ。心細きさまにておはしますに、 「ただ我が女御子たちの同じつらに思ひきこえん」 と、いとねんごろに聞こえさせたまふ。	未亡人の皇后はこれを聞いて怖れた。厄介事を起こせばかりの弘徽殿が、自分の敵に対して明け透けに残忍な態度をとっていたのを覚えていたからだ。はっきりとその恐怖を口にすることはできなかったが、何かと口実を作っては娘を天皇の御前に召しだすのを遅らせていた。そうこうしているうちに、突然、未亡人の皇后が亡くなってしまった。 天皇は喪中の皇女が大変ひどい様だと聞き、今日から自分の娘である皇女のように扱おう、と言伝を送った。
54 不思議なほど更衣に似る四の宮は周りに押され入内し藤壺と称する「さぶらふ人々〜」(2264 / 二二⑩ / 四二)	さぶらふ人々、御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、かく心細くておはしませんよりは、内裏住みせさせたまひて、御心も慰むべくなどおぼしなりて、参らせたまへり。藤壺と聞こゆ。げに御容貌ありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる。	兄である兵部卿 [hyobuukyō]、召使、そして後見人たちは宮殿へ行くことで気がまぎれるかもしれない、もしかしたら家の重苦しい雰囲気よりもあちらの雰囲気の方が良いかもしれない、そう考えて彼女を宮廷へ差し出した。その人は、宮殿の藤壺 [fujit suubuu] とよばれる区画に住んでいた。そして、その人もその名で呼ばれるようになった。天皇は藤壺が愛人に非常に似ているということを否定できなかった。
55 藤壺は皇女の身ゆえに誰に気兼ねもなく、帝の寵愛もしだいに移る「これは人の〜」(2295 / 二三② / 四三)	これは人の御きはまさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけはりてあかぬことなし。かれは、人の許しきこえざりしに、御心ざしあやしくなりしぞかし。おぼし紛るとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなうおぼし慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。	彼女はとても高い位についていたので、誰もがその人を喜ばせようとしていたし、したいことは何でも自由に行うことができた。それに対して桐壺は、天皇の寵愛のせいでいつも危険にさらされていた。なぜなら宮廷の人びとは彼女の地位を認めようとしていなかったからだ。 天皇の昔の愛の跡がかすむことはなかったが、時々、自分の注意を亡き愛人から逸らし、それに似ている藤壺に集中させることで慰めを得ていた。しかし生きることが天皇にとって以前と同様、侘しいままであった。
56 源氏の君は常に父帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見る「源氏の君は〜」(2327 / 二三⑤ / 四三)	源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方は、え恥ぢあへたまはず。いづれの御方も、我人に劣らむとおぼいたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うち大人びたまへるに、いと若ううつくしげにて、せちに隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。	今や源氏(つまりゲンもしくはミナモトの家系のもの)の名で呼ばれていた皇子は、常に父親のもとにいた。あつという間に侍女たちや衣装の間に仕える女性たちと打ち解けたので、毎日天皇の部屋へ召しだされる女性に恥ずかしさを感じることはなかった。女性たちが皆、源氏の愛を得ようと、何とかして他の人より抜きんでようとしたのはごく当たり前のことで、この子が何らかの理由でとても好んでいる女性もいた。大抵の女性は彼に対して大人と同じような接し方をしたが、ただひとり、つまり美しく若いこの新参の皇女はこの子から隠れようとした。しかし、たびたび顔を合わせることは避けられなかった。
57 三歳で母と死別した源氏の君は、母に生き写しだという藤壺を慕う「母御息所も〜」(2370 / 二三⑨ / 四三)	母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり」と典侍の聞こえけるを、若き御心地にとあはれと思ひきこえたまひて、つねに参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。	この子は自分の母親の容姿を覚えてはなかったが、後宮の老女がこの皇女に大変良く似ていたと教えてくれた。それが彼の子供っぽい感情を目覚めさせ、彼女と友達になっていつも一緒にいたい、と思っていた。
58 帝は藤壺と源氏を愛し、更衣の形代である藤壺に源氏は好意を示す「上も、限りなき〜」(2396 / 二三⑪ / 四四)	上も、限りなき御息ひどちにて、 「な疎またまひそ。あやしくよそへきこえつべき心地なむする。なめしとおぼさで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどは、いとよう似たりしゆ糸、かよひて見えたまふも、似げなからずなん」 など聞こえつけたまへれば幼心地にも、はかなき花、紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。	ある日、天皇は藤壺に言った。 「あの子に冷たくしないでおくれ。あの子が君にこれほど興味を示すのは、君があの子の母親にとでも良く似ていると聞いているからだよ。生意気だと思わないで、愛情を持って接してやっておくれ。君の顔形は、母親になれるくらいあの子にそっくりなのだから」。彼は子供であったが、皇女の魔法がかかった美しさに心を奪われた。そして初めて、自分の中にはっきりとした愛の芽生えを感じた。
59 弘徽殿と藤壺が陰悪な中、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃「こよなう〜」(2433 / 二四① / 四四)	こよなう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿女御、またこの宮とも御仲そばそばしきゆ糸、うちそへて、もとよりの憎さもたち出でて、ものしとおぼしたり。世に類ひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほにほはしさはたとへん方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。	弘徽殿は決してこの皇女が好きではなかった。今また源氏に対する古い敵意が湧きあがった。彼女自身の子供たちも並はずれて美しいと思われていたが、源氏には敵わなかった。人びとは源氏をその美しさゆえに光源氏 [hikaaru ginji] つまり「光り輝く額」の源氏という名で呼ぶようになった。藤壺皇女を称賛する人はたくさんおり、「太陽の顔」の皇女の名で呼ばれるようになった。
60 光源氏は十二歳で兄東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う「この君の〜」(2483 / 二四⑤ / 四四)	この君の御童姿、いと変へまうくおぼせど、十二にて御元服したまふ。居起ちおぼしいとなみて、限りあることに、事をそへさせたまふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式、よそほしかりし御響きにおとさせたまはず。所々の響など、内蔵寮、穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなることぞ、ととりわき仰せ言ありて、清らを尽くして仕うまつれり。	このように美しい男の子に成人男性の衣装を着せてしまうのは、なんだか気が引けた。しかしこの子もすでに12歳になり、宮廷へのお披露目の時がやって来た。天皇は盛大に準備をおこなうように、と指示を出した。さらには、決められている以上に豪勢に手配するようにと言い張った。昨年、皇太子のお披露目の儀式が南の大広間で執り行われたが、何もかもこれほど盛大ではなかった。さまざまな場所で開かれることになっていた宴や、宝物庫、穀物庫の見張り人の監督も、役人たちによる手落ちがないようにと天皇自らが担当した。その時がやってくると、すべてが完璧であった。
61 清涼殿で左大臣が光源氏に冠を被せ、帝は更衣がいたらと感極まる「おはします〜」(2537 / 二四⑩ / 四五)	おはします殿の東の廂、東向きに椅子立てて、冠者の御座、引き入れの大臣の御座、御前にあり。申の時にて源氏参りたまふ。みづら結びたまへるつらつき、顔の匂ひ、さま変へたまはむこと惜しげなり。大蔵卿、蔵人仕うまつる。いと清らなる御髪をそぐほど、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばとおぼし出づるに、堪へたきを、心強く念じかへさせたまふ。	儀式は天皇の特別宮殿の東の大広間で執り行われた。天皇の玉座は東向きに、皇子とお披露目のために差し出す者(左大臣)と対面するように置かれた。 源氏は昼の三時ちょうどに(日本では猿の刻と呼ばれている)到着した。子供っぽい頭髪がとても美しかった。お披露目のために差し出す者の役目はこの子の頭髪をハナズオウ色の紐で結ることだったが、もうこの子のこの姿が無くなってしまふのを残念に思っていた。そればかりか宝物庫の書記官も、この子の頭髪を定められた儀式用の剃刀で切らなければならないことが辛かった。天皇はこれらすべてをじっと見ていた。一瞬だけ、もしこの子の母親が生きていたらこの儀式をどれほど誇らしく思ったことか、と物思いに陥ったものの、すぐさまこの脆い考えを頭から遠ざけた。

62 加冠の儀の後、光源氏の拝舞にみなは感涙し帝も更衣を想い感無量「かうぶり〜」(2580 / 二五① / 四五)	かうぶりにたまひて、御休み所にまかでたまひて、御衣奉りかへて、おりて拝したてまつりたまふさまに、皆人涙落としたまふ。帝はた、ましてえ忍びあへたまはず、おぼし紛るるをりもありつる昔のこと、とりかへし悲しくおぼさる。いとかうきびはなるほどは、あげ劣りやと疑はしくおぼされつるを、あさましうつくしげさ添ひたまへり。	正式に冠をかぶせられると、源氏は自室へ行き成人男性の衣装を来て中庭へやって来た。そこで“忠誠の舞”を献上した。皆の目が潤むほどの実に素晴らしい舞だった。天皇の悲しみは薄れてきていたが、これを見て再び過去の思い出に心をかき乱された。子どもの衣装を脱いでしまったら、華奢な顔立ちのせいで以前のような美しさは残らないだろうと思われていたが、この考えは間違っていた。それとは逆に、彼はさらに美しく見えるようになった。
63 左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする「引き入れの〜」(2623 / 二五⑥ / 四六)	引き入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしづきたまふ御娘、春宮よりも御気色あるを、おぼしわづらふことありける、この君に奉らむの御心なりけり。内裏にも、御気色たまはらせたまへりければ、「さらば、このをりの後見なかめるを、添ひ臥しにも」と、もよほさせたまひければ、さおほしたり。	彼をお披露目のために差し出した左大臣にはひとり娘がおり、皇太子は彼女の美しさに感銘をうけていた。しかし今、大臣はこの縁組を進めるのは止めよう、それよりも源氏に差し出そう、と考え始めていた。天皇の意向を確かめると、源氏にとって強力な姻戚関係ができるという利点に目を付けて、この縁談にとても喜ぶであろうことが分かった。
64 祝宴で左大臣から娘葵の上との結婚を仄めかされ光源氏は恥じらう「さぶらひに〜」(2658 / 二五⑨ / 四六)	さぶらひにまかでたまひて、人々大御酒などまあるほど、親王たちの御座の末に、源氏着きたまへり。大臣気色ばみきこえたまふことあれど、ものの慎ましきほどにて、ともかくもあへしらひきこえたまはず。御前より、内侍、宣旨承り伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御祿のもの、上の命婦取りてたまふ。白き大柱に御衣一領、例のことなり。	宮廷人が皆“親愛の杯”を飲むために集まると、源氏は皇子たちのために確保されていた場所に腰を下ろした。左大臣がやって来て、何か耳打ちをした。しかし皇子は照れて何の返事もできなかつた。そこへ、天皇の侍従がやって来て、天皇の御前にいますぐ参上するよう、大臣に告げた。大臣が玉座の前へ進み出ると、衣装の間の侍女のひとりが“特別な白い下着”と“乙女の衣”を手渡した。皇子をお披露目する者の立場上、習慣としてこの品を得る権利があった。
65 左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拝舞する「御盃のついで〜」(2703 / 二五⑭ / 四七)	御盃のついでに、 いとなきはつもとゆひに長き世をちぎる心は結びこめつや 御心ばへありて驚かせたまふ。 結びつる心も深きもとゆひに濃きむらさきの色しあせずは と奏して、長橋よりおりて、舞踏したまふ。	その後、天皇は自分の特別な杯で酒を飲ませると、一編の詩を詠んだ。この詩の中には、ハナズオウ色の紐で頭髪を結る儀式が両家をひとつの縁で結ぶ象徴となるように、という祈りが込められていた。大臣は返答していた。 ハナズオウ色の紐があせぬ限り、いかなる力も両者を引き裂くことはできない。こう言って長い階段から下へ降りると、目の前の中庭に立って忠誠を示す儀礼を行った。
66 左大臣や親王たちは祿を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大「左馬寮の〜」(2730 / 二六④ / 四七)	左馬寮の御馬、蔵人所の鷹据えてたまはりたまふ。御階のもとに、親王たち上達部連ねて、祿ども品々にたまはりたまふ。その日の御前の折櫃物、籠物など、右大弁なん承りて仕うまつらせける。屯食、祿の唐櫃どもなど所狭きまで、春宮の御元服のをりにも数まさされり。なかなか限りもなくいかめしうなん。	ここで、天皇の馬寮の馬や狩り舎の鷹が披露された。これらは贈り物として源氏と与えるとの勅命が下されていた。階段の下では皇子たちや高位の廷臣たちが贈り物をもらおうと列をなしていた。そして事実、さまざまな贈り物が彼らに雨のように降り注いだ。天皇の指示どおり、有能な司法書記官が果物の入った小さい箆や籠をわけ与えた。菓子箱や贈り物が溢れかえっており、身動きをするのも難しかった。このような気前の良さは皇太子のお披露目の儀式のときにも目にしなかつた！
67 元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚「その夜〜」(2768 / 二六⑧ / 四七)	その夜、大臣の御前に、源氏の君まかでさせたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづきこえたまへり。いときびはにておはしたるを、ゆゆしうつくしと思ひきこえたまへり。女君は、少し過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥づかしとおほいたり。	その晩、源氏は左大臣の屋敷（大宮殿という名前だった）へ行き、そこで婚約の儀式が盛大に執り行われた。中には皇子はあまりにも子供っぽく繊細に見えると感じる者もいたが、彼の美しさは皆を驚かせた。ただ、四歳年上だった花嫁だけは彼をただの子供だとみなし、それを恥ずかしくも思っていた。
68 左大臣は帝の信頼に加えて光源氏まで加わり右大臣家を凌ぐ勢いに「この大臣の〜」(2800 / 二六⑯ / 四八)	この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内裏の一つ后腹になんおはしければ、いづ方につけてもいと華やかなるに、この君さへかくおはしそひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき、右大臣の御勢は、ものにもあらずおされたまへり。	該当箇所はナシ
69 左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う「御子ども〜」(2833 / 二七① / 四八)	御子どもあまた、腹々にものしたまふ。宮の御腹は蔵人少将にて、いと若うをかききを、右大臣の、御仲はいとよからねど、え見過ぐしたまはで、かしづきたまふ四の君にあはせたまへり、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになん。	該当箇所はナシ
70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠「源氏の君は〜」(2863 / 二七④ / 四九)	源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえしたまはず。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、類ひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな、大殿君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心一つにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。	天皇は今でも源氏が宮殿にいることを望んでいたの、彼はまだ自分の家を建てていなかった。源氏は今でも心の奥底で、彼女（藤壺）は他の人に比べてなんと美しいのだろう、と思っていた。それゆえ、彼女に似ている人たちと関わりを持ちたいと望んでいたが、そんな人は誰もいなかった。皆が結婚した葵 [aawaa] 姫についてあれこれ騒ぎ立てていたが、源氏には彼女の美点はなにひとつ見受けられなかった。子供っぽい思いがいつも宮殿の娘（藤壺）にかき乱された。そしてこの困惑が災難となった。
71 宮中での光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う「大人になり〜」(2912 / 二七⑨ / 四九)	大人になりたまひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れたまはず。御遊びの折々、琴、笛の音に聞こえ通ひ、ほのかなる御声を慰めに、内裏住みのみ好ましくおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日など、絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は、幼き御ほどに、罪なくおぼしなして、いとなみかしづきこえたまふ。御方々の人々、世の中におしなべたらぬを、選（え）り整えすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなおほなおほしいたつく。	すでに成人とみなされていた彼は、以前のように女性たちの部屋へ行き来することができなかった。しかし時々、催し物の折にあの人（藤壺）の音がバトや竹笛の旋律に混じってかすかに聞こえてくると、安らぎを覚え、青春の盛りにいる自分の存在が重荷に感じられるのだった。五、六日留守にした後、二、三日妻とも一緒に過ごした。義父（左大臣）は妻への無関心は若さゆえの不注意であろうとみなして、困った様子は一切見せず、いつも温かく迎え入れた。彼がやって来る時には、その当時の愉快で明朗な若者たちに集まるよう声をかけ、皇子を楽しませるための物を準備するために、限りない手間がかけられた。

<p>72 後の二条院を修築し、そこで理想の女性と暮らしたいと望む光源氏「内裏には〜」(2976 / 二七④ / 五〇)</p>	<p>内裏には、元の淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々、まかで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ。元の木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りののしる。</p> <p>かかる所に、思ふやうならむ人を据えて住まばやとのみ、嘆かしようほしわたる。光る君といふ名は、高麗人のめできこえて、つけたまつりけるとぞ、言ひ伝へたるとなむ。</p>	<p>宮殿では彼の母親もいつか住んだことのある部屋（淑景舎 [shigiisaa]）が彼の住まいとして公にあてがわれ、母親に仕えた召使たちも、彼に仕えるよう任命された。母方の祖母の屋敷はすっかり荒れ果てていた。天皇の建築局に修繕の命令が下された。木々の生え方や、屋敷を囲む山々の配置は、その場所をととも美しく見せていた。今や池は広げられ、多くの趣にあったものが追加された。源氏は悲しみに浸りながら考えていた。「ああ、ここで誰か好きな人と一緒に住むことができたならなあ」。</p> <p>光もしくは“光り輝く額”という通称は朝鮮人の占星術師がこの皇子の美しさに感銘を受けて与えたものだと言うものもある。</p>
--	---	--